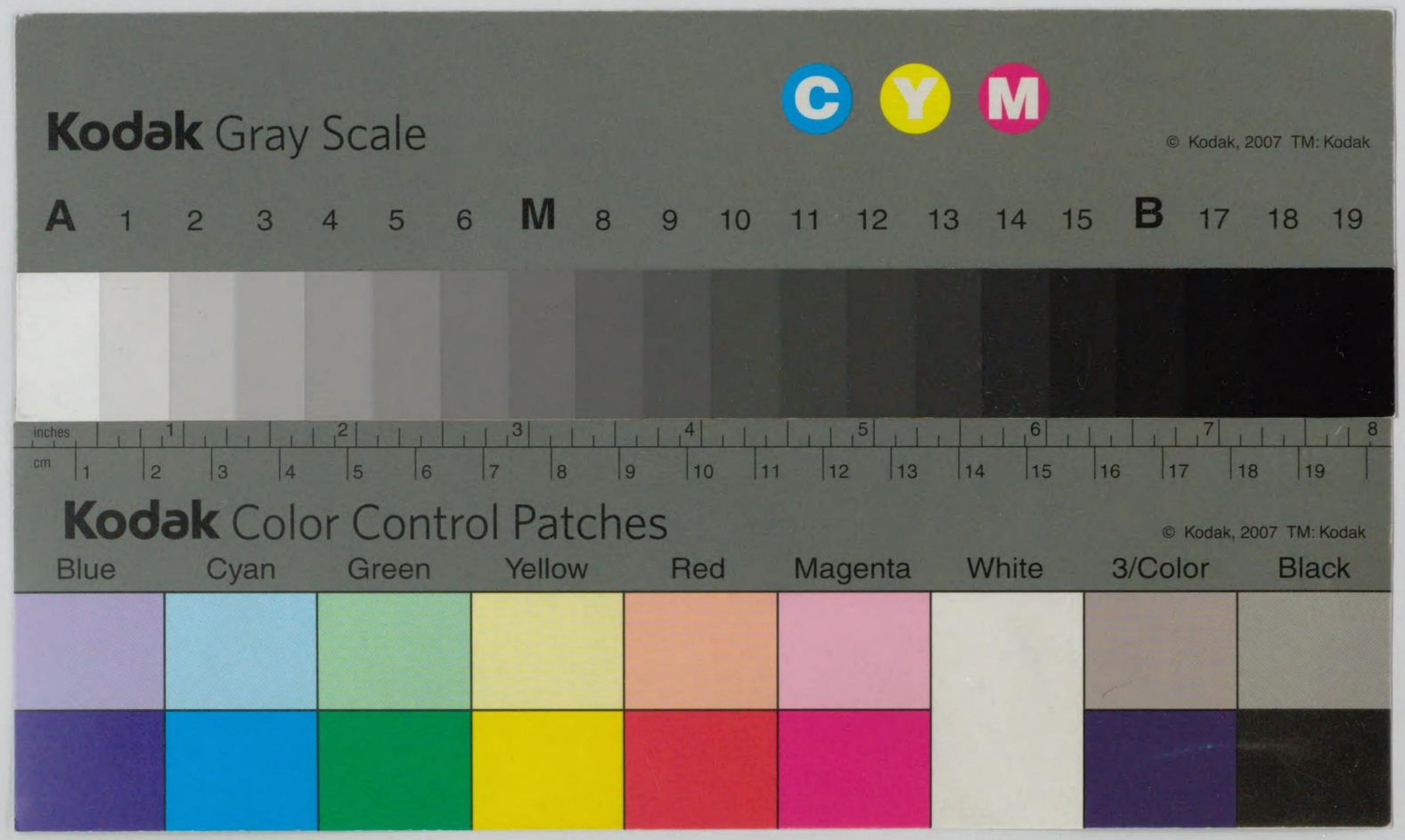


601-29
12005015303 06

帝國圖書館藏

現代史學大系　第七卷

民間傳承論

柳田國男著

東京　共立社刊行

昭和九年・帝國圖書館藏

601-29

序

1 民間傳承論は明日の學問である。一本の稚樹である。山に植ゑるか盆栽にするか、何れとも御互の心次第である。從うて祈願者は同時に豫言者であり得るのである。

2 如何なる學問にも一度は幼稚時代があつた。さうして多くの學問は既に年たけて居る。獨り我々の民間傳承論のみが、今尚至つて頑是ないのである。

3 だから人間の末子と同じ樣に、外部には「好意の輕蔑」があり、內には又「謙遜なる無責任」とも名くべきものがあつた。是を一つづゝ取拂つて行くことが、言はゞ此學問の成長である。

4　最近三十年の進況は、頗る前途を矚目せしむるに足るものがあつた。
日本は此の學問の爲に、未だ耕されざる沃野ではあるが、
諸外國の先蹤は豫め既に其開發の道を講じてくれて居る。

5　三つの重要なる先決問題は、今や三つともにほゞ是に答へることが出來るまでになつた。
第一には目的、卽ち民間傳承の採集と處理に由つて、果してどれだけの智識が添へ得らるゝかといふことである。
是は殆ど人類文化史の全般に及び得ることが明かになつた。

6　以前我々が此方法に由つて成果を收めた區域の、限られて居たことは事實である。
しかも所謂「殘留資料」の得らるゝ以上、是を何れの問題に通用するも差支は無いのであつた。

さうして其資料の多少は一に國柄の如何によることであつた。

7　學問が實際生活の疑惑に出發するものであり、論斷が事實の認識を基礎とすべきものである限り、國の前代の經過を無視したる文化論は有り得ない。
多くの民間傳承は今まで氣付かれざりしものゝ發見である。
過去の講說は總て之に據つて、今一度檢査されなければならぬのである。

8　種々なる假定は之に由つて確認せられると同時に、誤れる在來の想像は事實の前に無力となるであらう。
少なくとも新たなる判斷は、次々に之に由つて導かれ得る希望が生れて來る。
所謂社會科學を「科學」たらしむるの途は、實驗せられたる事實の增加と其整理より他には無い。

9　第二の問題は、範圍卽ち現在は何とあらうとも、結局民間傳承の研究が、他の學問と

相對峙して、どこ迄を管轄し得るかといふことである。

史學は近世に入つてまさしく其版圖を擴張したけれども、尙其能力には窮する所があつた。

其外側は直ちに他の色々の學問と續くべきである。だから中間に無主の空閑を殘してはならぬ。

10 史學を中心として言ふと、我々の學問は是は所謂補充の學であるが、記錄文書の利用し得られる區域こそは、寧ろ甚だしく狹かつたのである。

人生の問題の日に繁く、過去の不審の解說の益々要求せられると共に、新しい方法の來り援くるを必要とするべき場合は多くなつた。

人類學はもと限られたる目途を以て世に現れたものであるが、今は此方法の全部を總括した名とするにふさはしくなつた。

11 過去人生の痕跡の現代に存留するものに據つて、其實狀を推斷しようとする迄は、史學も人類學も一つである。

若し傳統ある名稱を重んずべしとすれば、特に「文字の史料」を要とせぬ部分のみを人類學と名けてよかつたのである。

此場合には民間傳承の研究は當然に此中に含まれることになる。文化人類學といひ社會人類學といふ語は、要するに此見解より出でたる名である。

12 但しこの二つの名稱は、精確に我々の民間傳承學とは一致して居ない。

其上に古くから獨立して居る學問は、何れも努めて分堺差別の論を主張せんとして居る。

故に新たなる總括と提携とは、分類對立以上に有意義である。

13 單なる成長の順序からいへば、考古學は特に形勝の地位を占めて居る。

その新興の氣風は確かに次に生れたる學問を誘導した。

しかも是が爲に自分も亦大に成長して、後次第に連合混化の實を擧げ得たことも亦爭

はれない。

14 神話學と宗教史學との關係も是に近い。

古典研究は行く〳〵新たなる文藝史學の酵母として作用せんとして居る。

從來文書を以て主たる資料とした政治史の如きも、終には亦精確なる社會人類學の一章に要約せられる時代が來ようも知れぬ。

15 現に我々の眼前に於て、愉快なる發育の例を示したものは地理の學であつた。

民俗誌學は最も是と近似して、たゞその新らしい形態に對して別の名があつた。

其の爲に爰に無益の對立が現はれんとして居るのである。

16 併し何れの科學でも、當初は小さな發見と個々の觀測記述を以て始まらなかつたものは無い。

假に其程度に於て自得する學者が昔はあつたとしても、後次第に系統あるものに包容

せられて、單に其事業の一部を爲すに至るべきは自然である。

17 學問は統制せられなければならぬ。

さうして終局には人道の完備に寄與しなければならぬ。

割據は要するに分擔の一時的の形勢に過ぎない。今の多くの學者は此希望を忘れて居る。

18 しかも悲しむべきは人間の生涯の限られて居ることである。

綜合せられたる人類學は、今は兎に角に個人の力には剩る。

學問は要約せられ又索引の事業を伴なはなければならぬ。

19 それと同時に個々の分擔者をして、各自の研究の意義を知らしむる必要がある。

たとひ或一隅の人知れぬ勞苦でも、行く〳〵大きな智識の完成に寄與し得ることを覺らしめなければならぬ。

從うて第三の問題とし分類をどうするといふ問題が起る。「分類」は我々の研究價値の意識の爲に必要である。

20 民間傳承の學問は其起原が最も散漫であつた。

さうして職業としては發達しなかつた。

たゞ其爲に特に各人の相互聯絡、協同の勞作を高唱し得たのは幸ひなことであつた。

21 分擔の方法は夙に定まつて居る。

學會の任務は非常に重要と認められ、

更に又其大意を講說することが、最初の條件となつて居たのである。

22 我々の分類は既に試みられて居る。

それは幸ひにして國際的にも略一致して居る。

さうして各人の能力を最も有効に利用するやうになつて居る。

23 自分の分類案は日本を本位としたものだが、必ずしも從來の意見に對して大なる變更を加へて居ない。

大體に是を三つに別けることは自然である。

たゞ名稱と順序とが英佛獨等の案と同じで無いだけである。

24 第一部は生活外形、目の採集、旅人の採集と名けてもよいもの、之を生活技術誌といふも可。

在來の所謂土俗誌は主として是に限られ、

國々の民間傳承研究は通例之に及ばなかつた。

25 第二部は生活解說、耳と目との採集、寄寓者の採集と名けてもよいもの。言語の知識を通して學び得べきもの。

物の名稱から物語まで、一切の言語藝術は是に入れられる。

是が又土俗誌と民間傳承論との「境の市場」であつた。

26 第三部は骨子、卽ち生活意識、心の採集又は同鄕人の採集とも名くべきもの。僅かな例外を除き外人は最早之に參與する能はず。地方研究の必ず起らねばならぬ所以。

27 前の二者とても獨立しては完成せず。現に許多の誤解を世に殘して居る。國が「自ら知る」必要は、特に日本の如き國柄に於て痛切である。

28 學問と道樂との差は、必ずしも之に由つて衣食すると否とに由るもので無い我々は假にこの短い生涯の更に數千分の一しか是が爲に割き費し得ずとも、それが偉大なる人間研究の片端であり、眞理の殿堂の一礎石であることを意識することによつて、明白に單なる遊戲趣味の生活と識別せられることが出來るのである。

民間傳承論　目次

序

第一章　一國民俗學

一、凡俗知識の研究……一
二、新しい學問の成長……七
三、人類學の發展……一三
四、今日の史學……一九
五、フオクロアの內容……二三

第二章　殊俗誌學の新使命

一、既往土俗誌の價値……三一
二、エスノグラフィーとフオクロア……三七
三、習俗進化の跡……四一

四、日本の土俗調査……四六
五、世界民俗學の實現へ……四九
第三章　書契以前
一、史學の有限性……五五
二、考古學の再吟味……六〇
三、文明國探檢……六四
四、起原論檢討……六九
五、我々の方法……七三
第四章　鄉土研究の意義
一、採集技術の問題……七九
二、所謂劃地主義……八三
三、雅俗都鄙……八八
四、日本鄉土の特色……九三
五、學問孤立の危險……九八

第五章　文庫作業の用意
一、文庫の迷宮化……一〇二
二、記錄整理の聲……一〇七
三、計畫記錄……一一〇
四、偶然記錄……一一五
五、採集記錄……一二三
第六章　採集と分類
一、採集の方途……一二九
二、三部分類……一三五
三、分類の標準……一三九
四、索引と用語……一四三
五、假定の練習……一四八

第七章　生活諸相

一、概　説……一五五
二、二通りの生活……一六〇
三、新たなる交通……一六四
四、暦と經驗……一六八
五、藝術の根源……一七二
六、遊戯と玩具……一七九

第八章　言語藝術

一、新語作製……一八八
二、諺と譬へ……一九五
三、唱へごと・謎々・童言葉……二〇一
四、民　謡……二〇五
五、語りもの……二一六

六、昔　話……二二二

第九章　傳説と説話

一、傳説概説……二二九
二、傳説の合理化……二三三
三、傳説の型の問題……二三七
四、神話のもとの形……二四一
五、傳説・説話の運搬者……二四六
六、世　間　話……二五三

第十章　心意諸現象

一、概　説……二五九
二、知識と技術……二六三
三、趣味愛憎と死後の問題……二六八
四、前代知識の觀測……二七三

五、呪術・禁忌……二七八
六、心意研究の重要性……二八五
卷末小記……二九一

民間傳承論

第一章　一國民俗學

一、凡俗知識の研究

「民俗學」といふ語を普通名詞として使用することは日本ではまだ少しばかり早いやうな感じがある。しかしそれは必ずしも此學問が尾のある蛙、衣裳を重ね着した若竹の狀態にいつまでも停滯して居るといふ意味に於てではない。此學問の或部分などは却つて飛んでもない處まで進出して居るらしい懸念さへ多いのである。我々の「歷史」の歷史を考へて見てもわかるやうに、訓詁註釋の術が一たび窮まつて、其處に乃ち自由な考證の說が起り、其考證の獨斷が漸く忍び難くなつて、更に又古典の讀み直しが始まつて來るのである。ところが現代にはこの二つの相交替するもの、同時兩立をしにくいものを括り合せて、之を民俗學と呼ばうとする者がある。西洋の文獻學派といはれる人々は、かりそめにも書言の未だ錄せざる所のものを採つて、自家の意見の理據とすることを恥として居るが、其狹隘に反抗して始めて齊東野人の語を聽くべしといふ、私たちの研究は起つたのであつた。然るに我邦の民俗

學者なるもの丶中には、今尚足利末期の世諺問答と同じく、古書に依つてのみ、當世の解すべからざる事物を解釋しようとする者があるのである。是では第一に或る一つの學問が、古いか新しいかすらも容易にきめられない。我々の學問は、其到達の彼岸を、雲漠々たる地平線のをちに期して、しかも萬人の向ふ所を歸一しようとする新時代の企てなのである。今はまだ確定的な民俗學といふ名を持つに適しないのである。民俗學といふのは惜しい言葉であるが、我々は之を避けなければならない。少なくとも其内容が純化せられ、或程度の協同が得られる迄は、民俗學といふ語は日本語にならぬ方がよい。それに此學問は今日はまだ組織だつた「學」ですらもないのである。

民間傳承論といふ名稱は、是も自分一個人の提案に過ぎぬのであるが、幸ひにして今はまだ誤解者も無い位に流行の狹い一語である。私は心置きなく公けに其意味を限定することが出來ると信ずる。提案者の本意を告白するならば、是を歐羅巴大陸若干の舊國に於て、Les Traditions Populaires などと謂つて居る一團の知識と、出入り無く一致せしめるを以て便利とし、更に現在是とほゞ同義語の如く解せられて居る英人の所謂 Folk-Lore とも、範圍を同じくするものと認められんことを欲して居るのである。トラヂシオンといふ語は、其本國に於ても色々政治上の聯想があつて困ることは、日本今日の「傳統」といふ譯語が之を推測させる。それでポピュレールといふ形容詞に、非常に重きを置いてもらふことになつて居るのだが、我々はそれを「民間」としか表現し得なかつた。其の代りに新たな感じのある傳承といふ語を以て、情實纏綿する傳統にさし替へることが出來たのである。「民間傳承論」は則ちその弘く世に知られて居るフォクロア、是と内容を一つにする民間の傳承の、輕んずべからざる所以を說かうとする小篇である。

日本在來の語感では、「民間」は用途やゝ弘く、時としては官吏に非ざるものゝ全部のやうにも解せられて居た故に、近頃僅かな間にも早や色々のをかしい誤解があつた。或は俗間とか俚人とかいふ文字を使つた方がよかつたかも知れぬが、もう改めにくゝなつて居るから註解を以て補ふことにする。佛蘭西の民間（ポピュレール）を說明する學者は、之を以て上流（シュペリュール）に對する語だと謂ひ、それでは何か氣が咎めるものと見えて、又文字ある階級（リテレール）に對するものとも言ひ直して居る。何れにして見たところで、ぴたりとは概念が表はれて居ない。それよりも日本で今盛んに使はれるインテリゲンチヤ、卽ち有識階級と向き合せて、最も明瞭に其の意味が呑み込めると思ふ。つまり人から御世辭にインテリと言はれ、自分も内々はさう心得て居る者を除き、其の殘りの者が持つてゐる古臭いもの、それが我々のいふ民間傳承になるのである。

斯樣な用語の末ばかりに、今更少しの遠慮をして見ても始まらぬ話だが、兎角どこの國でも明瞭に

この「民間」の範圍を指示し得なかつた。殊に面と向つて諸君等凡庸の徒の、傳承を知りたいと言ふことを憚つた。その爲によほど反省の機會を失ひ、損をして居る人が有るやうである。英國ではフォクロアの定義といふのは、生活が惡くて社交から遠ざかり、此の新しい取殘された人たちの、擧動言語に表はれた古風な考へ方といふことになつて居る。さうまで限らずとも我々一かどの新文化人の生活にも、時には日頃に似合はない因習の餘勢が、無意識に頭を擡げることに心づく場合があるのだが、斯う聽いてはよもや自分たちの事ではあるまいと思ふ故に、競うて遠い田舍のあばら屋のみを訪問して、我も人ももう採集の種は盡きたやうに思つてしまふ傾きがあつたのである。ところがあの國で一つ仕合せなことには、ちやうど都合のよい民間傳承を意味する語が、今から九十年ほど前に發見せられたのである。このフォクロアは傳承せられた知識であつて、フォクは獨逸語のフォルクとは違つて、國民の下層を占むる一部分をしか意味せず、しかも語原は彼と一つで親しみの感じがあり、且つ些しでも輕蔑賤視の響きを持つて居なかつた。つまりは斯樣な幾分か紛れの有る語が見付かつた御蔭に、之に賴つて僅かづゝ觀察の區域を延長して見ることも出來たのである。さうで無かつたならば此學問は或は成長しなかつたかも知れない。

獨逸では一時この英國の新語を、意味と共に借用して居たこともあつたが、大きな戰をしてからはもう借りるのがいやになつたものか、今ではVolkstumといふ語を以て是に代へて居る。フォルクは此國の言葉では國民全體のことである故に、是は民風とも譯すべき一語であつて、もしも此のフォクロアの由緒を知らなかつたならば、忽ち是も亦都府臺閣、學者富民等の間に普通であるものを以て、すべてを代表せしめることになつたかも知れぬが、少なくとも現在ではさうは此語を解して居ないのみならず、更に進んではVolkskundeといふ語を設けて、爰に我々の謂はうとする民間傳承誌に宛てゝ居るのである。此の種の觀測記述の始まつたのは、總體としては獨逸は確かにおくれて居た。國に學會の起つたのは英國よりは二十年も後である。しかも其の抱負と覺悟に於ては、必ずしも彼が後塵を拜しては居なかつた。卽ち一方の國では調査の區域を限つて、今尙同胞を視る者と觀られる者との、二つに分たうとして居るに反して、此方は之を國民全部の上に及ぼし、一國をして共に與に自ら知らしめようとして居るのである。願はくば東方採長補短の國が、徒らに舊名に絆されて、以前のまだ改良せられなかつた英國流を、眞似する愚をなさないやうにしたいものである。

しかもその本元のフォクロアとても、實際には着々と成長して居るのであつた。單に目ざましい改良ぶりを示さず、又例の通り之を具體的に報告しないだけで、二十一年前に出したバーン女史 Miss C. Burne の指導書 Handbook of Folk-Lore 通りで、結構だと思つて居る者などは一人もないのであ

る。【此書は英國の民間傳承協會を代表した案内書であつた。改訂の必要を生じて爾來第三版の編述に著手して居る。此書は昭和二年に日本にも飜譯された。岡正雄君の民俗學概論がそれである。】だから私は此意味に於て、我々の民間傳承の「民間」といふ語が、元よりも廣く解せられることは格別苦にしない。つまり人間に古風な慣行や考へ方を持つ者と、全然持たない者との二種類が有らうとは思はれぬ故に、此の傳承は遍ねく官吏なども引きくるめた民間に、求めることが不可能では無いからである。其間には勿論分布の厚薄はある。所謂醒めたる人々の自意識が強く、其言動思念の矛盾撞着を心づく者の間に、惰性の僅かに遺れるものを搜し出す煩勞は、悠然として自適する翁嫗兒女の生活から、絶えず發露する古風を拾ふに比して、償ひの乏しいことは爭へないが、日本は最近には豐富に經驗したやうに、此點にかけては一般に都合のよい國であつた。急激な新文化は只表面をしか色づけて居ない。同じ一つの部落、一つの家の中に、互に驚くほどちがつた考へ方をする者が、相敬愛しつゝ共に住んで居る。昔ものが屢々新裝すると同時に、舊弊は世に後れじとする青年の中にも潜んで居り、それが又何れを優れたりとするかも決し難いものである。此際に當つて、何が我々の觀察し採集すべく、分類し比較すべき傳承であるかを知ることは、人生の新たなる興味でなければならぬ。古來一たびも文字ある者の考察に上らず、所謂優雅階級が鄙俗として省みなかつた部分に、此通り多くの消化せられざる知識、解釋を今後に期すべき儼然たる人間事實が、手附かずに殘り傳はつて居たといふことは、今日の日本人ならば面白がらずには居られぬ現象であると思ふ。世界の民間傳承論は前世紀の初頭から、此新展開を望んで百年の試驗を重ねて居る。學問は殆どこの一個の惱み鬪ふ邦の爲に、準備せられたかの感があるのである。それ故に說いて未だ其の要點に達し得ない類似の研究エスノロジーと、いつまでも紛らはしい同音の名稱——民俗學と民族學と——を以て、呼ばれて居られぬ理由が、爰に存するのである。

二、新しい學問の成長

然らばその民間傳承の研究の眼目はどこに在るかといふと、其答は何よりも簡明である。我々は民間卽ち有識階級の外に於て(もしくは彼等の有識ぶらざる境涯に於て)、文字以外の力によつて保留せられて居る從來の活き方、又は働き方考へ方を、弘く人生を學び知る手段として觀察して見たいのである。さうして其方法が果して成り立つか否かを、何よりも前に突きとめて見たいのである。如何なる「學」でも最初は皆さうであつたやうに、此事業も亦僅かなる好事の徒の、半ば氣まぐれなる穿鑿に

始つて居る。それが中々大切な事だつたと判つても、尙其抱負は決して雄大になつたとは言へなかつた。あんな事を丹念に調べてまはつて、果して何の役に立つのだらうかといふ世評を、甘んじて受けて居なければならなかつたのである。今でも是でよいのだと思つて居る者が少しは有るが、以前彼等の知らうとしたのは、一つ話の種になるやうな奇事異聞、同じ迷信でも其結果が害を生んで、周圍が打棄てゝ置くことの出來ぬやうなものばかりを、搜して書き留めて見ようとしたことは、たとへば草木を愛する者が、先づ畸形の類少ない品に注意を拂つたのと同じであつた。單なる切れ〳〵の知識としても、尙甚だしく一方に偏して居た。是を一つの綜合に持つて來ることは程遠い話であつて、それが測らずも人間の明らかにしなければならぬ問題に、大きな暗示を與へたことが屢々あつたけれども、それは唯幸福なる偶然といふに過ぎなかつた。久しく此程度の採集をくり返して居た以前の民間傳承が、急いで學といふ名を名乘らなかつたのも尤もなことであつたと思ふ。

一方には又文字の敎養なき僻村の住民の間に、いつの世からとも無く傳はつて居るくさ〴〵の口碑、殊に形態の稚拙なる昔話や歌物語、又は素朴にして力强い仕事唄戀歌の類を、數多く採錄して見ようとするのが、初期のフォクロリスト等の心醉した興味であつた。彼等の執着ぶりは今人の企て及ばざる所であり、其功績は永く感謝せられては居るが、是とてもつまりは稍我儘なる選り食ひに過ぎなかつた。同じ採集とは言ひながらも、昔話や民謠は林の奥の珍らしい蕈のやうなものである。色彩鮮麗なる野草の花である。之を目に觸れては素人でも手に摘んで、愛玩しようとせぬ者は無いであらう。集めて來てさて何に使はうかの問題が起つて、始めて我々の働いてもよい事業になるのであつた。佛蘭西では今より二百五十年も前に、ペロー C. Perrault といふ優れた學者が、既に童話の蒐集に手を下して居る。此人が是を後世に示さうとした動機は、我々の是を有難がる理由とは別のものであつたらしいが、それでも引續き是が時代の風をなして、貴女縉紳の來り携はる者が多く、此部面ばかりでは所謂鵞鑨の言も採り用ゐられた。卽ち必ずしも新しい流行ではなかつたのである。之を我々の生活誌解說の資料に、供すべき用意だけが缺けて居たのである。グリム Grimm 兄弟が更に百餘年を隔てゝ、その東隣の國に生れ出たといふことは、或は此因緣の催す所であつたかも知らぬが、同時に又幸運なる一大値遇でもあつた。この兩人の親切なる比較研究に依つて、始めて心付かれたことは色々ある。東は天竺の奥地から、西は歐羅巴の果の岬まで、年久しく分散し盤居する許多の種族の、もとは一續きのうからやからであつたといふことが、今は安全に斷定し得るやうになつたのである。獨り言語の複雜な後々の變化が、限りある法則の下に系統立てられて、終に大昔の共同の爐端まで、溯り辿ることを許したといふに止まらず、所謂文明國では兒童すら尙顧みない數々の說話が、等しくその

無意識の保存と一致とによつて、起原傳承を語つて居るといふことを、覺らせてくれたのも彼等の功であつた。希臘羅馬の上代の文化國に於て、繪になり像になりはた文學となつて、不朽の譽れを得たものが神話であるならば、遠く北方に止住して時の進歩に立ちおくれ、屢々戎狄を以て目せられた彼等の從弟にも、それ〴〵に同じ種類の神話の痕跡は殘つて居る。此群落の中には、近世に近くなるまで文字の利便を知らず、一片の史書を以て惠まれざる者も稀で無く、たま〳〵外部に其生活を觀測した者があつても、其記述は簡と言はんよりも寧ろ粗であつて、事跡の埋沒は現時の太平洋諸島民に超ゆるものがあつた。しかも尙偶然に彼等の間に持ち傳へて居たものに由つて、之を親切に考察して見ようとする人を缺かぬ限り、悠々たる數千百歳の下に於て、斯くも重要なる社會生活の一面を、回顧して見ることが出來るのであるといふことが論證せられるに及んで、始めて說話の採集が道樂で無く、後の學徒に向つての莫大な遺產であるといふことに心付いたのである。

十九世紀の西洋ではグリム兄弟の御蔭に、前後に比類なき昔話時代を現出した。とくと考へて見たら間違であつたといふ幾つかの學說が、起つては榮えて又滅びて居る。資料の意外なる追加が尙續く限り、今とてもまだ安心して人に導かれて居るわけには行かない。非常に面倒な中間期に入つてしまつた。さうして徒らに小區域の傳說や說話の採集、若しくはその不徹底なる解說を以て、所謂フォクロアの全部でもあるかの如く、多くの世間の人に考へさせるやうになつたのである。民間傳承の研究が、もし成長して一個の學となるべきものだつたならば、此狀態は明かに停滯であり又障害であつた。だから各國の同志者たちは、何れもこの自分で建築した住心地よき牢獄を打ち毀して、未墾の廣場に出て行くことに努力して居るのである。學問獨立の最初の要件は、普遍性を具ふることであつた。なんぼ珍しく且つ人望ある古信仰の問題であり、又諸隣國の民間說話の、最も周到なる比較によつて、可なりの確かさまで突き進むを得たにしても、同じ研究方法が更に他の多くの問題にも適用し得られ、同時に系統を別にする遠くの種族、たとへば我々の國などにあて篏めて見ても、同じ結果が擧げられるときまらぬ以上、之を學といふ名を以て呼ぶだけの、勇氣が無かつたのも當然のことである。英國では最近に外國から來た學者クラッペ A. H. Krappe が、始めて民間傳承學（Science of Folk-Lore）の名を其著述に付與したが、アンドリウ・ラング Andrew Lang などは既に五十五年も前に、此名稱の將來の可能を力說してゐるのである。其後久しい間さういふ名乘を揚げる者の無かつたのは、決して單なる謙遜からではなかつた。

一つの新しい學問の成熟の爲に、百年位はかゝつても致し方が無いと思ふ。實際又少しばかり道草を食ひ過ぎた嫌ひもある。耶蘇敎化以前の歐洲古住民の生活に就いては、過去一世紀間にそれは面白

くてたまらぬほどの、澤山の新發見があつた。獨り言語の精細なる研究によるのみでなく、稀に傳はつて居る古文献の檢討から、遺跡遺物の調査なども、日本のやうに矢の根石の時代に限るやうなことはなかつた。是等の業績が相刺戟して、興味を我故郷の前住者の上に、集注させた勢ひは大きなものであつた。昔話の研究も實は孤立のものでなかつたのである。其上に比較宗教史の新たに興つた機運が、前代未信者に對する人々の考へ方を一變せしめ、殊に彼等の遺留した有形無形の記念物を、又なく床しいものに感じさせたのである。歐羅巴は人も知る如く、中古に大規模の住民の入替りがあつて、今住む者は大部分は彼等の子孫で無く、言葉も解せぬほどの遠い間柄であつたが、尚且つ我々日本の常民が自分の遠祖を懷ふよりも深い親しみを以て、古代の生活を學び知らうとしたのである。初期のフォクロアが專ら此方面の痕跡に著目したのも、言はば時來つて特に社會の同情が、この久しく埋もれて居た者の爲に燃えたからであつた。歴史が問題の選定を其道の者に一任して、彼等の教へてくれるだけを聽いて滿足し、必ずしも各自の疑問を提出しようとしなかつた習はしが、或はその新しい隣の學問にも染傳したのかも知れぬ。兎に角に最初大きな夢もなく、又綜合的な計畫も立てずして、僅かな人たちが意の赴くまゝに、興味の誘ふ程づゝ拾つて行つた問題であつた故に、フォクロアは自然に其研究が一方に偏し、流行を又逐ふ形にもなつたので、假に今以て是を昔話蒐集事業の別名かと思ひ、もしくは古代信仰の痕跡を尋ねる學問の如く、解する者が外部には有らうとも、之に對しては十分の言ひ開きが立たぬといふのみで、自分もさう思つて居るフォクロリストは、もはや一人だつてないのである。日本の學者方の起原論好きは、無論斷じて西洋の眞似では無い。其證據には、あちらで是までの上代偏重を悔い始めても、此方は尚平然として元の仕事を續けて居る。由緒傳來の限りも無く久しいといふことだけを、立證して貰はうとする世上の要望も、我邦に於ては特に强烈であつたのである。社會は暗々裡に時の學問を支持し、且つ牽制する者である。故に先づ彼等に向つて此研究の可能性を說き、まだ〳〵多量の實生活上の疑問を、解決する能力を持つて居ることを信ぜしめ、より大いなる期待を繫けさせた上でないと、今の學者だけでは單獨に進むべき道に進んで行けぬかも知れない。

三、人類學の發展

西洋の學者の中には、面白い警句を吐いた人がある。曰く、人類の學問の中で最も發達しないのは人類學である、と。過去數百千年の我々の智慮分別は、未だ一度でも人間を賢にし、もしくは幸福に

する目的を外にしては働いたことは無かつた。人は知識の饗宴を樂しみにして生きて居る。幼な子の目覺めから柩に眠る今はまで、あらゆる隣のものを知らうとしなかつた瞬間とてはないので、其關心は次第に延長して、終に宇宙の果までも屆かうとして居るのである、獨り其間に於て人とはどんなもの、人の生存が如何に導かれ、如何に進み動いて居るかといふ主要の問題が、僅かに片端の見本とも言へない實例によつて說明せられ、それが果して總體の眞相と、合致して居るか否かを點檢しても見なかつたといふことは、考へれば考へるほど不可思議な矛盾であつた。是には屹と隱れたる理由が無ければならぬ。人の好奇心が自分たちの未來と過去とだけに、特に冷かであつたとは推測し得られぬのみか、現に又實際の疑惑に逢着して、生涯惱み拔く者は數限りもなくある。唯それが相談に行く學問が、まだ御醫者のやうに開業をして居ないのである。

是を敎へようとした者のあつたことも事實である。少なくとも其志を持つて人間の問題に、心を潛めて居た人々は昔から多かつた。今日は寧ろそれが多過ぎるので困つて居る。敎へられるが爲には先づ信ずることが必要であつた。さうして其一つを信じようとすると、直ぐに第二第三のものがまぜ返しに來る。結局は自分で一應は自分を敎へて、取捨の決を採らなければならぬやうになつたのだが、さて其判斷の資料に供すべき知識が、妙に此方面では久しく缺乏して居たのである。現在の人類學は、堂々たる哲學や史學に遠慮をして、其定義を限局せんとして居た。人類學は單に動物としての人を對象にする研究だと言つた者もある。併しながら是は必ずしも謙遜の德を發揮しては居ない。人は動物だが賢い動物である。考へてどこ迄も其社會を改造して行ける動物である。神を懷ひ死後を信じ得る動物である。さうして其以外の何物でも無い。自然の現象としての人類を知ることに、中間の籬を設けることは出來ない。今まで此範圍で働いてゐた學問が有るならば、當然にそれも人類學と謂つてよいのだが、之を仲間に引入れても、尙此學問が不釣合に遲く始まり、且つ涉々しく他の學問のやうに、進步をしなかつたといふことは言へるのである。

人を一種の存在として考察する學問に、幾つともない障礙のあつたことは、大抵の人にはもう判つて居るだらう。獨り基督敎の經典がちがつた事實を敎へ、之を否認した上で無いと前へ出られなかつたといふだけでは無い。どこの文明國でも蠻夷戎狄を、自分と同じものだと見ることは許されなかつた。日本は古くからさういふ窮屈な拘束は受けなかつた樣だが、其代りにはてんからさう澤山の齡ひし難き同類の有ることは知らなかつた。たま〳〵空想に上つた手長足長、腹に穴ある異人種などは、之を鬼畜の部に入れても常識は少しも之を訝らなかつたのである。白人の國でも世界の航海が始まつて尙暫くの間は、パプアやネグリトと、ゴリラやチンパンジーとの差別を素人は解しなかつた。彼等

自身の外に迷へる神の子のあることを知つたのは、文字通り新發見だつたのである。人類の自然を會得する能力は、之に由つて始めて其鐵鎖を解き放たれた。人間考察の學問が之を樞軸として、百八十度の轉回をしたのも怪しむには足りない。たゞ不可解な一事は、その貴重な經驗が必ずしも利用せられず、今尙一國の民俗學を打立てることは幾分か容易に過ぎ、世界人類のフォクロアは、必要が更に大なるにも拘らず、殆ど其希望の端緒をすらも把へ得ないことである。サー・ジエムス・フレエザアSir J. Frazer などの、是に代るべき新學名として提案した社會人類學といふ言葉は、此二つを兼ねようとした爲に、恰も滿洲の荷車が馬と黃牛とを共に繫いだ如く、眞直ぐには走つて行けない狀態に陷つて居る。是が又一つの大いなる我々の惱みである。

我々の民間傳承論が、この廣義の人類學の中に、どれだけの分野を現在は持つて居るか、且つ又どれ迄の役目を果すのが相當であるかといふことは、不幸にして今はまだ二つの別々の問題である。私たちは實着の歩みを踏みしめて行く爲に、特に先づ一國民俗學の確立を期し、是によつて將來の世界民俗學の素地を用意し、是に働く人々の習練に資するを順序として居るのであるが、その序幕に於てすらも、既に色々の妨碍に出逢つて居る。是を總世界の人間研究に押し擴め得ないやうな方法が、民俗學の名を占有してゐる。人類學との聯絡は一向に省みられて居ない。しかし私としては說明は至つて簡單である。人類學がもし體質と精神との二部に分ち得るものならば、傳承の研究は無論後者に屬するが、是も亦是非とも前者と同じ方法に依らなければならぬ。さうして其方法は一國の內外を問はず、一貫して常に遵奉せられるのが當然だと信じて居る。所謂體質人類學の研究方法は、今や完全に樹立して之を爭ふ者が無い。卽ち其要件の一つは現在の事實以外、自身の眼で見手で觸れたもの以外、他の如何なる資料をも借りて來ないことである。次には觀察し實驗せられたる事實を、出來るだけ數多く集めて分類を精確にし、其同異の比較に基づいて法則を見つけて行くことである。個々の自然の價値を平等視して、主觀によつて重心を置き替へようとしないことである。獨り醫者理學者の人類學のみは言はず、苟くも科學の名を以て呼ばれんとする研究は、何れも皆此律法に服從すべきは當り前の話である。然るに今日の民俗學といふ部分にばかり、尙自分で無い者の異時異處の認識を無差別に踏襲して、新たなる觀察を重んじないものが多かつた。實驗の未だ及ばざる今後の採集の中に、現在の疑問の答が潛んで居ることを思はずに、僅かに知る限りの眼の前の資料に據つて、自由な斷定を下さうとする者があつた。其爲に彼と方法の共通を以て、手を執つて共に進んで行くことが出來なかつたのである。

日本の所謂體質人類學は、又フォクロア同樣に素人臭く、甚だしい問題の選り食ひをして居る。興

味の集注して居る所は主として骨、或は是を硬部無生人類學と名けても當つて居る。生きて現在に滿ち溢れて居る事實にまで、導かれて來た筋と順序、是が條件たる生存樣式、卽ち我々の社會問題と、より多くの交渉をもつ dynamic の方は、單に好望を將來に囑せしむるのみで、是も亦外間の由無き誤解を防ぎ得ない。併し同じく一時の流行とは言ひながらも、體質人類學の上代偏重、起原論熱中にはまだ理由がある。其一つは新しい發見が餘りに多く、一寸と思つて取掛つた者が、もう切上げて外を廻るといふ折が無いことである。だから私などは爰は御連中に在せて置いて、他の持場の爲に新らしい人を待つて居るのである。第二の理由は愈々人類の生きて繁殖して斯う變化した迄の經過を明らかにするには、實は「體質」だけの獨力では少し足りない。地理學者のよく謂ふ環境の差異を、詳かにしたゞけでもまだ足りない。人が銘々の氣風や習癖から、もしくは信仰や自然觀の持ち傳へたものから、たまたま選擇した一種の生き方が、たとへば斯んな日本人や蝦夷人を、作り上げたのかも知れぬからである。ところが賴りにすべき相棒はまだ御休息だ。殆ど自分が新らしい人類學の主要な役者であることを否認もしかねまじき人々が、依然として片隅の問題をつゝいて居るのである。此方が目覺めて一ぱいの仕事をする迄は、あちらの方でも發掘の仕事しか出來ない。二つ別々でも無い新らしい人類學が、斯うして體質だのいや文化だのと、割據孤立して居られるのも、學問の進まぬ御蔭だ。もしもいつまでも割據がして居たければ、現狀に感謝するがよいのである。

四、今日の史學

我々の史學が、今日はまだ何としても答へることの出來ない多くの問題を持つて居ることは事實である。是は手不足や我儘な選り食ひの爲といふよりも、寧ろ學問の年久しい行き掛りから、自由に總ての過去に對する不審を尋ね究めんとする努力を抑制せられて居るからで、强ひて言ふならばそれでも結構だと思ひ思はれて居る所に、反省しなければならぬ弱點が有るだけである。他の多くの遲く生れた學問は、周圍が第一にそんな呑氣な態度を許さない。假令出來ないまでも各自の所轄內の、あらゆる疑問を無くすることを、理想としないものは無いのであつた。それだから又安神して、しかも未熟のうちから人類學などゝ、名乘つて居ることも出來たのである。さうすると問題は當然に史學と人類學との境目はどこか、一方の目的の有限性に對して、こちらは何でも來いといふ普遍性の旗印を以て、向ひ合つて居てもよろしいか否かに進んで來るのであるが、是には私たちのやうに史學の近代の展開ぶりを、深い興味を以て觀望して居た者の、容易にうんと言へない理由がある。其上に今までの

人類學は前に言ふやうに、まだ些しでも其普遍性を發揮しては居ないのである。最も舊式の歷史でも笑ふやうな、狹い前面を控へてたゞ自得して居るだけである。

幾多の制限を受けて居るとは言ひながらも、もう今日歷史は決して舊式で無い。近い百年ほどの間にどの位彼等が目的を複雜にし、其可能性を擴張しようと力めたかは、ちよつと短い言葉では說き盡せない位である。大體に日本の明治年間は、西洋の十九世紀も同樣に、所謂記事本末體の途法も無くもて囃された時代であつた。大は宗敎史や制度史の類から、微は玩具や髮容の變遷に至るまで、題下に史の字を附すると本は皆賣れたといふ話である。如何なる題目を取扱つた書物でも、卷頭に史的記述の尤もらしい一章が無いと、不親切であるかの如き印象を人に抱かせたが、其癖本論とは何の交涉も無く、又利用せられても居ないのが比々として居た。是等何々史の大半は、以前の社會に於ては曾て歷史のうちに算ふべきものとすらも考へられなかつた。ましてや後世にかゝる讀者の有るべきを豫想して、是に必要なる記錄を留めようとした者の、絕無であつたことは勿論である。それにも拘らず兎に角に曲りなりにも、斯ういふ新史書の輩出し得たのは、單なる流行の力のみではなかつた。卽ち又第二段に於て、古人が夢にも豫想しなかつたやうな、大規模の史料採擇の躍進があつたことを意味するのである。

歷史が素朴なる記傳の道から、修史館裡の事業と化したのも一朝の變では無かつた。古人が家の祖鄕土の英雄の功業を絮說する熱心は殆ど問はず談りに墮するを顧みなかつた程であつたが、それでも尙後世の者が聽き尋ねんとするところと、屢々著しい喰ひ違ひがあることは免れ得なかつた。それ程にも我々は偉人の行跡に就いて、こまごまと知らうとする趣味を持つて居たのである。それから二人以上の强ひて傳へんとした者が、互に相容れざる主張を遺して、もはや何れが正しいかを問ひ究められぬ處へ、行つてしまつて居る場合も多かつた。そこで第三者は公平に其眞相を確認する爲に、何等の計畫をもたない他の方面の文書の中に、單なる筆の序を以て書き留めて置いたものまでを、證據として援引しなければならぬ必要を感じ始めたのである。歷史が上代の神話や傳說と、完全に手を分つたのは此際であつたと言つてよい。今でも此方には書き傳へたものならば信じ、わざ〳〵殘したものでも無いと何物をも信じまいとする氣風が、まだ少々は消えないで居るが、大體にこの修史卽ち歷史の書き直しは、內外兩面に史料採擇の自由を、著しく擴大させずには置かなかつたのである。

しかも是を近世の歷史問題大追加の後に比べると、以前の自由は物の數でも無かつた。我々の國史が其輪廓に於て、大よそ昔の史官が記傳すべしと認めたものと、重なり合つて居た間は此自由の必要も實は小さかつた。ところが我々が能く訝かり、世相が數多くの奇異と不審とを揭ぐるに至つていつ

と無く是を極度にまで利用することになつたのである。江戸期で最も奇拔な例は、二三の市井學者が市民の常の日の生活の由來を知る爲に、御伽や浮世草子、さては俳諧の小さな集までを涉獵して、其中に幽かに觸れて居る記錄を求め、之を自分たちの特別史の史料としたことであるが、そんな事などはもう今日ではざらである。それをしなかつたら殆ど書くやうな問題は無いのだ。國史の最近の進步は一つには採訪の力であるが、是とても多くは側面からの證據であつて、利用の方法が新しい故に役に立ち、又他の最も意外なる偶然の記錄と結び付いて始めて意義があるものも稀でない。それから經筒や鰐口のかけら、磨滅しかゝつた路傍の石塔なども、大抵は或文字を金石に彫り付けた動機と、全く異なる目的の爲に使はれるのが普通である。上古文字を以て歷史の手段とした趣旨と、大よそ是ほどまで懸け離れた用法は、果して他にも例があるだらうか。それで居て尙歷史は、文字に書いたものを基礎とする前代生活の尋討だといふ定義を、株守しなければならぬといふのは、私たちにはたゞ行き掛りの拘束とより他には評する語が無いのである。

しかも斯ういふ切れ〳〵の文字が殘り傳はつて居るといふことは、些しの必然性も無いのであつた。卽ちどの位考へて見る價値のある史上の問題でも、必ず搜したら何處かに史料があるものとはきまらなかつた。假に現在何等かの痕跡を留むるものだけが、國の歷史の傳ふべき事項なのだと、獨りできめてかゝつて安心して居る者はあるが、それはたゞ記傳時代の餘習といふに止まり、到底之を以て後世の知識慾を擊退し、又は重要視を掣肘することは出來ない。近頃の適例では維新史の研究が流行して、是ほど澤山に有る文書や覺書でも、まだ一方に偏して居るといふ不滿があつた際に、各舊藩から多くの老人を呼び寄せて、新たに其談話を聽いて幽かな記憶を誅求したのである。卽ち既存の文字に依賴する以上に、今一段と深く問題を掘り下げて行かうとすれば、時には古い定義の外に逸出する必要のあることが、もう認められずには居られないのである。それから他の一方には考古學の知識も、古代史や他に史料の無い地方史の區域では、可なり應揚に援用せられて居る。是が人間の姿形として遺り傳はつて居る史料、もしくは國民の無意識に傳承した無形の遺物や、遺跡の上にまで、手を伸したくなるのもやがてであらう。要は我々の史學が古い問題に倦み、もしくは新たなる問題の重要性を見出す時期がいつ來るかによつてきまることで、是まで展開したものが此程度で永く停止することは萬無いと思ふ。

五、フオクロアの內容

始めて Folk-Lore といふ語を生のまゝで、日本に持込んだ人はバチェラーBatchelor老師であつたらうと思ふ。蝦夷は此國土と因緣の深い種族であるらしいが、其歷史は全く埋もれて居る。奧州安倍賴時行胡國歸來語といふ類の風說書は申すに及ばず、たとへば近世のシャグシャインやツキノイの一件記錄が、どの位正確に史實を保存して居らうとも、さういふ片端の外部史料に據つて、あの民族の經て來た過去、殊にその今日ある所以のものを、解し得たりといふ譯に行かぬことは、篤實なこの英國の宗敎家が誰よりも先に心づいたのであつて、よしや其採集は弘く及ばずとも、心ざしは既に四十何年の前に立てられたのであつた。日本人の中にも言葉だけならば、もつと以前から知つて居た人は必ずあつたらうが、果して其本意を輸入して居たか否かは、成績に就いて見るとよほど疑はれる。それといふのが初期のフォクロアは、其國元に於ても非專門家の好事の學であり、又甚だしく古代探求の興味に偏して、綜合を餘りにも遠い未來に期して居たからであつて、その一部の綿密な調査ぶりだけを見て來た者が、成るほど人民の風俗の學問だから民俗學かと、思つてしまつたのも無理は無いのである。それに少しは今よりも人の心が悠長でもあつた。何になるかは知らぬが、私も遣つて見ようといふ人が相應に尊敬を拂はれて居たのである。それが自他ともに學問の社會的效用如何を、考へずには居られぬ時代となつて、改めて痛切に當初の趣旨を自覺し、力を完成に傾け出したことだけは事實である。

そこ迄見屆けてから、眞似をするならばした方がよかつたかも知れない。或は採用のし樣が早かつたとも言ひ得る。

それに尙一つ察して遣らなければならぬことは、二三の西歐の舊國に於ては、其近代化が既に徹底して居る。あらゆる新文化の綾模樣の中から、僅か一線の古代染の色絲を見つけることも、今はもう餘程困難になつて居る。學者が概念として別に考へようとする農夫 Peasant といふ者も、實は片端から當世人になり切つて居て、その常の日の生活ぶりには、何一つの異なる法則で支配せられて居るかと思ふものも無いのである。所謂殘習遺俗はよく〳〵衝動でも無いと、無意識にも滅多には發露しない。是を觀察して行つて追々に數多くの類例を重ね、比較によつて證據力を確實にしようといふことは、先づ斯ういふ國々では望み難いことだ。ところが飜つて我々の生れ合せた群島國、今頃やつとの事で世の中の既に改まつて居ることを敎へられ、しかも去就を右左のいづれかに惑はねばならぬ日本に於て、果して彼等と共に資料の消滅を歎息し、乃至は論理の飛躍を忍んで、比較を緣の遠い蠻夷の間に求むべき必要があるか否かは、誰にでもすぐ決せられる問題であり、決し難ければ幾らでも手輕な證據がある。我々の間に於ては每日の生活事實が、尙現前に過去を物語つて居る。之を取殘され或は殘留 survival と名け、はた持續 vestiges と呼ぶのには、餘りにも多量の昔風が、我々を圍繞し、又自分た

ちの内にも潜んで居る。是を意識する無くして生きて行かうとすることが、寧ろ教養ある者には不可能にさへなつて居るのである。多くの場合に於ては省察が卽ち採集であり、又分類でもあれば比較でもある。是ほどにも容易に過去を解する資料が、整備し得る狀態は他に望むことが出來ない。しかも尙新學といへば何でもかでも、たゞ白人の踏んだ足跡をしか追へないといふことは、口惜しい摸倣主義と言はなければならぬ。

フォクロアといふ一つの英語は、實は分家の米國に於てすらも、餘り珍重せられない程の新語であつた。我々外部の者から考へて見ても、三百年も以前に故鄕の田舍を出て大海を渡り、ずつと曠野に入つてしまつた者の、少しづゝ持傳へて居る昔風と、元の土地での生活ぶりの變化とを、比べて見るのは興味の深いことで、早速呼應して起つたらよささうなものだが、今までは一向にまだ氣乘りがして居ない。必ずしもさういふ方法の可能も信じないわけではなく、又殘つて研究に價する痕跡が此方には無いと思つて居るのでも無いらしいが、兎に角さういふ新らしい思ひ付きを、氣輕に他の國から借りて來ることが、何と無く己を空しうし過ぎるやうに感じられたのである。所謂舊大陸の國々が申し合せた如く、どうかして斯んな語を使はずに濟ませようと努めて居たのも、それ以上に尤もな心理ではあつた。しかし名稱はたとひ何と付けようとも、既に其內容の實在を認めずに居られなかつたとすれば、寧ろその正しい目的と分野とが、國際的に確定してしまふまで、一つの共通の名を保存し置いた方が、御互の理解と討究には便利であつたらう。ところが英國はもと〳〵フォクロアといふ語の發明を誇つて居る位だから、忘れても隣國の民間傳承といふ語などは使はうとしない。さうして他のそれ〴〵の自己流と、互に飜譯の際に若干の誤解をし合つて居る。此不便も今になつて見ると大きかつた。是が自動車とか飛行機とかいふ類の、現に定まつた形のあるものなら、各國で名を異にしようとも辭書一つで用は濟むが、フォクロアの如きは成長するものであつた。人によつて少しづゝは輪廓をちがへて考へ、しかも其範圍內のたゞ一小部分のみを、生涯耕して居る者もまだ相應に多いのである。是では國每に割據の姿を呈して、永く總體の協力は望み難く、銘々がたゞ自分に都合のよい場合ばかり、氣隨に國外の人の言を援用して、却つて仲間の混亂を招く弊を防ぎ得ない。日本のやうな學問上の自主のない國では、特に此結果を警戒する必要があるのである。日本では將來完成すべきフォクロアの學問を、是非とも民俗學と譯さうといふ說があるならば、それに私は反對しない。又その範圍が舊い二三の國よりも廣くなつても趣意さへ一貫して居れば結構だと思ふ。たゞ一つの條件は是と一面の類似をもち、しかも方法と本質の異るエスノロジーを「民族學」と同音で譯しては困るといふことである。

しかしさういふ内にも大體の傾向は、今までのフォクロアの領土を擴張しようとして居る。個々の研究者の選り喰ひは無視して、終始其論理の終極まで、この學問の限界を持つて行かうとして居る。現在是に携はる者の數や能力は別として、新らしく始まつた土地ほど、手を著けなければならぬ仕事の區域は廣いと考へて居る。一例をいふと常民の衣食住、是に伴ふ長い間の仕來りの如きは、もとは餘りにも有りふれた現象として、英國などでは是を省みようとする者が無く、僅かに奇拔意外なる習慣、もしくは迷信が是と結び付いた場合のみに、之を問題にしようとしたのである。所謂有形文化の種々相まで、フォクロアが取扱ふべきであるか否かは、此頃かの國でも漸う問題にし始めて居る。ところが對岸の佛蘭西や其他地續きの國々では、最初から是を民間傳承の主要なるものに算へ、それを中心にしないと大衆の過去世は考へられぬものと思つて居る。同じ一つの學問の態樣としては、是は可なりの顯著なる相異であり、又所謂民族學との聯絡に於ても、この接觸面の廣狹は大きなことである。次に獨逸のフォルクスクンデなども、譯すればフォクロアだと何人も解して居るのであるが、此方では地方の言語現象を、最も大切な項目に入れて居るのだが、隣の佛國ではたゞその一部の、命名技術のやうなものに注意して居るだけである。英國では方言の調査の方からで無いと、入つて行けないフォクロアがあることを、此頃首唱する人が現はれたけれども、そんな問題は本來の計畫の中には無かつた。私等が日本に於て言語事實を觀察し、之を利用せんとする立場は、右三つの國風とも亦少しちがふ。何にしても早く始めた國の研究が、是等を民間傳承の外に置いたことは、單なる行掛りだから踏襲する必要は無かつたのである。

第二章　殊俗誌の新使命

一、既往の土俗誌の價値

民間傳承論の役目は、單に日本のやうな資料の豐富な一國に、日本民俗學を建設したといふだけで、もう御終ひになるやうな小さなものであつてはならぬ。我々の研究方法が、果して學と名けても恥しからぬ體系を具へ、在來の史學が企て得なかつた書契以外の一切の歴史が、行く行く之によつて總て問ひ明らめられるものであるとすれば、此實驗は當然に第二第三の隣國、もしくは不幸にして國をなさない或種族の集團にも、順次に應用することが出來るばかりでなく、更に練習を積重ねて、末には此複雜を極めた世界全體を一つとして、是を現在の如くならしめた力と法則とを、尋ね出すことも亦決して他の學問の領分では無い筈である。我々は、先づ何かといふと直ぐに自得したがる今までの癖を棄てゝ、少しでも多く此統一の大事業に參加し、又寄與して見ようといふことを心掛けなければならない。

私たちの所謂一般民俗學、卽ち世界のフォクロアの可能性は、今でもまだ之を危ぶむ者は多いであらうけれども、其第一歩と見るべき土俗誌の出現は、廣義の人類學の何れの部分よりも早かつた。西にヘロドトス Herodotos の記述が企てられるよりも、更に又何百年の以前から、東方の諸舊族も苟くも文字の能力ある限り、各其見聞を錄存せざるものは無く、さながら今日の學者の爲に、比較推論の快樂を準備してくれた觀があり、又人間の物を敎へたがる性癖にも、悠久なる由來のあつたことを感せしめる。しかし其等記錄の用途、若しくは之を作らうとした動機が、今の我々のと同じでないことはことわるまでもあるまい。根據の乏しい推論はさし控へた方がよいが、昔とても必ずしも單なる好奇心や、ローマンスを愛する心所謂異國情調の欲求の爲ばかりに、斯んな手數のかゝる仕事を企てたわけではあるまい。別にそれ以上の物々しい目途、たとへば後に來る者の心得とか、自身の功績の記念、とか、更に進んでは自分等の誇るべき一代の文華の標準を明らかにする爲に、自分よりも甚だしく劣つた野蠻人の憫むべき生活を記述することによつて、反面から之を映發して見ようとかといふ類の、可なり複雜なる趣旨は含まれて居たのであらうが、少なくとも後代の學者の利用法、卽ち時と場處とを異にする多くの事實を比較し、もしくは之に據つて他の文明國民の古の未開狀態を類推するなどといふことは、當初是を遺した者の豫想する所ではなかつたらう。從うて是が必ず我々の求める所のものを網羅し、同時に聽くことを欲せざる虛言を、少しも載せて居ないとは保證することは出來ない。俗な語でいふならば是は出來合ひの料理である。他には何等の依るべきものが無いといふことが、言はゞ是を貴重視する大いなる一つの理由であつたのである。卽ち此方面の知識に向つては、我々が非常に飢ゑて居るといふことを意味するばかりである。こゝに此學問の缺陷も今後の發展の可能も含まれて居るといふことも出來るのである。

我々の所謂土俗誌學 Ethnography の名の用ゐられたのは十八世紀の中葉であるが、是が新しい面貌と新しい任務とを、たとひ一部にでも認められるやうになつたのは、フォクロアが世に生れてから後であつた。それ迄の土俗誌は大部分が旅人の事業であり、主として又目を以てする採集であつた。旅人の長處は異鄕人の物珍しさを以て、其土に住む者の通例として氣にも留めない生活事相を、大小によらず見て來る點であつたが、是と同時に旅人であるが爲に、受けなければならぬ制限も少小ではなかつた。第一に考へられるのは解說の不足、及び土語を解し得ぬ悲しさ重譯による所から生ずる早合點である。それから季節や路順の都合によつて、見殘しと行き到らぬ地域とが甚だ多く、普通は二度以上の點檢を以て確認することが許されて居らぬ。それにも拘らず旅行者は本國へ戻つて來れば、いつでもたゞ一人の權威者として、誰からも其知識を疑はれないのである。しかも話を聽かうとする者

の要望が少しでも變つたことを多く、つまらぬ事は抜きにしてといふのであり、語る者の立場は又永い思ひ出の種といふ以上に、別の念願は無かつたものとすれば、此種の資料の可なり偏つたものであることだけは、最初から認めてかゝらねばならなかつたのである。それにこれらの文獻は今日相當に多くなつて居るが、それを一々地圖と照合して見ると、まだまだ記述のない島や岬は多い。それにその記述は年代を異にし精粗繁簡のむらがある。又人は同じ島同じ岬に上陸することが少ない故に、一所の記述を比較對象して見ることも出來ないのである。實際土俗誌は今日までにあるもので滿足することは出來ない。それにうつかりして居る間にタスマニヤ人の如く死絶えて了ふのもあれば、全住民がキリスト教の洗禮を受けて既往の宗教を離れて了ふものもあるのである。又言語や人の觀念思想の變革することもある。從うて不安な記錄をも尊重せねばならぬのである。

ところが近頃までの土俗誌類には、是を引用したり孫引したものさへ多かつた。私などは書生の頃から、いつも歐文の外國地理を讀むのに、先づ日本の部を見て其眞價を判定するのを習ひとして居た。古い長崎貿易期の外人を警戒した時代ならば、今の西藏なども同じことだから、モンタヌス一流の出鱈目があつても致し方は無いが、現に開港通商の始まつてから、暫く來て居たといふ外國人の中にも、隨分と頓狂な觀察をして居る者があり、それが何よりも露骨に銅版畫などの上に現はれて居る。二十世紀に入つてまで之を轉載して、たとへば二重橋の前にちよん髷の武士を歩かせた樣な風土誌も幾つかあつた。斯ういふのはたゞこの一つの例證に由つて、其他も信ずべからざることを我々に敎へてくれるが、本にする位だからさう思つて居るものもまだ多いのである。此點にかけては今日の日本人は、可なり便宜の地位に在る檢閲者だと言つてよい。白人等が特に我々をばかり、曲解せんとする意圖が無い限り、是は三十年前までの土俗誌の進度を、ほゞ代表して居るものと解しても不可はあるまい。卽ち稀には可なりに眞を把へた記述もあると共に、他の多くの地域に向つては、今尙よほど覺束ない報告が、唯一の資料として認められて居るらしいのである。一國內部の民間傳承の研究が、もしも此狀態を以て滿足して居たならばどうであらうか。私一箇としては土俗誌の最近の革新が、よつぽど思ひ切つたものであり、且つ一般的であることを確め得ない以上は、是と日を同じうして日本民俗學の、有るべき樣を說くことすらも躊躇するのである。

しかし幸ひにして二十世紀の土俗誌學は飛躍した。曾ては見ることを得なかつた新しい轉回が、多くの方面に行はれたことは私にも認められる。眞面目な學術探險の旅行や學者の用意ある調査は續々行はれて居る。うち見るに大體に形を描いた記述は年を逐うて精細を加へるに反して、心を察したものはいつまでも疝氣筋で、多分の臆斷を交へて居るといふのが、今迄の通弊であつたと言つてよい。

小泉八雲氏は日本人の紹介者として、世界が認めて居る一人者であつたけれども、我々が讀んで見ると合點の行かぬ節は尙多い。あの多感な心臟を以て觸れたものが、最も不自由であつた眼を以て寫したものより、勘違ひが多いといふことは妙な話だが、あれが譽め過ぎでなかつたら、不服を唱へる者はきつと續出したことゝ思ふ。それといふのが言語の障壁は可なり高いからであつて、是を隔てた觀察は實際は高の知れたものだつたといふことを意味するのである。バチェラー老師のアイヌ研究にしても、此點は見遁せないことを知る必要はある。多くの土俗誌學が專ら異民族の有形文化、殊に食住裝飾道具類の記載などに主力を傾けて、國々のフォクロアと唯僅かの接觸面をしか保ち得なかつたのも、原因は其働き手が、大方は啞だからであつた。耳から入つた印象は直接に心に屆くに反して、目には口と同樣に一應は處理してから、內に取込まうとする生理上の作用があるらしい。兎に角目はよく訝るが、見直して又能く自ら解說する。卽ち短期の觀察者には最も大切な武器であると共に、幾分か彼をそゝつかしい推斷者にする嫌ひがある。所謂觀光團の一土語をも解せぬ者が、戻つて大膽なる批評家となるなどは、言はゞ耳で疑ふまでの能力の無い御蔭であつた。外來者の調査は有限で、不可能の部分の多いことに留意しなければならぬ。

二、エスノグラフィーとフォクロア

それにしてもエスノグラフィーの目ざましい發達は、フォクロアの進展に對する我々の希望を濃からしめた。この二つの學問の重複は、今日誰もが氣附いて居るところで、兩者を忠實に研究すればするほど、その似寄りと一致點とがはつきりして來て、寧ろ二つの別々の學問とせずに一つにして了ふ方がよささうに思へる。しかし現在ではまだ矢張り二つに分けて區別して置くべき理由は多い。エスノグラフィーはもとより古くから存するのではあるが、それが今日の如く學術的探驗と材料の綜合比較を目的とするやうになつた其原因は、實はフォクロアの影響によるのである。如何に誤るまいとしても異民族の觀察は到底自國民同種族の自己省察に及ぶべくもない。エスノグラフィーに之を明かに氣附かしめたのは確かにフォクロアであつた。それと同時に、フォクロアが珍奇を書き殘すことのみを仕事として居るやうな道樂學問であつたのを、其珍奇が學問上の大法則の一露頭を示すものであることを推測せしめ得たのは、又未開人調査の影響であつたのである。フォクロアとエスノグラフィーとは最初から深い關係を持つて居たのである。やがてはこの二つの學問が相提携し相合する迄に成長す

るであらう希望は存するのである。

このエスノグラフィーから生れ出た學問エスノロジーEthnologyを、日本で民族學と譯すことは、フォクロアを民俗學と譯す場合、同音なるが故に紛しくて惱まされることが多いことは既に述べた如くである。自分は是を土俗學といふ名も既に存して居ることであるから、それを使はうとして居る。又或は殊俗學と譯してもよいとも思ふ。何にせよいゝ加減誤解せられ易い民俗學を、斯んなにしてまで紛はしいものにして置く必要は何處にもない筈である。從うてエスノグラフィーEthnographyを土俗誌又は土俗誌學と呼ぶことにして置けばよくなるのである。さうしてフォクロアを基礎とする一方の研究と堺を明瞭にして置くことは必要である。もしも幸ひにしてこの二つの學問が融合し、どこを取つても違つた所はないといふまでになつたら、もはや名を二つに別けて差別して置くことは無益の業である。しかしたゞ一部は似寄つて根本に異る所を指摘し得る限り、しかも双方が互に影響をし合つて居る限り、是非とも混同しない名稱を以つて二者の關係を明確にしなければならぬ。

タイラァE.B. Tylorが始めてあの大規模な古代文化の研究に取掛かつた頃には、英國ではもう大分土俗誌の事業が榮えて居た。資料は既に豐かで此上は比較と綜合との學問を待つばかりになつて居た。それで先生も「理論土俗誌」とでも譯すべき名稱を、一時は使つて見ようとせられたやうだが、世に殘された著書にはやはり「人類學」の語が用ゐてある。實際あの國では今日に至るまで、斯ういふ研究をするのは人類學の内だと考へられ、體質とか文化とかいふ部門に分けて見ても、其用途は一つであり、方法も亦略同じものと認められて居るやうである。其人類學といふ語を、日本の今と同じに、人類の所謂動物學的方面だけに限らうとしたのは大陸風であつた。斯ういふ風に此語の意味を限らうとする國々では、他の半分の土俗誌を基礎とした研究に、別に一つの名が無くてはならなかつた。そこで日本の學者が民族學と譯さうとするEthnologieといふ名稱が、追々頭を擡げることになつたのである。尤も是と同じ語は夙に英國にも在つたのだが、其内容は全く反對の意味を持ち、以前人種學などと譯して居たのが稍當つて居る。それと彼國のフォクロアとが、可なりに緣の遠い二つのものであつたのは無論だが、一方佛蘭西などでいふEthnologieとても、格別近いものだとは誰も思つて居なかつた。たゞ一派少數の學者だけが、二つの學問は結局は融合歸一すべきものだといふ、最も熱烈な主張を抱いて居た爲に、大膽に是を接近させようとしただけで、しかも其運動が保守的なる英國に起つたのだから、未だ十分なる支持を得ないのも亦已むを得ない。

併しながら此土俗誌研究の一大躍進によつて、英國はいふに及ばず、他の諸國のフォクロアが、受けた刺戟は深刻なものであつた。最初は多く集つた土俗誌の中に、偶然に遠くかけ離れた島や大陸に、

同じやうな土人の生活が併存するのを發見した。しかして其後の比較研究によつて、各種の土俗の起原・偶合・傳播・摸倣等に就き、そこに一定の理法の存すべきことを考へ、之を尋ね出さうとするに至つたのである。之が卽ち現代の土俗學である。しかしてフォクロアは之に向つて協力を求め、援助を乞うたのである。民間傳承の蒐集者の態度も、初は個々の土俗記述家と同じく、一小地方を限り其中で遭遇した稍奇異の見聞を片端から記錄保存しようとした。そのうちにダーウィニズムの大なる影響を受けて、如何なる文明國民も昔或時代には野蠻人であつたといふことに氣附いたのである。そして今日の世の中と一致せず、一見不可解な仕來りの生殘つてゐるものが古くからあり、且つ昔に溯るほどそれが多いのは、文化が今より劣つてゐた時代の名殘と見るべきものである。さう考へて來ると民間傳承の中には、土俗誌の中にあらはれてゐるものと、緣のあるものが多いことも道理となるのである。英國で曾て或片田舍の敎會堂の落成式に、雄鷄の頸を刺して其血を閾の石に垂らしたのを見つけて、ゴンム卿 Sir L. Gomme が一卷の書を著して、之を人身御供の大昔彼邦に行はれた證據としたなどは、一つの適切な例だといへる。斯かる珍奇は一つの法則の露頭、少なくとも曾て存した大いなるものの痕跡である。斯うして尋ねて行くとまだ色々の意外な過去が發見せられる。しかし世相の改り盡した西歐羅巴の舊國などで、幽かな殘留に據つて一國民俗學を建設することは、それ自身既に容易ではなかつたのである。それが日本と同程度の過渡期の國々が、等しく此方法を採り試みようとするに及んで、始めてこの學問の前途は洋々として春の海の如くなつたのである。二つの學問はよく〳〵緣が深い。末には相契つて一姓の親しみを爲さうも知れぬ。少なくとも自分はさう夢みて居る。

しかし現在は兎に角にまだ別ものである。今から是を混同するのは少しく氣が早い。それなら一體どこが其樣に違つて居るのであらうか。日本ではまだ之を訝かる人が少しは居るのかも知れぬ。土俗學といふ語が今も頻りに使はれて居るのみならず、それと民俗學とを互ひちがひに、同名異稱の如く用ゐる例も稀でないから。Ethnography といふ洋語は、當初から其本地では、卑しく鄙びた又奇怪なる所作、自分たちならさうはせぬといふ語感を持つてゐたのである。博く異種民族間の明白なる事實のみを探り究めようとするのが此學問であつた。或は蠻民學と名けても殊俗誌と謂つても當つて居る一面の知識であつたのである。自分たちの生活樣式思想又は信仰は、普通のこと當り前のことで、それと異つた異種族の憫むべき行爲心情は、中世以後の基督敎の立場からいふならば、まだ神の道にも惠まれぬ氣の毒なものであつて、其人々の事蹟のみが學問の對象であつたのである。そして今日と雖も、フォクロアは內部からの調査、進んだ僅かの國が自ら知る爲の學問であつて、土俗學は外部からの調査、世界の多くの民族が、先進開化の國の人々に知つて貰ふだけの學問であるとする、古風な定

義をまだ改めることは出來ない狀態にあるのである

三、習俗進化の跡

我々文化人の生活が變化し推移して來たことは、誰もが承知して居る明かな事實であるが、土人と名づけ蠻民と呼ぶ者の生活も變遷することは、古い土俗誌家昔の職貢圖家は氣づかなかつた。成長せぬものは生きず、生きて居るものは成長して居るものといふ、斯んな簡單なことすら知らなかつたのである。ジェネップ V. Genepp のいふ生物學的方法が、殊俗誌に入つて來たのは至つて新しいことである。西洋人に日本といふ國が紹介せられたのは、幕末明治初年の頃であつた。其頃の紹介が役立つてチョン髷を今日尙我國の保つて居る風俗の如く考へて居る西洋人もある。之は我々にしても支那人の概念を、爪を長くして煙草のみ吸うて居る者と考へるのも同じで、或時代の姿を固定したものと考へる宿癖なのである。それより前の姿があり、其後の變化があることを考に入れない誤りである。土俗誌家は、キャプテン・クック Captain Cook の時代の太平洋民族の姿をいつまでもその不變の姿とし、白人の刺戟や蠻人同志の影響や又內的な原因による變化を無視し勝ちである。もとより彼等の中に行はれる變化は、文化人のそれよりも遲鈍であつて、目に立つ變化は少ないかも知れないが、變化するのが人間の本性でもある點より考へれば、彼等の生活諸相や一般文化が變革することは爭へない。此變化は其國內、同種族內ではわかつて居ることであるが、外部者はそれを見、それに氣附くことが難しいのである。人間の聚落生活は變らずに居れないものである。是を我々が十分氣づくやうになつたのは、フォクロアの研究がよほど進んでからのことであつた。

萬葉集にあらはれた日本人の姿を、日本人の本來の姿と見て了ふことは早計で、奈良時代の文化に達するまでの變化が大きかつたことは明かである。又其後の變化も何段かの階段があつた筈である。今日巷間に現れる日本人の特性論の如き、動きのない常に固定したものとして見ることは誤である。不變なものがあるといつても、武士道の如き一つのものの、しかも其一面のみを見ていふに過ぎない。江戸時代三百年にしても、不變一定のものなどは一つもなかつた。慶長元和の頃と其後とでは、隨分世相は變つて居る。一つを以て類推し、簡單に論證するのは亂暴といふべきである。いつの時代の習俗もそれを橫斷して、其面にあらはれるものを見ると、變遷と新成とが其中に雜居し、又存續し續ける遺習のあることがわかる。此事實は既往の史學に對する編年史的態度の變革を要求するともいへるのである。

文明國にも舊い野蠻時代の習俗が殘留して居ることは、前述の英國寒村に於ける敎會の新築に際し、

入口の敷石に雞の血を濺ぐことによつても明かであるが、其他にもかゝる特異な例は多いのである。耶蘇の宗教が一世を席卷した歐羅巴大陸に、百千年を隔てた上代は生き殘つて居る如く、我國などに於ても佛教渡來以前の遺習は少なからず見られる。要するに人類は必ずしも手輕に親々の遺產を拋棄しては居なかつたのである。フレエザーが師のタイラアの學說を祖述して、所謂文明の中に殘留する野蠻の痕跡を指示すること最も丁寧であつた。彼の著「舊約全書のフォクロア」三卷は、同じ研究法を押及して次々に昔今の多くの民族の前代を知得する手段を示したものといへる。自分等をして言はしむれば、是はフォクロアとエスノロジーとの婚約であつた。ブリーク Bleek の「ブッシュマン・フォクロア要報」やエヴォンス Evons の「馬來フォクロア」の類も亦所謂蠻民土人の社會にも進化があり、今現前するものは又彼等が歩んで來た前代を說明する資料であることを示す。異民族の爲の史學は是によつて成立し得るのである。それ自身がまとまつた學問になるだらうなどと考へて居なかつた殊俗誌家の記述、卽ち土人の生活誌が、今まで歷史のない如く見られて居た蠻民の歷史を暗示して居るのである。實際よく觀察すると鳥獸の生態にすら變化がある。此理を推して行けば狼の歷史・猫の歷史・烏の歷史だつて成立し得る筈である。

斯く考へると資料の採集も、勢ひノルマルな現在の生活に調和せぬものをといふことになつて、自然珍奇なもののみを心掛けるやうになるが、それは邪道である。自分などは、或問題に關して必要なるものを、出來るだけ漁り集めるといふやり方がよいと思つて、さうして居る。植物學者の獨活なら獨活の研究家が、出來るだけ多くの獨活を集めるのと同じ意味に於てである。しかしさういふ方法は稍もすると、所謂考現學と同じ物好きに見える無駄をしなければならぬ場合がある。實際材料としては、どこまで採集するがよいかを明かにすることは必要である。我々の學問上の問題は疑問から、此疑問に應じ得るものを採集する、といふ風にするのがよいのである。さうすると例へば我々から發足するものであるが婚姻の問題を取扱ふ場合には、日比谷の大神宮で擧げる式などは自ら問題外であるといふことがわかる。要するに必要の範圍を研究の目的で定めることである。珍奇異狀變態のみを求めることは不可である。百年前の當り前が、今日の不可思議である場合もあり得ることを、考へ及ぼす必要もある。又京に田舍があり、モダンの中にも昔風は生きて居ること、文化が複合して存することも考へる必要がある。考現學的方法に無駄があるといつても、都會のやうに轉變の激しくない、例へば東京から十里も離れた田舍でなら、舊い習俗は尙多く變化せずに殘つて居る筈であるから、其方法を用ゐて採集するとしても、舊代の殘留は多く得られる筈である。未開の蠻夷の地ではすべてを採集することが必要とまで思はれる。我々の學問から見て所謂考現學的方法は將來を期待するこ

とが出來るかも知れない。

四、日本の土俗調査

最初の白人たちは自國の民間傳承と、未開蒙昧と稱せられる有色人種の民俗との間に、果して必然の一致があるべきことを豫期して居なかつた。しかし前述の如く人の生ひ立ち、群れて榮えて行く法則に彼是の差が無く、生活技術が共通で、しかもかの希臘埃及の住民にも遼遠なる昔の野蠻時代があつて、其痕跡は永く新しい社會に迄傳つて居たことが判つて來た。此發見が、この似て異る二つの學問を刺戟したことは大きかつた。人は環境のそれ〴〵に異なる中に生息しつゝも、尙案外に似寄りの方角を向いて、後れ先だつ歩を進めて居た。蠢爾として動かざるが如く見えた者の生活にも、尙百年前の面影は尋ねて漸くにして之を知るまでになつて居ると同樣に、所謂二十世紀の文明とても、さう完全には新しくはなりきつて居ない。たゞ後者は其殘留が時に切れ〴〵であつて、又比較的他との關係が薄く、たとへば此の屋陰にのみ雹が消え殘るやうなものである故に、それを史料として前代の社會の、次第に面目を改めて來た道筋を突き留めようとするには、弘く其比較を在來の歷史圈に及ぼし、

又新たに其方法を打立てる必要があるのである。

日本はその特殊な國狀を以て、今まで無意識ながらもフオクロアと土俗誌との提携に、よほど重要な媒介の役を勤めて居る。二つの研究の實質的差別はもはや今日では無いわけになつて居るのであるが、それでも一方は外來の智者、文字を利用し得る白人の手を借りなければ、記錄して之を學問の資料に供することが出來ず、獨り他の一方の民間傳承のみが、僅かに自國人の親切と理解力、又國の前代を明かにしたいといふ熱心を以て、直接に之を我學問に用立て得るものと認められて居た。其代りには後者の收穫は、通例は甚だ乏少なもので、大きな根氣を以て少しづゝの異聞を拾ひ集め、それを何等かの斷定にまで持つて行くには、屢々推測の假橋を、證據の割れ目の上に架けなければならぬ弱點があつた。ところが我々の社會は、今ちやうど改まつて行かうとする堺目に在つて、古い風は尙豐かに存し、それに新しいものが稍交つて、寧ろ反映を顯著にして居るのである。

日本で土俗學と民俗學との用語の混用されて居ること、是には面白い理由が存するのである。始めて日本へ未完成のまゝの新學を持つて來たのは、日本人類學の創始者たち、殊に故坪井正五郎博士の忘るべからざる功績であつた。今からもう四十何年も以前、日本へ入つて來た土俗調査なるものは、是も久しい間、系統ある土俗學とまで發達し得なかつたけれども、本來はタイラーなどの系統を引いた

英國風のアンスロポロジーであつた。從うて英の本國に限らず、歐羅巴はどこを搜しても、自國民の生活調査の爲に、之を講說した人は無かつたのである。日本ばかりがそんなものを借用して、我同胞を記述しようとしたのは奇怪のやうだが、あの頃はまだ新教育を受けた人々の、所謂舊弊に對する態度はよほど今と違つて居て、恐らく白人が雲南や交趾支那の土俗を見るやうな心持で、少なくとも自分の故鄕で無い田舍を旅行することが出來たのである。必ずしも外國の手先となり、一箇聰明なる未開人として働かされたことを憤つてはならならい。

實際のところ過渡期日本人の生活觀察は、自他の爲に有益なる發見を以て充ちて居た。獨り我々の研究に無限の刺戟と誘導とを與へ、且つ世界文化史の爲に幾つかの失はれた鍵を拾ひ上げてくれたのみならず、兼て又土俗學の一大弱點、卽ち當事者自身の參與無しには、到底學問は完成するもので無かつたといふことを、反省せしめる因緣ともなつて居るのである。今から更に半世紀も經てから回顧して見たならば、日本が自國人の土俗誌を承認したといふ一事は、此學問の歷史にとつて、何物よりも重要なる一轉期を劃するものであつたことが知れるであらう。悔いる所は少しも無いのである。この一つの事實があつてから、土俗學は一段と民俗學に近くなつた。學問に利用せられて居る資料に、出所と採集手段の如何によつて、非常な價値の差があることを明かにしたのも是からであつた。一つの民族を圍繞する多くの生活事實が、根でも枝でも常にからみ合つて居て、其調査は是非とも綜合的のもので無ければならぬといふことを、深く感せしめたのも此頃からの變化であつた。しかし今日の實狀に於ては、この有意義であつた我々の摸倣を、更に摸倣しようといふ民族は至つて少なく、世界の表面の十分の九以上は、今でもまだ諸方の國から來る旅人ばかりに、自分の生活を觀察して貰つて居る。日本の土俗調査が、今までは馬琴の朝日奈巡島記の如きものであつた土俗學を、フオクロアと堅く握手せしめ、フオクロア發達の契機となり且つ土俗學自身をも發展せしめたのであつた。そしてやがて綜合せられるのであらう一般民俗學史に、特殊な地位をしめるであらうことが豫想せられるのは愉快である。

五、世界民俗學の實現へ

世界民俗學の統一といふことに就いては、既に幾人かの先輩が其實現の可能性を說いて居る。たゞ問題の繁多と比較の障碍、殊に人の一生の限有ることなどを考へ合せると、勿論容易ならぬ計畫には相違なく、現在の世情に於ては、それは一個の莊麗な夢に過ぎぬといふ、引込思案に傾く者が多いの

も亦致し方は無い。しかし少なくとも、自分等の考へて居る如く、今見る一切の生活事實から、過去の變遷の痕が尋ねられるといふ理論だけは、人類はさて置き他のあらゆる生物の群にもあて嵌まるところである。それをたゞ比較的有效な部分から、追々に準備を積んで行くものとすれば、早いかひまどるかは第二の問題として、兎に角に到達すべき彼岸は見えて居る。人の根氣と忍耐力とを危ぶみ、乃至は次の代の歡喜の爲に自ら棄石となつて働く者の有無を訝るの餘りに、この當然の究竟地をさへ否定しようとするものが若しあるならば、それは推理の能力の缺けた人だと言へよう。我々が方法さへ間違へなければ、彼岸に到達するのはたゞ時の問題だけである。

今日の人類學は少なくともその體質的研究の側では、今あるだけの不充分の資料の上に、成立ち得るものとは考へられて居ない。所謂測定の事業は、是とてもまだ決して隅々に行屆いては居ないが、不明の部分は假に想像の見を立てゝ置いて、追々に實地と引當てゝ見ようと努力して居るのである。獨り他の一方の土俗學に携はる者が、今有り合せの證據のみを以て、出來るならば一つの結論を導かうとする風があつただけである。此風も當時は既に大分改まつた。卽ち性急なる綜合と合理化とを以て、學問に新たな體系を付與するに先だち、今はまだ大規模なる事實の搜査を進むべき時代であることが考へられ始めて居る。斯ういふ前途多望の轉回期にさしかゝつて、必ず外部の觀察に限るものの如く解するのは、土俗學の爲にも不必要な拘束で、民俗學を內から自發するの他は無いものと見ることも、實は甚だ不用意な斷定であつたと考へられるのである。私などの見た所では、廣い意味の人類學が融合して、完全な一つの學問となる迄には、今謂ふ土俗學はもう少し積極的に、こちらから進んで事實を集めて行く仕事になつて居なければならぬ。よほど國々のフォクロアと、近い形にまで其態度を變へた後でないと、社會人類學、或は强ひて民族學と名乘る學問とは一緒に手を繫いで並んで行くことが難しいと思ふ。しかしそれは必ずしも出來ない相談ではない。體質人類學なども其初期に於ては、やはりいつ起るかも知れない發見を賴りに、もしくは次の新事實の出現を豫想せずに、知られた材料だけで說を立てる學問であつた。それが幾度かの意外な經驗に鑑みて、次第に重き計畫ある觀測に推論の根據を置くやうになつたのである。二三の舊國に在つては民俗學も亦その通りで、つい近頃までは受動的にしか働いては居なかつた。搜せば見當るものだといふ確信がほゞ付いて、始めて科學風の實驗は試みられることになつたのである。

民間傳承の採訪と土俗調査との相違の最も注意すべき點は、前者は國々を主たる對象とするが、後者は旅人寄寓者の異人種を對象として居ることが、兩者共に人生事實或ひは直接の調査以外に資料を求めぬ點は一致して居るが、一方は精密に微細な內部の心理的現象にまで調査を進め得るけれども、

他はそれに比べて誠におほまかな見聞しか期待することが出來ぬ約束のもとにある。民俗學が成立し得る前提として、自分がそれを先づナショナルなものにする必要があるとするのは、一に此理由によつてである。エスノロジーは卽ちエスノグラフィーの集積の上に立つ學であるが、是は直接觀察、直接資料のみでなくとも、文獻に據り得らるゝならそれに據つても研究は可能性があると考へられる。前述のフレエザーの「舊約聖書のフォクロア」の如き歷史的研究は、文庫內の作業による業績である。しかし我々はどこまでも文獻は參考にはするが、此學問の性質上證據とすることを避けたい。此用意の下に一國民俗學が各國に成立し、國際的にも比較綜合が可能になつて、其結果が他のどの民族にも當てはめられるやうになれば、世界民俗學の曙光が見え初めたと云ひ得るのである。しかし比較法の恩惠はその華かなる夢を實現するには、今日はまだ十分に材料が揃つて居ないといふ他はない。

土俗誌の集積は近世の收穫進化層を知り得るまでになつた。尙資料の蒐集には國際間の協力が必要である。協力によつて始めて問題を見出すことも出來るのである。そして集つた資料を整理し比較綜合して見て、其結果が他の民族にも當てはまるやうになれば、我々の學問は大いに進步の域に到達したといひ得るのである。今日までのエスノグラフィーの貢獻した知識を大體まとめて見ると、(一)歷史は決して今までの收穫を以て滿足すべからざること、(二)一つの國民の進步には階段があつて、(三)表層少數の有識者をして代表せしめ難きこと、しかして今日の異例は中世に於ては常道であつたこと、(四)人のあらゆる行爲は由來のないものはないこと、消える理由がなかつたが故に殘存して居ること、また理由なしに殘存せぬこと、(五)一つの事象を熟視しただけでは理由のわからぬことも多く集めると理由のわかること等である。

フインランドのヘルシング大學に、比較民俗學講座が開設された如き、まだ早きに過ぎるやうに考へられぬこともないが、とにかく我々の學問の國際的進步發達を意味して居る。我々には國際協力には何れの國かが中心になる必要があると思へるが、勿論それは資料の最も豐富でしかもそれが最もよく整理せられて居る國であるべきは當然である。今日の國際的中心が、協會のある北歐に移らうとして居る理由は、全く此趨勢を示して居るといへる。それにしても極東の民間傳承に富んだ我國が、此學問の國際的協力の爲に相提携することの出來ないことは、此學問の進步の爲には遺憾なことである。自分の考へるところでは外國では今のところ一國民俗學を作ることは無理かも知れない。しかし我國でなら其可能性が十分にある。殊俗誌學がもつと〳〵進展し、一國民俗學によき刺戟と影響とを與へて、やがては世界民俗學を實現させるであらうことこそ、殊俗誌の今後の使命といふべきである。それには又もつと大規模な資料の搜査と、その比較及び學的綜合が必要なことは旣に繰返し述べた如くである。

第三章　書契以前

一、史學の有限性

人類の歴史は五萬年の長き年次を重ねて居ると謂はれて居るが、エジプトなどの舊文明國の過去にしても、其文化の跡が幾分でも辿られるのはせいぜい四五千年位である。歴史は元來或處まで到達すればそれから以前は判らなくなつて了ふのを當然の性質として認められて居た學問である。實際太古は邈かり矣といふのが史學の約束であつたのである。ところが遺蹟遺物の學問が、この歴史の限られた障壁を、先づ向う側の古代史の堺を、取拂うて押擴めることになつたのである。今は何處に行き何種と混淆して了つたやらわからぬやうな古民族の生活がぽつ〳〵知られて來て、文書記錄の類の的確な所據のない限り、歴史は說くべからざるものを言つて居た古い教訓が、但し書きが爰には必要になつて來て居るのである。そして曾ては史學のほんの補充を旨として居た考古學が、忽ち得意になつて人を先史無人の境に導かうとするばかりでなく、更に其方法を新たに生れた人類學にも傳授して、此

あたりの繩張りは頗る複雜なものとなつたのである。有史以前とか史前とかいふ語が、一派の學者の間に流行語の如く用ゐられるのは、其來由はこゝにあるのである。もとより學者の趣味にもよることであるが、考古學などの學問が、邈漠たる太古のみを對象として能事了れりとするやうな傾向は、どう考へても喜ぶべき現象とは云へない。

現在社會生活の需要からいふならば、遠き上世を究めるといふことが、今を知り今に近い過去の實情を詳かにする事業ほど痛切なものでないことは知れ切つて居る。それが太古史のみ先づ流行して、解釋が區々になり、議論紛々たる中世以後の沿革が、依然として判つただけしかわからぬといふのは變な話である。神武天皇以後の事蹟ならば、既にわかつて居るといふやうな豫斷も之を促して居ると思へるが、實はめい〳〵の家の五代七代前がもうわからないのである。村でいふならば百五十年か二百年位昔に、誰かがもう居たといふことを知るのみで、傳說一つ自分等に關係のあるものはないのである。鄕土史は全く空なものである。自分はかの有史以前以後の差別なるものが、果してよく國の全面、國民の全般に亙つて一筋の繩を張り得るものかどうかを疑ふ者である。一國の最も重要な事項に就いて、二三の記述を存するといふのみを以て、截然と區劃し得ると考へることが、そも〳〵の大きな誤謬ではないだらうか。我々から言はしめるならば、別に左右にまだ宏大な有史以外があり、個々の常人から見れば、此國の邊陬の地にある多くの農村などは、現に今日と雖も有史以前であるのさへある。今日多く出て居る鄕土史の類を見ても、此歷史の傾向を安易に摸倣して居る。例へば長野縣の諏訪湖史などを見ても、其內容は古代の記述と、封建制度以後の歷史をのみ專らとして居る。もつと興味のあり且つ實際に必要と思へる中間の歷史は全然無視されて居るのである。

プレヒストリックの研究のみが大事であるといふやうな觀念は、打破しなければならぬことはくだくだしく述べるまでもないことである、我々に忍ぶことの出來ぬ淋しさを感ぜしめるのは、有史以前の空漠に非ずして、有史以後の記錄の空虛さである。それに窮屈なのは在來の史學の方法であつた。文書記錄に記載せられざる生活、文學と交涉のなかつた階級の風習の如きは、たとひそれが國民の大部分を占めて居る事實であらうとも、歷史の外に逸し去つても一向構はぬといふのが普通であつたのである。フランスの學者が上流を有文と同義とし、民間を下級（アンフェリュール）として居る點は、歷史の上にも云ひ得るところである。歷史はもと我々の足跡の如く、無意識に後に殘されたものではなかつた。孔子の筆になるといふ「春秋」の昔から、筆者が是ぞ傳ふるに足ると認めた事實だけを竹帛に垂れたのが歷史である。從うて其內容の如きは、卽ち史官の判斷選擇に依るより他はなかつたのである。もとより下級無文字の階級の生活が其選擇に入る由もなかつたのである。史官は最初から歷史の

一部を無歴史にしようとする意圖を持つて居たともいへるのである。此風は紙筆の容易に得られるやうになつた後までも同じで、從うて農民百姓の記錄は、飢饉歳に於ける彼等の飢餓の狀態か、さもなくば百姓一揆の勃發位のみしか留めて居ないのである。平素の常民大衆の生活の如き、下等にして有りふれた當然のことは、記錄する價値のないものであつた。そして彼等の生活が變化するといふやうなことは知られず、いつまでも不變で永續するものの如く考へられて居たのである。

今日の學的問題は、實はこの以前顧みられなかつた方面に起つて居るのである。古今に通じて不變なる如く考へられて居たことが、ぢり〳〵變化して居ることが問題になつて來たのである。常民の衣服にしても髮容にしても、長い年月の間には完全に變化して居る。こゝに歴史なるものがなかるべからずといふことがわかつて來たのである。極端な例であるが、死に關することがら、卽ち death-culture にしても、貴人の葬式や古墳の築造などは特別の大事件で、正確な記錄の殘つて居るものもあるが、我我の知らうとする凡人常民の葬制、埋められる方法などは調べる爲の古文書なんかは皆無である。優れた史學者の中にも、今日の平民のやつて居るのは、古代の貴人葬制の殘留の如く考へて居る人があるが、稀有なる史料で總てを類推することの不可なることはいふまでもないことである。僅少の貴族の死が古墳を殘すとしても、數億の常民の死は何等のモニュメントも殘さないのである。葬制の歴史に對する認識は、根本から改められねばならない筈である。婚姻の問題にしても同じである。例へばこの村へ行つても、名家舊家では居村の者と緣組しない、卽ち部落婚をしないが、之を以て一般の婚姻史の一部と見なすことは出來ないのである。記事本末體の歴史は、史料のある部分のみしか出來ないものなのである。昔風の史學家ばかりならよいが、新しい意識を持つた人までが、稀有なる資料で研究しようとし、珍奇を誇らうとする傾向があるのは、慨歎に堪へぬところである。

又歴史が書き殘された理由が、其書かれた當時にあつたもので、後世卽ち百千年の後に、人あつて斯ういふことを疑問とし、或はゆかしがるであらうといふやうなことを豫想して、前以てそれに答へて置いて呉れたものなどは殆ど一つもなかつたのである。從うて我々の如く、歴史は過去を說明し、今日を解說して呉れる學問と考へて、手當り次第に起る率直な疑問を以て歴史に聽かうとする者には、餘りに窮屈である。自分等には史官の選擇しただけの範圍の歴史で滿足は出來ない。今日の歴史の閑却して居る部分に、我々が知りたい歴史、卽ち自分の謂ふ史外史が存するのである。以前のやうに、是だけ學べばもう十分と、小さな滿足ですまして居た時分ならば兎に角、今後は此史外史にまで手を伸さねばならぬ筈である。人間の複雜極りない生活の、何千年といふ久しい經歴を知らうとする歴史は、幾ら知つてもまだ行く先があるといふことを、よくよく覺悟する必要がある。殊に今まで閑

却されて居た常民大衆の歴史に於て殊に然りである。民間傳承の學問は、この歴史の缺陷を補ふべく起つた學問ともいへるのである。

二、考古學の再吟味

日本で Archeology といふ洋語を考古學と譯したことは、直譯に過ぎてもう改めてもよい頃だと思はれる。此學問の内容は漸時發達して居て、文字にとらはれた譯語の意味するものとは大分遠くなつて居る。それにも拘らず日本では相變らず上代偏重、石器土器をいぢくることばかりが考古學の任務の如くである。しかも少しでも有史以後に入つて來ると必ず歴史を傍に置いて考證を試みようとするのである。近世は彼等に何等の興味もいだかせないらしい。實物による近世の考究など、考古學者をあてにして居ると、誰がいつ手を着けて呉れるのか見當がつかない有樣である。我々は此狀態を叩き壞して、廣義の歴史の學問を變更させる爲に、所謂考古學なるものと民間傳承の學問との提携をさせ、二つの學問の境界を無くして了ひたいと欲して居る。しかし今日のところまだ此境界は餘りにもはつきりついて居て、兩者は緣もゆかりもない全然別物の如き觀を呈して居る。

考古學はその要求する古いもの、卽ち資料が存在するところまでを限度として止つて了つて居るのである。其點から考へると、宮本勢助君や杉山末雄君が、近世の實物を對象としそれに就いて研究を進めて居るのは、我々から言へば實に賴しいことである。今日の考古學はまだその根本的な弱點——年毎に作り替へられるものや腐敗し易い材料で拵へたものに對する研究が出來ないことに氣附いて居ないのである。例へば正月毎に作りかへる薦(こも)とか箸とか三寶などは、我國では豐富な植物の材料——藁や木材などで作られるだけに始末が惡い。金屬や石材で作られるものなら考古學は取扱ふが、同じく前代人の作つたものでも、腐つて了ふものは我等の關せざるところだといふのかも知れない。しかし現實に眼で見、實物に觸れて居る民間傳承の學徒は、それを見逃して置くわけには行かないのである。古いもので土中から出たものなら我々は研究するが、現在あるものは我々の領分でないといふのは變な云ひやうである。曾て信州の北佐久郡(輕井澤の附近)の發掘物の中から、陶器製の漁網のイソ(おもり)が出て來たことがある。古い土器には違ひないが、今日肥前平戸の志々伎浦などで用ゐられて居るものと違はないのである。考古學では地中から出たもの卽ち出土品といふと大事にするが、今日現に用ゐられて居るものは兎角輕視して手に取つて見ようともしないのである。琉球の糸滿人は子安貝の最も大きいのを用ゐて同じ用途に使用して居る。古さから言へば、土中から出たもので考古學

がもてはやして居るものよりも古いものである。斯ういふ風に出土品ならば尊重して取扱ふが、現在生きて使用されて居るものは、たとひそれが學術的に價値があらうとも、見向かうともしないのは、餘りにも偏屈な態度である。考古學に期待するところが多いだけに、此學問の古代偏重出土品獨尊をことゝすることを託ちたくなる。

考古學なる學問は元來美術の發達と併行したもので、もとは前代の不思議や殊に美しく見えるものの說明を求めんとして起つた學問なのである。從うて其力をそゝぐことが美しきものに偏する傾向があつて、美術史、工藝史と近い學問とも考へられるのである。しかし時代は此學問の範圍を擴張せしめ、更に又其態度を一變せしめようとして居るのである。古代人は念ずる力が强く、物を造る場合でも矢張り神佛を念じ心をこめて造つた。卽ち材料方法は備はらないにも拘らず、物を造る意志のみ强かつたのである。しかるに考古學は全然此裏づけを切離し、造られたものを素裸にして取扱ふ。古墳や塚などの研究にしても同じで、どうしてそれを造つたかといふやうな、物を造る氣持には成るだけ觸れないのである。我々は之を造る氣持を考へ、其理由をたづねる。考古學と我々の學問とは妙な處が境をなして居るとも云へる。例へば塚などの研究に於てもさうである。關東の平原には實に塚が多く、十三塚とか念佛塚とか鉦打塚とか經塚とか、さては金鑄塚・カノエ塚・庚申塚、人の名を冠した塚や狐塚までである。又山伏塚・行人塚も他の地方にまけぬ位多くある。關東で行人といふのは、主として出羽の三山に一度でも本式に參つたものをいふのであるが、是が何度かの參拜を重ね、又は年をとつて最終の花々しい登山をすませると、仲間を集めて大きな祭をして居る。此祭日の紀念に築いて後に殘したのが此行人塚である。狐塚などは狐を祭る信仰が變化したので、段々簡略なものを造るやうになつたが、もとはめい〳〵の屋敷の隅にも綺麗な土をもつて、此祭壇を設けたものらしい。是等は皆信仰と關係のあるものであるが、關東地方は土地が平坦で變化がないので塚を築くことが最も目に立つ事業でもあり、且つ之に代るべき記念工作物が發達しなかつたことが、是が多く築かれた理由であつたらう。人形塚・大日塚・如來塚も皆同じ理由から築かれたのである。

それにしても考古學の發達が歷史を援けたことは議論の餘地のないことである。兩者が研究を重複せしめて競爭することも患ふべきだが、又互に相讓つて己の好むところに割據し、其間に空隙を生せしめることは尙虞れねばならぬ。人類學考古學も互に提携して、dynamicなものの研究を進めて吳れることが望ましい。最近代人の齒が非常に弱くなり、視力が甚だしく減退して來たことなどの過程を、體質人類學の人から知らせて貰ひたいと望むのは無理な願ひであらうか。古い腐つた或は乾からびた動かぬもののみを、研究の對象として居るばかりが此學問の名譽でもあるまい。考古學と人類學

とは、共に手を伸すべきところを伸さずに居る。今日は有形文化の研究は、其仕事が非常にふえて居るのである。二つの兄弟學が忘らず、手を伸べ合つて進んで吳れることが何よりも望ましいのである。

三、文明國探檢

我々の學問が歴史の一部を擔當することを否むことは出來ない。しかも考古學に比して遙かに大なる成長力を持ち、且つ在來の歴史に存する空隙に氣づいて居るのは我々である。今日までの歴史は研究の範圍及び材料の採擇に餘りにも獨善的で、人間の懷く疑問に無頓着であつた。第一章に於ても述べた如く、名は何々史と銘打つてあつても、果して完全な體を備へた歴史であるや否や、心許ないものが多い。率直な人生の疑問に答へんとならば、先づ歴史の斯うやうの態度の根本的エマンシペエションが必要である。舊套を墨守して解放されなければ、如何に志のみがあつても効果のあがらないのは必定である。傳ふるに足るものといふ主觀に基づいて居る以上、如何に綿密な資料の選擇にも過不及があり、空間の生ずることはもとよりである。舊來の歴史を見ると、資料の不足した部分には邪推・空想で以て橋が架かつて居る。そして恰も名論告の如き態度が勝をしめ、小說的手腕を持つた歴史家が幅を利かすに至るのである。實際我々のポストヒストリーは幸福な狀態にあると云はれないのである。古と今とは文化の上に大變遷がある。しかも古人の殘して吳れた歴史は、其資料の採擇に誤りがあつたが故に、我々が今日要求するものが得られない。彼等が不變のものと思惟して居た過去の平凡は、變遷して了つて消失したものが多い。大衆小說では今と同じ人間が昔も動いて居たやうに描かれて居るが、そんなことがあらう道理はない。上代史を近代史と同じ氣持で取扱はうとする歴史家は居ない筈である。しかし知らねばならぬ平凡に關する記錄は缺けて居るのである。民風と名くるものが變化し固定せぬものであることは、古人も知つて居た筈である。しかしそれを後世の爲に書き殘さうとした人は、殘念ながら以前は一人もなかつたのである。

元祿年間のケンペル Kämpfer の長崎から江戸までの紀行文を見ると、東海道に乞食や山伏などの連中が居て、金錢をねだつて居たが、吳れぬと旅人に呪ひをかけて威しつけて居た記事がある。是は他のどの文獻——日本人の殘したどの記錄にも出て居ない。當時の人にはそれが普通のことであつたが爲に、記述したものが無いのであるが、外國人の眼にはそれが土俗誌的な興味を覺えしめたのであらう。是は山伏の歴史を調べるには大事な資料である。山伏氣質にどこやら斯うした氣分のあるのは否めない。斯ういふ記錄が我々に必要なよい資料となることが多い。異國叢書の有難味をつく〴〵感

じさせられる。支那人の手になつた魏志の倭人傳なども、もとより不正確は爭へぬが、平凡として我我の先祖が傳へなかつたことを傳へ吳れて居るのである。白人の手になる未開人の記錄が、彼等の特殊な生活を傳へて居るのも同じ理由であらう。異邦人の興味をひく點は國の內の者のそれと異つて居るのである。斯ういふ記錄が往々にして史官の選擇以上に大事な資料である場合がある。しかし又偶然に思ひもよらぬ過去の特殊な生活相がわかつて來る場合もある。江戸時代に流行した圖說繪卷の類が、記錄なき過去の姿を寫して居る場合は多い。未開人社會の過去だと圖說といふやうな資料で知ることは殆ど望めないのである。風俗とか風俗誌學といふ語は、斯ういつた點では我々の學問とするに可なりよい名であるが、それは今日では女の髮容、或は遊女の姿態などにのみ用ゐられて、內容がもう固定して了つて居る。惜しい名であるが使へない。

それにしてもフオクロアの有史以前——記錄の絕無な境に對する態度は、可なりに親切だといへる。今まで變化があつた筈と思へるが平凡事で、文筆の士も之に關して心や手を勞することを不必要として居たやうなものにまで、漸時研究の手を進めようとして居るのである。それにしても考古學との境がはつきりする必要である。先方で決めなければこちらから進んで定めてかゝる必要があると考へられる。アンドリウ・ラング Andrew Lang の如き覇氣のある學者が、文明國探檢等といつて居るのは、文明國に於ける社會事象が再檢討再吟味される必要性のあることを意味して居るのである。在來の史學でわからぬ點を誰がやるかは大きな問題でなければならぬ。率直な自然に起る疑問に答へられる方法があるにも拘らず、それのない方にばかりかぢり附いて居る必要がどこにあらう。史家の手の屆かぬ有史以前が幾らかでもわかつて來たことは、有史以外も亦わかり得る可能性を示すといへよう。たゞ現在までの樣子を云へば、考古學人類學は先づ榮え、民俗の學問は後れて尙とぼ〳〵と歩いて居るといふだけである。我々の調査研究——國內探檢は、史外史を明かにし、史學の缺を正に補はうとして居るのである。

史家は普通足利時代を以て暗黑時代などといひ、わからぬ時代として居るが、江戸時代三百年の文化の基礎は、實は此時代にあつたといへる。暗黑時代といふのは、此時代のことを詳かに書き殘したものはインテンショナリーにもアキシデンタリーにもないといふことを意味するだけであつて、資料を求め、方法を講じて此時代を研究しようとすれば、必ずしも入つて行くに道がないといふわけではない。それだけに史學の徒には興味の持てる時代でもある。江戸に幕府が開けたことによつて、直ちに足利時代と江戸時代を區劃し得ると考へるのは、政治史の方は仕方のないことであるが、文化史全體からは早計といはざるを得ない。もつと根底にまで調査の歩を進めなければならぬ。文化現象は寧

ろ元祿貞享頃を境として考へることが至當と思ふ。江戸時代の前半期は、又我々に興味深いところであつて、殊に部落生活の變化などは、此時代に大きかつたと思はれる。家卽ちファミリーの觀念にしても、此頃を境として變化して居ると考へられる。分家が流行して大家が漸時衰へ、小農が日本の名物とまでなつて了つたのも此時代からであつた。同族融合といふことが言はれたのも、融合せぬ者が現はれたからで、以前のやうな緊密な家の觀念の崩壞があらはれて來たことを意味して居るのである。之が又政治的にも促進されたのであつた。所謂軒役を取る爲には小家が多いことが便利であつたのである。農村に於ける家の觀念が、今日の如くなつて了つたのは、事實に於て室町時代の末頃或は江戸時代の初期より、もつと遲かつた。邊鄙な田舍では最近までまだ昔の家の觀念は殘つて居た。恐らく此現象のあらはれて來たのは、早くとも江戸の中期だつたと考へられる。兎に角現在の姿に社會が革まつたのは非常に新しいことである。常民の婚姻葬制の如きものも、それが所謂有史以前の有樣であつたが爲に、在來の史學は之を取扱うともしなかつたのである。しかしこゝにも國民史の一部があつたことは事實である。問題を拾つて自然に起る現代人の疑問を疑問として、それを解決して行かうとするところに我々の學問はあるのだ。有史以外の歷史はもつと闡明されなければならぬ。

四、起原論檢討

史學に抗議しなければならぬもう一つの重要な點は、起原論に重きを置き過ぎることである。人によつては、古いものでありさへすれば尊重する傾向を持つて居るが、以前は之は「いはれ」のあることで、由來が遠く、いつ頃、或は何々帝の何の時代のことだ、といふ風な說明が附くと、直ちに「そんなに古くからあるのなら本當だらう」といふ風に、安堵し信用して、すべてを了解し得たかのやうな心持を懷いた人が多かつた。起原論は實際には曖昧でも、特殊な魅力を有して居た。起原さへ解けば、それ以外の疑問は氷解して了ふのが普通となつて居たのである。そして貝原翁の「和漢事始」や、或は「公事根源」の如き、曖昧な起原論が他の當然起るべき筈の疑問を消失して居たのである。此氣風は今日でも尙殘つて居る。ラヂカルに起原を考へたつて役に立たぬといふ者が今日は存して居るけれど、其風は今日尙殘つて居る。實際起原は名や形に一部分殘つて居るだけで、名と形が變らなくとも實質の變革して居るものも可なりに多いのだから、それを無視して何の起原論ぞと云ひたい位である。

酒なんかにしても昔から飮んで居るものなのだから、急に止められるものでもなし、止める必要もないといふが、以前は今日の如くさうやたらに飮んで居たものでないことは明かである。大切な儀式

の際に異常な心理を味はうたり、或は共同の歡樂の爲にのみ飲んだ味が忘れられないで、所謂上戸が今宵も飲み、明日にも飲むといふ風になつて、だらしない飲酒の風は起つたのである。三千年來飲んで來たうまい酒であるといふことは、決して禁酒論の反對の理由にはならないのである。將來の生活計畫の爲に害があり、社會改良の爲によくないものにまで、御都合主義の起原論をかつぎ出す必要はない。それに固有のものといつても、古い形のまゝで保存せられて居るものなど一つもないのである。此點から云つても我々の民間傳承の學問が、有史以前に偏ることは、我々をして本來の使命を忘らしめることになり、弊害を伴なふことになるのである。過去を知ることと起原を知ることとは異つたことである。我々は此點をはつきりと認識し、區別すべきである。

さて我々は今日の世相卽ち人間の生活現象を、そのまゝ歷史の一横斷面と見ることは出來るのである。此横斷面の正しい觀念を得るには、彼の金太郎飴の斷折面を想像すればよい。そこにはあらゆる種類の事象がある。中には連綿として續いたものもあれば、又昨日から生じたばかりの新現象もある。そこに現はれて居るもの各々の起原は或は新しく、或は古く、各々異つて居る。日本の地方々々の生活も此通りであつて、今日東京の生活と似通つたものを一つも持つて居ない土地で、十年後には今日の東京の流行を摸倣して居るかも知れない。酒を飲む風習にしても、婚姻の儀式にしても、今日の横斷面では地方々々で各幾分づゝ異つて居るのである。しかも其相違を比較すると割合に似寄つたものが多い。是を根源が一つであるといふと誤解される虞れがあるが、極く〳〵些少な差異しかもたぬものを多く集めて比較すると、其根源をきはめ得るといふことは云へないまでも、少なくとも其變化過程だけは看取出來るといへる。卽ち或地方では消失して了つたことが、他の地方では殘つて居るとか、遠隔な地方同志で一致したものが存するとか、全く新風に變化した中に了解に苦しむやうな古風が存するとかいふやうな事柄を、多く集めて比較研究すれば、變化した段階は自らよくわかるのである。固有事物の存在、或は物に普遍性のあるといふ考へ方は起原論に災ひされた考へ方であつて、前述の如く、風俗を時代々々に別のものがあるやうに解するのも誤謬の甚しいものである。江戸時代とか足利時代とかと時代を劃することは元來不可能なことなのである。もとより時代々々の事實はあるが、それは複雜なものであつて、其構成分子の中に前代の忘れ殘りは勿論多く存續して居るのである。

社會事象を全的に見て、文化複合の相のあることは否まれぬところである。如何に新しくなつた現在と雖も、搜査すれば隨所に舊風遺習は見られるのである。今日は政治にしても根本的に變化して居る時代だが、古風は依然として文化の中心にも生きて居る。顏役とか親分とかいふことのあるのも、昔風が殘存して居る證據である。勞働爭議の有樣などを見て居ても、この新しい時代の運動の中にも、

尙日本獨特の古い分子は見られる。群衆が早く昻奮することなどもさういふ點から考へられようか。要するにホモジェニスな發生など考へられないのである。從うて民間傳承の資料も、文庫作業の場合、新しいもの、古いもの、といふ風に之を二つに別けて考へることが不可能である。今から二十五年も前に「後狩詞記」と題して、自分が日向の猪狩の用語を採錄した中の山の植物で、樺太にもあるものがある。是は山の或高さの地點と或高さの緯度の地とが、同じ植物の生活に適して居ることを示して居るのである。異つた土地に同種の植物が成長するのを斯う解することが出來ると思ふ。社會事象・文化現象にしても、又方言現象や年中行事にしても、遠隔の地に却つて一致があり、類を同じくするものが存するのは皆同じ理由によるのである。

我々は考古學者がたゞ一つの材料を掘出して珍重し、縱から横から上から斜からためつすがめつして居るのを氣の毒に思ふ。毎年作りかへられる多くのもの、又年を隔てゝ作り代へられるものを知つて居るからである。考古學者にはそれを作り代へる氣持などはわからう筈もないのである。新舊文明のカテゴリーの相違なども、實は自然に根ざして居るのである。敎養の文化と常民の文化との差は、園藝植物と自然植物との差とも譬へられようか。生活現象の歷史的推移の中に、古いものが維持せられ或は變化しつゝ傳はつて居るのは、古いものを捨てゝ了つたやうでも、それが時あつてレアクションとして今一度現はれて來るのである。そしてもうなくなつたと思ふやうなことが、非常時などといふ聲と共に現はれて來る。例へば山伏的な根性が、法律で山伏が根絕されてから百七十年もなるのに、顯はれて來るのも之が爲に外ならぬのである。我々が無意識のうちに、過去の生活を繼承して居ることは實に多い。それが時あつて顯はれるのは、過去の生活そのものがまだ我々の心に傳はつて居るからである。如何に態樣は變化しても、以前の生活の影の如きものが無意識の中に身にくつついて居るのである。我々は我々の過去の一部分がこゝからでもうかがはれるといふ豫想を持ち得ると共に、斯く新しくなつた時代にまで、尙舊風の殘存することを人生の不思議とせずには居られないのである。

五、我々の方法

我々の眼前に毎日現はれては消え、消えては現はれる事實、卽ち自分の謂ふ現在生活の横斷面の事象は、各其起原を異にして居る。此點より考へて、全事象はそのまゝ縱の歷史の資料を横に並べたのと同じに見ることが出來る。自分はこの横斷面の資料によつても立派に歷史は書けるものだと信じて居る。自然史の方面ではこれは夙に立證せられたことで、些しでも問題になつて居ないのである。自

分の如く歴史は現在生活を説明する學問であると解して居る者には、この横斷面に現はれるあらゆる現在生活相を無視することは出來ない。我々は我々自身の眼で見た事實を重んじ、それを第一の資料とする。自分の考へでは、日本がまだ〳〵もつとモダン化しても、今日まで經て來たプロセス、史的發展の順序は、此横斷面を具さに觀察することによつてもわかると思ふ。

同一のことがらにしても、現在の生活面を横に切斷して見ると、地方々々で事情は千差萬別である。其事象を集めて並べて見ると、起原或は原始の態樣はわからぬとしても、其變化過程だけは推理することは容易である。例へば燈火の問題にしても、今日はガス電氣を以て夜を晝の明るさになし得るが、田舍へ行けば蠟燭提灯はまだ幅を利かして居り、又單なる焚火や炬火であかりを採り、又何かの場合にかゞり火を燃やすなど、石油以前の燈火文化の變遷推移は、今日尙殘つて居るものからでも十分にうかがへるのである。そして斯ういふ風な現象は燈火だけでなく、あらゆる方面に見られる。今日全國小學校の運動會などで行はれる綱引の競技の如きも、之がもとは神祭の日の神聖な行事であつたことは、諸國の例によつても明かであるが、何の爲の行事、何の目的を有する競技であるかといふやうなことは、各地の實際を並べて考察すると自ら判明して來る。此競技が作物の豐凶、神意の所在を卜ふ神事であつたことは、琉球で行はれて居る此競技の實際と併せ考察する時は明かである。何れの社會事象も斯ういふ風に觀察出來る筈である。

史學を學ぶ者の道の誇り、外部で其律義さを譽めそやし傾聽しようとした理由は史料を容易に許さないリゴリズム(嚴正主義)であつた。しかし是は所謂史實の一回性に伴なふものであつて、後にも先にもたつた一度しか起らなかつた昔の大事件によつて、序に其圍りの世の樣や時の姿を說かうとする以上は、どれ程愼重に記錄文書の鑑定をしても、いつでもまだ安心がならぬのは知れたことである。しかも今までは是以外の手段を知らぬ故に、無暗に八釜しい證據物の批判をして居たのである。ところが一たび我々の集めるやうな人生事實を、新しい史料に採用することになると、左樣な苦勞をする必要はもう無くなつて來る。たとへば此社會の最大事件、人が飯を食ひ、妻まぎをするといふことなどは、過去にも何十億回とくり返され、又現前にも到る處に行はれて居る。それ程でなくとも年に一度、一代に一遍は必ずあることが、村毎に或歴史を告げようとして居るのである。私たちの謂ふ重出立證法は、至つて安全に今までの嚴正主義に代ることが出來るのである。然るに一方では史料を新たにこの繰返さるゝものゝ中から求めながら、尙舊式の證明手段に縋らうとする者があると共に、他の一方ではたつた一回の事實を見ただけで、それが何等かの過去を示すやうに說く者がある。斯樣なうつゝなき人々が寄り合つて、意見が合致したところが何にならう。所謂文化人類學の事象の中には、盲探

りにたゞ一つの例を把へて、それが幸ひに代表的のものであつた場合も稀ならず、爲に比較の勞を省いたと自慢してもよい例は多からうが、學問の基礎はそんな心もとないもの丶上には置けない。たとへば私の家の朝飯には、折としてタピオカを食ふことがある。それをたゞ〳〵來合せて心づいた學者が、日本人の食物は爪哇産の草の根の葛を煮た粥で、半透明のものだと報告したならばどうであらう。それを敢てしないのは言はず語らずに、既に他の多くの朝飯を知つて居るからである。

我々の重出立證法は卽ち重ね撮り寫眞の方法にも等しいものである。此方法の强味を知つて居る我我は、書物はもとより重要なる資料の提供者と認めるが、決して是を至上最適の資料とは認めないのである。實地に觀察し、採集した資料こそ最も尊ぶべきであつて、書物は之に比べると小さな傍證にしか役立たぬものである。書物による傍證法に力を入れ過ぎると、歷史と混淆した妙な危なつかしい「民俗學」が出來上るのである。さういふ方法を許さうよりは、まだしも消極的な嚴正主義の方がよい。それにしても十分以上の資料の集積と、その精密な比較とが最も必要であることが先づ認められねばならぬ。記錄は元來過去と現在との間に空隙のあるものであつて、歷史を僭稱して居ても、歷史としての存立の可能性の無いものが多い。例へば日本の農民史などは、在來の史學の方法では到底書けないものである。我國の農民に關する限り、其實情は今日尙實際は有史以前である。歷史はもとも

と政治的のものであり、且つ文字に關係のある部分は、其資料が存外多く存するものであるから、文藝史とか、或は文字を用ゐる職業を持つて居た者の歷史は、偶然の記錄もあるおかげで、出來る可能性があるが、それとても史料の空隙、無歷史の部分は多かるべく、缺陷は多いであらう。歷史を考へる場合、狹い範圍の鄕土史を作らうとする心は捨てる必要がある。又書契以前に力を入れ過ぎることが史學の名譽でないことはいふまでもない。かつて鍬の入らなかつた史外史の未開墾地の開拓を、我我は歷史の學問に對して熱望して居るのである。

第四章　郷土研究の意義

一、採集技術の問題

人生を直接に觀察する學問は、其起原だけならば必ずしも新しいものではない。奈良時代に出來た風土記の如きも、一概に支那の摸倣といふことは出來ない。自ら自己の環境を觀察するといふ心持があゝしたものを奈良時代人に殘させた理由でもあらう。近世に入つて多くなつた地誌類も、この直接な人生觀察の志があつたことを示して居ると云へる。ポーザニアス Pausanias の著したギリシャ記も、フレエザー博士 Dr. Frazer が注意して居る如くに、其環境に於て人生を觀察した書と云ひ得るのである。斯かる點から考へると、我々の學問は史學と比較して決して新しい學問ではないのである。しかも史學は早く老成したにもかゝはらず、我々の學問はまだ說明の出來ない部門が多く、從うて疑問ばかりが續出することゝ、未知の區域が廣いことゝに惱み拔いて居るのである。そして時と共に成長しなければならぬ必要が常にやつて來る。反對に史學は疑問を持たずに進む、中途に我々の未だ氣づ

かぬ重要事がひそんで居るのではないかといふ氣遣ひが、よし起つてもそれにかまはずに居る。ここに在來の史學と我々の學問との差異が存するとも云へるのである。

採訪採集は民間傳承の學問の根本である。採集の方法の如何は此學問の死活を制する重大な問題である。我々は採集技術に就いて先づ考慮を拂ふことの必要を痛感する。實際採集に當つて採集者が經驗するのは、採集に同情のない人々の多いことである。何故採集するか、又採集して何にするかとはよく訊かれる所である。しかし此理由と目的とは實際さう簡單に說明し難い。それが爲に採集者は時に嘲られ、時に地方人の怒を買ふのである。我々に考へられる最善の方法は、臆病な村人達に、彼等の知つて居ること、持つて居るもの、行つて居ることが、實に尊く價値のあることを知らしめることである。村には何かと村のことに就いて知つて居る老人があつて、是だけは若い者に知らせて置かねばならぬとして居る事柄がある。それを聞き出すには、他の村のことを少しづゝ知らせ、出にくい井戸のポンプに呼び水迎へ水をしかけるやうにして引出すことが肝要である。此方法は殊に說話や民謠の採集に適して居ると思ふ。

系統的に或郡なり、或地方なりを研究する爲に、書齋の學者はよく質問要項を拵へる。一派の學者は好んで質問要項による調査をやる。獨逸の學界で採用して居るクライヤー H. Krayer の質問要項はよく知られたものゝ一つである。此方法は一見必要な事項を根こそぎ調査出來るやうに見えるが、色々の點で不利益もあるから、自分等は此方法はなるだけ避けようとして居る。普通被調査者は質問を受けた場合、知らぬとか、そんなものはないとか、と率直に答へることを憚る。そして質問者に對する御愛想の意味で、そんなことを聞いたやうだとか、それはあるやうだとか、と曖昧な返事をする。又質問者を喜ばせる爲に、珍奇を誇張する場合もある。又此方法では答が全部來ることは少なく、それに答案者の氣質などにも可成りに影響せられて、所期の結果を得ることは難しい。學校の生徒などを使つて見ても、各人の氣質の相違によつて結果の芳しからぬ場合は多い。綿密な質問主義にしても理想的な調査は難しく、たゞ無暗に歩き廻る結果になることが多い。手帖に筆錄するにしても脫漏は多く、どの道外部からの採集は大體に行き屆かぬことが多い。比較的によい方法は言葉による採集方法であると思ふ。是は先づ質問する名目を拵へて置いて、其言葉のわけを聞いたり、適切な言葉を思ひ出させたり、諳記して居る言葉を訊ねたりする方法である。

調査に關して尙考ふべきは、地域を或程度まで小さく限ることである。恐らく縣を單位とすることは大に失し、且つ事情の色々なものが錯綜して居るが故に纏りが付かなくなることであらう。志あり又方法を解した篤學の士が隅から隅まで知り拔いた我部落、卽ち「我町村」から始めるのがよいとさへ

考へられる。或はそれ程に細かく分つことが不得策とすれば、せめては一つの盆地一つの溪谷を單位として、他に何等の解說者、案內者を傭ふことなしに、總住民の感覺と生存利害との解る區域に限ることである。此趣旨から見ると、郡でも或は廣きに過ぎるかも知れぬ。實際鄉土研究は內部からでなければ出來ないもので、外部から働いたものは皆失敗に歸して居る。要は問はずして聞くといふ自然な方法がよいのであつて、從うて同鄉人の調査が學的價値は多いのである。沖繩にしても、一寸考へると、あの群島は皆一樣のやうだが、那覇、國頭、八重山ではあらゆる點が各違つて居るのである。從うてあの島々の調査は、各島の人の手をわづらはさなければならないのである。鄉土研究を內部からする必要があるといふことは、此點からでも明かである。

二、所謂劃地主義

我々の鄉土研究は前述の如く研究の地域を小さく限るといつても、目的は全日本を對象として居るのであるから、フランスなどで稱へられて居る所謂劃地主義の研究とは異り、狹く限つた此研究地域は、卽ち全國的な比較綜合の爲の基礎の單位なのである。故に此點を先づ十分理解する必要がある。

ジェネップ Gennep などの劃地主義研究の主張は研究の對象を或一地方に限り、其地方を洗ひざらひに調査し、研究することを目的とするのである。彼の國が歷史なり政治の組織なりによつて自ら文化の單位が違つて居、從うてブルターニュの人はサヴォア地方のことは知らないのである。フランスでは實際一人で東南も西北もといふ風に研究は出來ないのである。方言の分布狀態にしても、言語地理學の示すところでは、各地が割據獨立した形である。しかして其變化の原因が種々複雜になつて居る。之は國が大陸にあつて列國の中に位置し、絕えず周圍の國々から——東からは獨逸の、南からは伊太利の——影響を受けて、地方々々が獨特の文化相を持つて居るからである。一人で全國的な民俗の調査研究をするといふことは到底出來難い故に、劃地主義の研究などが主張されるわけで、國全體の綜合研究は顧みられずにある狀態である。

我國にももとより文化の異分子があり、且つ朝鮮の文化、支那の文化、アイヌの文化が流入して居るだらうけれども、國全體からは東も西も大體區別はないともいへる。殊に古い習俗遺風が如何にして保たれて居るかを見ようとする場合、國全體を一つの共同體として考へることが出來るのである。要するに目的は一つであつて、採集に長けた人が國中を巡歷して調査し歩くより、地方々々に少なくとも一人以上の熱心な人があつて、鄉土調査をして呉れるならば、綜合と比較とによつて進んで行く

我々の學問は、豫想以上に發達し得るであらうと考へられるのである。獨逸の如きは寧ろ割據主義的な國であるだけに、さういふ要求がなくてもさうなつて居る。しかし決して割地主義ではなく、學者は常に他地方の研究を自分の研究の上に利用しようとして居る。そして中部で消え失せたものが、東西の山林地方などに殘つて居ないかと絶えず注意して居る。英國はどうかといふと、資料が消失して了つて居て、斯ういふことの云へぬ狀態になつて居るので、研究家は材料を得る爲に何處をでも調査しようとする。そして地方々々には研究團體があり、それがまた中央の大協會と聯絡をとつてやつて居る。伊太利ではシシリー島に民間傳承の學問が起り、そこに學會もあるが、國全體としては今のところそれがない。

普通一刀兩斷式にことを運ぶことを好む人たちは、全國をどこでも調査した方がよいではないか、文部省あたりが主唱して全國の津々浦々まで大々的に調査すればよいではないかといふ。しかし是は事實出來ないことである。ジェネップは methode cartegraphique の效用を說いて居る。是は今日流行の方言地圖の如く、民間傳承の採集・報告を地圖によつて示す方法である。此方法は調査の狀態や、分布狀態を調べる上に至極便利であるが、調査が一ヶ所でも殘つて居ると困るから、事實は不便である。政府で人口調査や農產物調査を全國的にやつてもなか〳〵うまく行かない。理論上有效でも、總括するために集つて來るのを待たねばならず、又不完全を甘受しなければならぬ場合が多い。我々の學問は總括の出來るまで待つとすると、それだけ進步が遲れることになる。我々の鄕土調査は全的にし盡さなくとも、學問進步の段階を踏んで行くことが出來るならば、そして今まで外部の人に委任し切つて居た鄕土の研究を、其土地の人々が自ら心づくまでに、興味を懷かせることが出來るならば結構である。問題を出して答案を募るにしても、その出し方の上手下手がある。自分等が「鄕土研究」誌を出してゐた時、自分は「發表批判」といふことをやつて調査の實績を擧げ得た。是は日本人の所謂尻馬に乘るといふ性質を利用したのであつて、先づ不足な或は少々間違つた報告を發表して、それに應じて、それは違ふ、此點は斯うだ、といふ風に訂正が來るのを待つのである。わざと間違へるといふことは、正式の發表の時には困るが、雜誌などの場合は直ぐに訂正が出來るから都合がよい。いはゞ誘導訊問法の一種ともいへる方法なのである。

研究單位を小さくすることは必要ではあるが、それは決して割據して、其地方で天狗になる爲ではないことは前述した通りである。單位はどこまでも單位で、山中の一隅だけの研究、半島の一村だけの調査だけで、我々の學問は進めることは出來ない。お互の間の交通聯絡を圓滑にし、綜合比較を便にしなければならぬ。そして自分の業績を出來るだけ緣のない人々にも多く分つやうに心掛くべきであ

る。今までの物知りは、周圍の人々に自分の博學を誇ることを目的として居たが、民間傳承の學徒はそれではならぬのである。山一重隔てゝも傳承の違ふ場合はまゝあり得るのであるから、學問の爲に右の心掛は大切である。要するに採集は重要であるが目的ではない。いくら採集が完成してもそれればかりでは學問は中途までも行つたのではない。それをお互が基礎づけ整理して行くことが學問を成長させることである。採集には鄉土人が最適といつても、目で見、耳で聞く範圍のことなら、卽ち自分の分類で第一部第二部に入れるものだけならば、言語の障壁を問題にしない同國人ならば、採集者の性質さへよければ、實際的效果はなまなかの鄉土人に勝ることがあるかも知れないが、目と耳とでは說明もつかず、事物の原因もわからず、疑問の起る心意の問題(自分の分類では第三部に入るもの)は、其環境に育つた鄉土人でなければ、採集し落すことになる。自分の三部分類に就いては第六章で尙詳述するが、是は決して事を好むが爲の分類でなく、民間傳承の觀察採集が鄉土人でなければならぬことを示す手段でもあるのである。通常古風な人の行動及び精神を支配して居、且つ不行爲の原因となつて居る禁忌の如き、不行爲であるだけに外部から來たものには窺ふことの出來ぬものである。例へば雪隱で唾をはかぬとか、爐緣で物を切らぬとかいふことは、至つて鋭敏な觀察者と雖も氣附くことは容易でない。わが國人が文明國人としては比類なきまでに多く持つてゐる此タブーの事實の如きは、外部の者にはわからぬ內部的な事實なのである。しかして斯ういふ外部にあらはれぬ心意の機微を理解することが出來なければ、有形文化、言語藝術も亦それを理解することは難いとしなければならぬ。今日までの民間傳承の研究は、其調査者が鄉土人でないのが多かつただけに不備なる點が相當に多いのも事實である。一國民俗學の完成には先づ鄉土研究が、鄉土人の手で精密になされねばならぬ理由がある。

我々の研究を、科學化しようとするのに實驗が不可能だから駄目だ、といふ見解をもつて居る者が世にはあるやうだ。其點は說明がつくと自分だけは信じて居る。自然科學の中にも實驗の出來ぬものは多い。動物の生態研究ならば動物を犧牲にしても出來るが、人間の研究ばかりはそれが許されない。種々の方法で、樣々の角度から觀察するより他はないのである。天體の研究にしても實驗研究は不可能であつて、之に代はる綿密な觀察で立派に研究は進んで居る。學問研究の上では綿密な計畫ある觀察は實驗と同價値だといへる筈である。此種の實驗ならば新しい我々の學問に於てもきつと出來る。現在はまだ一般にそこまで進んで居ないといふのみで、さうすべき必要は迫つて居るのである。鄉土人の鄉土に於けるこの直接の觀察考究は、民間傳承の學問を科學化する方法だとも云へる。何年かに一回、何十年かに一度の行事の精密な有目的の觀察記述は、天文學に於ける日蝕月蝕の觀測と同程

度の學的價値を持つて居る筈である。事象そのものを現象として、ありのまゝに凝視し、「わかつて居る」、「當り前だ」といはれて居る其奥の眞理を洞察することである。常民の自ら知らなかつたこと、今も尙知らないことに心づくことが、我々の學問なのである。

三、雅俗都鄙

日本人の既往の生活意識を見ると、あらゆる點に雅俗といふ觀念に可成りに强くとらはれて居たことが知られる。上流の雅びに憧れ、都府城下の華美に心ひかれることは人間自然の情かも知れないが、都市崇拜城下禮讃の氣持はあまりにも强かつたやうに思へる。今日尙此傾向は昔に比べて益々旺んなやうである。從うて都會は日に人口を增し、月に人家を稠密ならしめて居る。日本人は常に學問文章其他一切の技藝の悉くを中央に集合しようとする傾向がある。極端な文化中心主義の國といへるのである。それは都會人ばかりでなく、地方人が全く盲目的に町場を尊敬し過ぎたからである。自分の環境よりも他處をよく思ひ、羨しく感じて居たからである。かゝる氣風を一體誰が作つたかといふと、それは都會の俗人よりも田舍の優秀な學問のある者であつた。本來文字の師は、言はゞ都市文化の散布者であつた。人は無意識にも其感化を受け、又知りつゝも之を摸倣しようとして居た。學問に自信あり、乃至は野心ある者が都を晴れの舞臺として、高きに登つて號令しようとするのは自然であり、又競うて市井の喝采の聲を以て、遠國の注意を引付ける必要もあつた。村の眞率な歎美心が、却つて自ら輕んずるの氣風となつた原因は爰にある。學問も技藝も元は必ずしも都市と不可分のもので無かつた。それが末には雅俗の二流れに分れて、一は憧憬崇拜の對象となり、一は價値なきものとして顧みられなくなつて了つたのである。都府城下に對しては、其建設の爲には總國の力と志とを集め、更に又文化の基準を其處に求むべく、常に一足づゝは新しきものへ又美しきものへ、進んで居ることを都には期待して居た。村が今日の都人の血の水上であつたと同樣に、都は多くの田舍人の心の憧憬地であつた。

我々の鄕土研究は農民に自覺を懷かせるものと云つてもよい筈である。彼等の持つて居る氣質などは今までの學問では問題にしなかつた。それが重要な研究資料であるといふ事實は、我々によつて發見されたことであつた。平凡といつて誰も同じで當り前、大概のこととして、捨てゝ顧みられなかつたことが、今我々に入用になつて來たのである。實際以前は學問は聖賢の善行美辭と相場が定つて居た。殊に江戸時代には此風が强く、新を警戒し、「しきたり」を大事にして居た。從うて例へば百姓、

農民、漁民などといふのは或概念でもつてそれと定められて居たのである。しかし以前の平凡が漸時消失して、一方事實上の經濟が地方に推移するやうになつて、中央では地方の生活が問題となつて來たのであつた。こゝに到つて都會輕蔑田舍尊重の聲は時を得たのである。鄕土人をして我々の學問に參與せしめることは絶對に必要なことであつた、よし學問の本質を幾分遺失することは危ぶまれるとしても。今日は學問上の材料の選擇に革命が起つて居る。書物を大事にしてそれのみによることはもう出來ない。田舍の人々を我々の學問に參與せしめるに就いて考慮しなければならぬことは、田舍人の中でも學問のある者は心の至つて良い人の場合はよいが、他の多くの場合、それらの人々の同鄕人への觀察態度は、批判になり惡口になる傾きの多いことである。又農民達は侮蔑されても別に腹を立てない。奥州白石噺の宮城野信夫の芝居や、落語家の權助話を百姓達が面白がつて笑つて居るのである。是には何か隱れた古い理由、書物には書いてない大切な歴史が、其中にやはり潜んで居るに相違ないといふことまでが考へられるのである。

日本の都市の成立を見ると、京都大阪等を除くと概して新しく、住民も數代前は皆田舍人であつた。それが都鄙觀念によつて舊慣因習のすべてが都會で變革したものがよしとされて、田舍が又それを習ふ有樣である。婚禮にしても今日の小笠原流は新しく、以前行はれて居た我々の婚姻とは全然變つて了つて居る。葬式にしても今日都會で行はれる告別式の如きは、式本來の行列が都市に於て行はれ難いところから生じたものである。それを田舍で眞似る謂はれは更にない筈である。しかも都會で行はれぬといふ理由で、すたり衰へる行事風習は多いのである。住居の如きも、著しき變化の後に今日の如きものとなつたのである。古くは家には二通りの種類があつて、一方は通例大きくて念が入つて居り、他の一方は粗末なもので一時的の假屋であつた。室町時代以來諸國の大名には京都を常の住地とした樣な者もあつたが、元は其居所は矢張り假屋であつた。そして家來の多くは皆割長屋に辛棒させられたのである。それが今日の都市の狹隘な借家の根元となつて居るのである。又以前は尊敬する寄寓者の爲に、新たに假屋を建てゝ提供して居たのに、建築術の進歩と共に客舍も亦豫め常設のものが、大きな家の中に作り添へられるやうになつた。以前ならば單に爐邊の客座の上まで請じ入れてよかつた人を、奥座敷に通し留まつて居る間は、客の方がそこの主人の形になるやうになつたのである。今日旅館では此氣持を味ふことが出來る。是は滯在者が主人の爐の横座權を讓られた形なのである。主賓が床の柱に凭ることが當然となつたのは、横座の後が主人の寢床から變化して居る名殘である。又家中に疊を敷き詰めるやうになつて座禮の改定が行はれ、貴賓の款待を同輩にも及ぼすやうになつた。疊は元來繪にあるやうに、一人が一帖づゝ控へて居ればよかつたのが、今日の如くになつて、座

蒲團が用ゐられるに至つたのである。坐法も貴賓ならば正座の人は皆平座で、之に對する者は皆跪坐したのであつた。それが今日の如く一般化したのは大きな生活の變化といはねばならぬ。しかして斯くの如く都會で變化したものが田舍を風靡するのだが、有形文化の方面だけでも斯くの如くである、精神的の方面の影響はもつと大きなものがあつたらう。

雅俗都鄙の問題は、日本の文化の本質を論ずる者には無視することは出來ない。もとより田舍に無かつたもので、都會から持ち來らされたことを有難く思ふべきものが多々あり、都會にも田舍から持つて行つた固陋な習性によつて、新たなる不幸の種が生長して居ることもある。同鄕人には極端な愛好心を持ちながら、異鄕人を極度に迄警戒し又は輕視するが如きは、都會人が曾て故鄕の田園にあつて持つて居た偏見である。是は都會人の持つ惡い癖であつて、國全體を同胞と見る思想から云へば有害なものである。藩閥はこゝから生じたものであつた。しかし之は弊害の方をのみ見たのであるが、一方都會あるが爲に遠方の人を知り、交際婚姻の相手を、此廣い範圍に求めることが出來るなどの利益も多く伴なつて居るのである。雅俗都鄙と雖も此點を我々は見逃してはならない。

しかし我々が日本人全體が經て來た道を調査する上では、近世に到つて始めて勃興して來た都會に重きを置くことは不可である。都會の文獻だけでは資料が偏つて居る事に十分留意しなければならない。農村の記錄にしても都市の眼で見られたもののみが、年久しい文學として我々の間に傳つて居る。故に我々の學問では「民間」といふことは如何に說いても說き足りたとされない。フランスのセビオ P. Sébillot がポピュレールを有文上流に對するものとして居る點は、日本でも十分力說する必要があるのである。今までの材料選擇には此點が輕んぜられて居た。そして失はれたもの、わからぬとして捨てられたものが多かつた。民間の意識を先づ持つ必要があるのである。この民間といふ語を、農村と誤用することは殊に注意すべきである。勿論農村漁村山村も含まれるが、それだけの內容を意味しない。最も肝要なのは名稱よりも內容の認識である。鄕土研究といつても東京日本橋も鄕土であるといふ意味の鄕土研究と違ふ。文部省の今日やつて居る鄕土教育の鄕土觀念とも違ひ、フランスの劃地主義のそれとも違ふのである。一言でいふならば、日本人の過去、日本人が持つて居たものを知る爲の鄕土研究であつて、一地方だけの狹い知識をいふのではないのである。雅俗都鄙の論も此點からの考察に他ならない。

四、日本鄕土の特色

日本で鄕土研究の必要な一つの點は、日本が元來諸外國と異つた國であつて、飜譯の概念を以て我我の國土の研究を推斷することが出來ないことである。地理學の上から見ても、この細長い列島國は實に複雜であつて、南と北とを同日に語ることの出來ないことは明白であるが、又一つの山を隔てゝ雨量が非常にちがひ、或は川筋・盆地・平野・岬・島といふ風に地形の違ひも實に多く、從うて是が人間生活に交渉する點も多種多樣である。斯くも複雜な日本人の生活と社會を一樣に見ようとすることは、實際出來ぬ相談であることは明かである。しかも此國土の中に一つの種族が行き亙つて居ることは、國としては非凡であるといはざるを得ない。佛蘭西でも、スラヴの諸國でも、決して斯んな例は見當らないのである。同じ日本人が異つた環境に居るが爲に、異つた相や樣式を持つて居るのである。統一といふか、單一といふかユニティーの問題などを研究するにはもつて來いの國といへるのである。相違して居る點は餘りに多い。同じ日本といふ國が、よくも斯うまで雜多な外貌を持つて居るものだと感ぜざるを得ない程である。しかも又其間に距離を置いて近似類似があるのである。村の歷史なども、その古さ年齡を考へると、隣村近村よりも却つて遠い距つた土地にある村同志が却つて似て居る場合が多い。卽ち隣同志の間に相違があつて遠方に一致があるのだ。是はあらゆる方面に著しく眼につくところで、自分が「蝸牛考」を書いた時から云つて居ることであるが、言葉にしても遠隔の土地同志の一致の例は餘りにも多い。玉蜀黍の方言は全國を通覽すると十に近い系統に分れて居るが、それはたゞ中央部の一地方のみに著しい特別な現象であつて、大體に於ては三つか四つの系統になつて居り、中にもトウキビ(唐黍)の系統が全國の大半の地域を占めて居るのである。言葉を裏づけして居る民間の信仰にしても同じであるといへる。

水の妖怪であるカツパ(河童)の例などを見ても、此間の現象はよくわかる。河童の古語は「みづち」であるが、此語の訛つたのが各地に存して一致して居る。加賀能登近江ではこれをミヅシといふが、東北は青森邊でもメドチ・ミンドシといひ、また鹿兒島ではミヅシンといふ。しかも此ミヅシンに對する信仰でも、斯く遠隔の地同志で不思議なほどよく一致して居る。地面の土のことを諸地方でヂベタといふが、是を沖繩ではンチャ或はミザといひ、佐渡、八丈島でもミザといふ。遠くて關係もありさうに思へぬ島々で此の一致があるのである。斯かる殘留は偶然の結果のもので、僻陬の地に古いものが長く殘るといふことが考へられるのである。各地方の人々が寄り集つた場合など、話合つて互に驚くことも實際には多い。一つの土地を詳しく調べれば調べるほど此驚きは多くなる。何事に限らず孤立の不可なる大きな理由が存するのではないだらうか。鄕土を自分の住んで居たところといふ風に取らず、學問上の一つの單位と考へると、鄕土々々で差異があり、其調査の上に價値の相違があるこ

とは否まれなくなるのは當然である。

一般に平原で見ると我々のいふ郷土の個性は消え失せる一方である。殊に鐵道などが敷設せられると其變化は急激である。しかし鐵道の沿線から少し奥に入ると、全く其感化を受けないで舊風は依然として存して居る。要するに郷土には、我々の學問的調査の對象としては、階級があり段階があるともいへるのである。特に注意して早く調査しなければならぬ土地と、さう急がなくともよい土地とがある。地方の中學や師範の學生の所謂郷土調査の結果を見ると、此點の考慮の不足から、不必要な重複した材料のみ多く、表を作つたり地圖を塗つたりして見ると、空隙の多い不備なる調査であることがすぐにわかる。カルトグラフィックはさういふ調査上の不備を示して吳れるからよい。採集者によつても其成績が異ることがある。よい採集者がよい地に居れば之に越したことはないが、粗惡な採集家が其土地に居たんでは話にならない。今日の方言調査は此弊に陷つて居る。有形文化の調査にしてもさうである。同じ郷土研究と云つても、其資料の採集者に資格の甲乙のある如く、土地柄にもそれがあつて、早く調査を必要とするところと、さう急を要せないところとがあるから、採集家は其選擇に心する必要がある。

自分が大正九年に沖繩へ行つたことは、今から考へると大變に意義のあることであつた。今日では可笑しい程であるが、其以前は日本と琉球との關係、例へば日琉同祖論の如きも種々證明をしてかゝらねばならない狀態であつたのである。琉球の郷土研究によつて我々の舞臺は確かに擴大され、信仰の問題にしても、社會組織の問題にしても、方言研究にしても、全く面目を改めた。内地では極めて古いものが琉球では眼前に嚴存して居るのであつた。例へば神を祭る者が女であることは、文獻上の齋宮齋院のことゝ一致して居る。内地では祭神に關しては男の勢力が發展したのだといふことは是によつても知られる。沖繩の實狀によつて内地にも斯んなものがひそんでは居ないかと計畫的觀測が出來るのである。家々が分立する以前の、家を勞働單位とせぬ勞働組織の概念なども、琉球のウェーカの觀念によつて考へられる。今日の親子なるものが、産みの親子などより前は、勞働組織の單位であつたことも之によつて知られるのである。琉球と同じく郷土研究の上に珍しい材料を提供したのは東北地方であつて、岩手縣の一部に殘つて居るナゴの制度の如きも、日本の古い時代の姿を髣髴させる。信仰問題にしても同じである。郷土研究の一般的興味も此邊にあるのであつて、自分が「島」を刊行する理由なども、同じ點にあるのである。出來るならば尙僻陬の山村や特殊な小部落や、岬の村々なども問題にせねばならぬ。

要するに我々の調査は郷土研究はどこをやつてもよいといふわけには行かない。今日は我々の研究

も第二次的に進んで居るといふべきである。郷土調査に於て傳承者の性質を考へる必要は云はずもがなの時代である。（採集家の資質如何は勿論のことであるが。）全然調査をやる必要のないといふ土地は少なく、横濱神戸の如き新開地でも、集つて來た人々は皆故郷の民間傳承を背負つて來て居るのであるから、それがどういふ風であるかは必要な調査事項の一つである。材料の絶無なところはないわけであるが、郷土々々で其價値に差等のあることだけは明かである。此點は一國民俗學と同じで、郷土郷土の調査研究がすべて同じでないわけである。全國を最初から統一してやるといふことは無理のあることである。文部省が郷土研究に力を注いで居るが、もとより此統一の爲に文部省が適任であるといふわけには行かない。やらぬにまさるといふ位にしか考へられない。

五、學問孤立の危險

我々の郷土研究に於て虞れるところは研究を孤立させて了ふことである。古老の持つ郷土の知識を其儘其土地だけのものとせず、一般の知識とすることを望まねばならぬ。今日やゝもすると郷土研究なるものが各地で競爭される形で、自分の地方のことを多く知るだけの興味にとらはれすぎて居る嫌ひがある。若し郷土を誇る郷土研究家や老人のいふことに首をかしげたり、或はそれらの人々の珍奇を誇るものを、それと同じものが他にもあるといつて輕視したりすると、彼等は怒り且つ厭がるのは必定である。若い者がさういふ態度をとつて居るなら、他地方にある相當の例を出して見せて、それは遼東の豕として學的に開發してやることも出來るが、老人の場合などは仕方のないことである。今日地方の郷土研究の雜誌には斯ういふ風が紛々として居る。他處のことを顧みず、知らざるを恥ぢないのである。此風が進むと研究が孤立して了ふ。それが地方だけならよいが、日本に瀰漫することは學問研究の爲に憂へねばならぬ。人生研究は、或特殊性を知るのみで、一般的人性と何等關係せぬことは不可である。各々の郷土研究が全體を益するといふことを考へねばならぬ。今日古本屋では郷土史とさへ云へば高價になつて居る。割據的な一地方の繁榮を主とした案内記の如きもののみが、高價な郷土史であつては我々はたまつたものではない。此儘で行くと郷土研究は一般歴史とも沒交渉なものになり、文化の法則と無關心な道樂に陷つて了つて、無目的なものになつて了ふ虞れがある。

我々の郷土研究が進めば進むほど、我々には簡單に其知識を公用に用ゐることが出來る方法を樹てる必要が感じられて來る。是は文部省あたりにも教へる必要のあることであつて、郷土研究の手形交換所といつたやうなものが出來れば效果は十分に現はれることゝ思ふ。中央に勢力のある機關さへ出

來れば、地方の研究を集めてそれを發表し公の用に供することが出來る。地方の研究家採集家もその心持で發表するとなると學問に統一が出來て至極結構だと思ふ。さうしてグロテスクなもののみの採集を志し、それに驚かねば失望するやうな採集家を警めたいものである。多少でも人を喜ばせようとか、名物を示す氣持は捨てなければならぬ。今日自分などのやつて居るのは私設交換所といつたやうな仕事であるとも考へて居るのであるが、行く行くはパンフレットなども刊行し、國際文化局などとも結び、エスペラント語などで研究發表すれば、諸外國の學者をも喜ばせ得ると思ふ。フィンランドでは說話の研究や北方の信仰の殘存などを、F.F.C.で出版して居るが、世界の學者達は皆それを見たがつて居る。自分の空想は廣く遠く國際的知識の交換にまで翼を伸すが、鄕土研究を唱へる自分は、先づ國內だけでも聯絡のある統一のついた研究を完全にしたいと思ふ。鄕土研究によつて學問を孤立させぬやうにすることが最も望ましい。民俗學會といふ風なものの使命はこゝにあると云へる。是が出來なければ中央の學會としては無力過ぎる。今日までの調査研究は此點までわかつて居る、是から先が發見であり、必要な研究であるといふことを、研究者にわからせるやうな組織の機關を作りたいものである。他の學問は中央の人のみによつて動かされて居るが、民俗學ばかりは科學的基礎に立たんとする野心を持つて居る故に、知識の交換と比較とを廣い範圍に求めるのであつて、鄕土に於ける鄕土人の活動をも大いに期待するのである。自分等は鄕土研究といふ語を始めて使つた時から、此氣持を持ち續けて居るのである。

我々として十分注意すべきは、我々の學問をして隨筆式の學問とはつきり區別させることである。我々は資料をどの部分にも集めようとして居るが、此方法以外で人類の過去の生活や文化を、或は現在文化の經過を知ることは難しいのである。世人は我々の鄕土研究は「一部の」鄕土研究といふが、それは今のところまだ仕方のないことである。我々の抱負は之を「必然の」に改めることに在る。從うて非常に大きな障碍物は外部からよりもむしろ內部——仲間から生じて居る有樣で、我々は此點を歎かざるを得ないのである。人から道樂仕事と云はれるうちはまだよいが、仲間が少しづゝの物好きと物知りとをひけらかしては、いつまでも目的を達する折はないのである。實際一部の知識、一端の發見で結果を豫斷し、發表を急ぐ誘惑は自分も感じないわけではない。しかしそれを壓へて、不變の結論に達しようと心掛けることが我々には必要なのである。史學は材料は吟味するとしても一つの材料でもつて承服させようとする。從うて違つた解釋、反對の材料によつて今までの論が毀れることが往往にしてある。我々が多くの材料を持ち合せながら、尙はつきり結論に到達せぬのをもどかしがり、不可解とする人があるが、我々は大願をはるか彼方に置いて居るだけに、此學問の大成を期して居る

だけに、資料を精選し廣い範圍の比較を進めつゝ、最終までを學問の過程だとするのである。

要するに小さな偏頗な研究の天狗的興味、隨筆的學問に墮することを忌避する義務が、我々にはあるといはねばならぬ。もとより鄕土々々の生活を理解する爲に、鄕土主義に立脚することは必要であるが、協力統一を念頭に置くことが常に肝要である。天狗的氣分を壓へつけて、大きなものを向うに認めてかゝることが大事なのである。それが爲には、根氣よく資料の集ることを待つ忍耐力が必要である。青森縣で七月七日に行はれる「ネブタ流し」といつて人形を海に流す行事は、その流すのが燈籠であり、技藝を盡した紙人形であるが故に、之をネブタと呼び、其由來としては昔坂上田村麻呂が蝦夷を征伐した時、蝦夷の大將を誘ひ殺したのを土地の人々が今に傳へるとだと說かれて居る。しかし是と同じ行事は他の諸地方にも現存し、福島縣の白河地方では今はもう止つたかも知れぬが、やはり七日の未明に男女が小川に入つて水を首に濺ぎ、「眠つたは流れろ、豆つ葉はとまれ。」と唱へ、之を「眠つた流し」と名けて居たことが古い記錄に見えて居る。是はネブタ卽ち睡魔を流す行事なのである。紙がいつ頃地方に普及し、蠟燭がいつの時代に輸入されたかを考へても、此行事の由來譚を其儘信ずるわけには行かない。それを青森地方の人が自分の鄕土獨特のものと思ふのは、他を知らぬからである。鄕土研究を鄕土だけの知識によつてなし得ると思ふことの危險は、この一つの例を見ても明かである。

第五章　文庫作業の用意

一、文庫の迷宮化

文庫が迷宮になつたといふことはまゝ聞かされるところである。しかし是は新しい現象であつて以前は人は文獻の少ないことを託(かこ)つて居た。それが近來は文庫に入つてもどうしてよいかわからない程資料が亂雜になつて居る。廣い意味の史學の徒は、一般にこの文庫の迷宮になつたことに惱まされて居る。今日文獻の側からいふと、近代の記錄の方面では實に莫大な蒐集があり、材料は多きに過ぎる程になつて居る。江戸期にしても前期と後期とでは文獻の量に於て大變相違があり、後期は前期の十倍ではきかない程である。之が明治時代になるともう其十倍どころか、百倍にもなつて居る。斯く資料は急激に增加して居るのに、其取扱を昔のまゝの煩雜の狀態で續けて行くことは許されない。鎌倉時代を縱橫に一通り研究するやうな態度で、江戸のものをやらうとすると一生かゝつても出來さうにないことは明かである。たつた一つの問題をいぢくつて居るだけでも、人は老いて了はなければなら

ない。

一方此資料の多さは研究家に飽滿感を抱かせる。いかに勢力の強い人でも之だけの資料を十分にこなすことは難しい。今あるものだけで滿足を強ひられる。そして他の方面に向つての率直な疑問、卽ち研究心を遲鈍にして了ふ。若い史學の徒を見ると、資料によつて動かされて居るやうにさへ思へる。自身の率直な學的疑問、幼時から抱いて居た疑問を捨てゝ了つて、材料に曳かれてせうことなしに動いて居るやうである。實に氣の毒千萬といふ他はない。文庫の迷宮は實際入つて來たところも、出て行く先も、途中の道をさへ、わからなくして了つて居るのである。思ふに史學には最初から此傾向があつたのであらう。歷史はいつでも尙古派の武器といはれ、老人の護衞者の如く、古いことを語る爲のものとなつて居る。そして人が眼前の新しい文化に囚はれざらんが爲に、いつも稍意外なるものの記憶を强ひる傾向がある。そして學ばんとする者の要求を忘れさせ、あらぬ方面に導いて行かうとする。それを學問の義務とさへ心得て居るのである。之だけは必要だ、之だけは是非覺えておけといふのであるが、是は恐らく口で歷史を語り傳へて居た時代からの遺傳なのであらう。歷史は實際求める者の知識慾とはぴたりと合致せぬ學問なのである。日本のみならず何處の國でも、歷史が人の傳記に偏る傾向があるのを見ても其點は明らかである。多くの地方史が名士の傳記或は個人的主張に滿ちて居るのを見ても、歷史の此傾向があらはれて居るといふべきであらう。實際資料が多くなれば其重壓に堪へられなくなるのが今日の歷史の學問である。

史學と民間傳承の學問との相互的恩惠は認めねばならぬ。我々は歷史の恩惠に依らずしては過去の之ほど遠いといふことは知り得なかつたらうし、又事物及び社會文化の變遷進步の跡を心づくのにまだまだ時間を費さねばならなかつた筈である。我々は史學によつて事物の沿革を敎へられた。言葉を換へていへば、史學の暗示指示によつて、民間傳承の學も養はれて來たともいへるのである。今後と雖も、我々は此沃野から分離して、獨往することは出來難いのである。しかも亂雜にして茫漠たる前代知識の荒海の中に、我々を連れて來てしかも突放したのも彼で、其被害に我々は現在苦しまされて居るともいへるのである。そして今日の民俗學は、史學の處理し得ぬものを押しつけられた形なのである。

前にも述べた如く、民間傳承の學問は此史學のわがまゝな態度に反抗して起つた學問であつた。我我は書物にひきまはされて自己の知りたいと欲するものを見失はない爲に、書外の眞實を求めんとしたのではあるが、それが僅かの年月の間に、今度は自分も此文庫の重荷にうめくに至つたのである。あらゆる他の學問の研究よりも遙かに雜駁な、價値の大小の區々なる材料が、我々の學問には過多にあ

るのだ。史學の文獻よりは雜駁であるだけに餘計に煩雜である。實際のところ以前史學が惱んで居るのを遠く對岸の火事視して居たのに、今ではそれ以上に此煩雜に苦しまねばならぬのである。其理由はもとより多いであらうが、此學問では文獻を供給することが容易なだけに其煩雜もひどいわけである。殊に少年の著述が多く出る可能性さへあるのが此學問であつて、片假名で物した手毬唄の採集だけでもが十分研究材料となり得るのである。歌俳諧には神童文藝として六つ七つの天才が出るが、それには多少の教養といふことが必要である。しかし民間傳承の學問では、そこらのつまらぬ人間でも、いゝ資料を書き殘すかも知れない。農人だつて字さへ書ければよき記錄者になれるのである。それらをさへ見落してはならぬといふ不安を我々は持つてゐるのである。しかも材料の範圍は廣いが故に、多數の文獻を持ちつゝも尙手に入らぬ資料になやまねばならぬのである。現に自分等は具さに其苦汁を嘗めつゝあるのである。

材料が多くなり、しかも此頃のやうにあちこちから印刷物が出ると、集書家としては實に苦鬪しなければならぬ。其上現在は古本屋の活躍時代で、標題によつて人の心持を搔亂すことが甚しい。おまけに書物は徒に高價になつた。實際鄕土研究の流行は、古本屋の狡猾を助長して、我々は我々の欲する書に似た名の書物に惱まされて居る。自ら招いたこととは云へ皮肉すぎる。古本屋の斯かる活躍も何によつて起るかといふと、文庫内の資料が亂雜のまゝにすつぽかされて居て、整理せられて居らぬことに起因して居るのである。

二、記錄整理の聲

民間傳承の資料及び文庫の整理を率先して叫び出したのは外國でも玄人の大學の先生達であつた。多く集つた煩雜極る材料を、出來るだけよく見きはめのつくやうにしようとしたのは、いはゞ亂雜極るのに困惑し切つた結果とも云へるのである。スキスのホフマン・クライヤー Hoffmann Krayer の刊行した年刊は其一例である。是は書誌であつて題目だけを揭げたもので、之によつて文獻を集める人は多くなつた。しかし英獨佛の文獻を主とし、露西亞・スカンディナビヤ・デンマークのものも入つて居るけれども、是だけでは心細いと云はざるを得ない。大體歐羅巴のものしか集つて居ないから、是らの國以外のもの、例へばユダヤのものや支那のものは是ではわからない。白人以外の人種の中にも多くの資料のあり得る學問を、白人の間の言語のみによつた資料を見てわかる筈はない。我々から云へば、此學問に重要な役割をなし得る日本を除いて、何の國際書誌ぞである。今後の年刊は日本の

を入れなければ不完全である。どうしても入れさせなければならぬ。斯ういふ點から考へても、世界民俗學の成立するのは程遠い將來のことであるといはざるを得ない。此學問は何と云つても人種が單位である故に、先づ一國内の整理が出來ることが必要である。國々の文庫が整理せられて後にこそ、世界の民間傳承の整理も分類も可能となるのである。外國人は何かといふとすぐ universal といふが、それは彼等の知つて居る範圍のみをいふのであつて、其範圍以外のことを云はれると彼等の知識は破滅しなければならぬのである。資料を國々で整理し、それをどし〳〵飜譯するとよい。少なくとも一つの言語一つの人種を單位として、一通り知識のコムミュニティーを作り、其後で國際的協同に進むべきである。今日獨逸ではクライヤーも參加して、獨逸民間傳承研究團聯合 Verband deutscher Vereine für Volkskunde を作つて居る。是には瑞西・和蘭・チェッコ・獨逸・蘇格蘭も加入し、縱の聯合が出來て居る。又フィンランドのヘルシング大學ではアンチ・アールネ Antti Aarne の主催する比較通信聯絡 Communications comparatives がある。

日本は一國一言語一種族の國故、國内に於ける整理が樂である。先づそれをしなければならない。資料を今日の如き煩雜な儘に置いては、此學問の發展は覺束ない。實際今日の狀態では、我々はあれもこれも讀まねばならぬので惱まされること夥しい。中央に學會があつて國内の聯絡機關となり、且つ率先して此亂脈を整理し、此學問發展の爲めに盡してもらへればと願はざるを得ない。しかしさう願ふのは時がまだ早いのかも知れない。自分だけの用意をすることが必要であらう。それにしても整理をするには無理のない自然な分類をすることが肝要である。分類には既存する過去の資料と、是から發見せられるものとの二つを眼中に置いてせねばならぬ。自分は過去の記錄を三つに分けようとして居る。卽ち記錄の性質によつて計畫記錄・偶然記錄・採集記錄の三つに區別するのである。

歷史はもと我々の足跡の如く無意識に後に殘されたものではなかつた。その書殘された理由は、何れも當時にあつたもので、後世千百年の後に、人あつて斯ういふことを疑問とし、又ゆかしがるであらうといふことを豫想して、前以てそれに答へて置いてくれたものなどは、殆ど一つも無かつたのである。其動機の如きも大體筆者の自己本位で、贋系圖贋證文から寺々の緣起、諸道諸流派の由緖書の類に至るまで、少なくとも自分に不都合な事實を書き置いたものは無いのである。是等を自分は計畫記錄と名けて居る。偶然記錄といふのは、文字を筆者の計畫した以外の問題の闡明に援用しようとする場合、それを假に名けた名であつて、是は今日の史學の大半が利用して居るものである。最後の採集記錄は一種の計畫記錄だといひ得るが、採集記錄には百年二百年後の疑問に對する豫想は全然無かつた、しかし採集記錄の材料は客觀的に價値を有し、將來長く價値ある資料たるべきものといふとこ

ろに目安があるのである。もとより今までの採集には目的の散漫なもの、或は小局部に限られて居て不精確なものも多かつた。或は幾分の虚僞と自己本位があつたかも知れない。我々の要求する民間傳承の採集記錄の性質内容は、我々が久しい經驗に養はれて次第に力强くした一つの推理、卽ち「日本人が日本人の顏附と骨格を具へ、日本語を話し、日本風といはれる家に住んで居ると同樣に、その箇我の小さな擧動・表現・内部感覺等の中にも、必ず若干の歷史の痕跡、つまり某々鄕土の住民の末なるが故に、殘つて居る何等かの生活の特徵があるだらう。」といふ假定の上に立つて居るべきである。いはゞ漠然として居るが、民間傳承の學問上の要求に叶ふ材料の採集をいふのである。

三、計畫記錄

計畫記錄に對する我等の態度は、先づ既往の史家のとは違つて居なければならぬ。是を利用し受け納れる道筋を十分考究しなければならぬ。卽ち計畫記錄の見直しといふことが最も必要である。もとより計畫記錄には有名なもの、しかく有名でないものが並存し、其計畫の如きも千差萬別自己本位であつて、筆錄者の異るが如く其態度も各異つて居る。例へば宮廷に仕へた人々が、後代に傳へんとして遺した日記類にしても、筆者の心持が樣々であつたことは言を俟たない。是を眞に讀破し中世人の心持を知ることは面白いことがあるが、それをして居る人はさう多くない有樣である。斯かる計畫記錄を重んじ、事件のみを主として拾ふやうにして行つても、往々にして大事を見落すことはある。日記は其數が多い。中には簡單なものもあるが、それだからと云つて不用だと顧みずに居るわけに行かぬ。御堂關白の日記の如きは我々に必要な多くの知識を供給して吳れる。賴長の「台記」は是を利用する者が所々切れ〴〵に使ふが、あれだけの記錄はさう多く殘つて居ない。部類物として殘つて居るものも多いが、それは多くの人の利用の外にあつて、式部官あたりが利用するだけになつて居り、一般にはその面白いところが判らぬ有樣である。「中右記」なども、我々の學徒には重要なもので、院政時代の中位の貴族の常の日の生活を知るによい資料である。暇な時の京都近郊の旅行や音樂の遊びの樣子などが細かに記されてあつて、地方的なことなども之によつて知られる。又後々のもので面白いのは、古くは定家の「明月記」、下つては御法興院の「看聞御記」がある。後者は政治に關係せぬ人の常の生活を記し、採集記錄の如き價値を持つて居る。又「山階言繼卿記」には貧窮時代の公卿の地位や生活が活寫してあり、此他「實隆卿日記」・「滿濟准后日記」・「大乘院雜事記」等も各尊重すべき計畫記錄である。民間傳承の資料として宮廷の御儀を研究することは必要なことである。恐れ多いことであるが

皇室と共通して居る常民の慣習の解説は、此方面から多く得ることも出來るのである。

計畫記錄が其筆者の個人的な計畫のみを傳へたものとして、粗末にすることは我々の採らぬ態度である。之を既往の學者の讀んだ心持と違ふ心持で讀む必要がある。書物は元來孤獨なもので、味讀する者のみが、眞に其書を利用し得るのである。しかして書物によつてはフオクロアによつて始めて其本旨が明かになるものもある。但し是は我々の學問の應用に過ぎないのである。限られた目的で――例へば卽位式の時などに利用する爲のみに――讀まれたものを、違つた意味に於て讀むことによつて益々古書を讀む興味は加はり、且つ古書解釋の技術も進むのである。是らの歷代記錄の內容は探索を便にし、又讀み易くすることは最も必要なことである。斯ういふ記錄の索引が完成することは國の學問を進步させる上に望ましい。朝日新聞社が爲した索引附の六國史の刊行の如き、大學或は國家の事業として計畫を樹てゝ貫ひたいものである。學者に斯かる記錄を始から終まで讀ませようといふ要求は無理解も甚しいことである。これらの記錄を新しい目で見ることは必要だ。せいぜい百二三十種もある日記類を年代順に並べ、何を調べるには之と之とで用足りるといふ風に、整理がなされゝば都合がよいと思ふ。

計畫記錄は個人的な興味の押賣が多いから、是を利用することを廢すべしとなす者もあるが、前人の選擇には自ら共通の部分があり、又違つたのもあつて、我々には新しい知識の材料ともなるのである。佛敎の書は近來は內容の一つ一つに就いての研究が進んで來たが、「靈驗記」や「因果物語」等、皆今日の佛敎徒からは輕く見られる事例を多く擧げて居る。支那の「法恩珠林」や「日本靈異記」・「法華靈驗記」等を見ても皆同じである。之に依つて我々は其の持つて居る大きな意義を知ることが出來るのである。是を計畫記錄と見ず、偶然記錄として受納出來る。佛徒が書殘して吳れたもので特に有難いのは中世以前の常民の生活である。農業經營の集團的生活の實際の如き、「地藏靈驗記」「砂石集」に詳しく記されて居るのであつて、計畫記錄を一概に輕蔑出來ない理由は多々あるのである。

群書類從の中に多い合戰記の如き、其價値は採集記錄と異ならず、古いだけに價値がある。戰爭は生死に關係があるだけに、人の生活作業では之ほど大規模なものはない。從うて平素少しも現れぬ人間心理が戰にあたつて現はれる。しかも同じ心理が、一つ二つの記錄に現はれるばかりならば特別の例とも考へられるが、多くの戰記の中に現はれる場合は採集記錄と同じに見られないことはない。例へば戰の前後にあげる鬨の聲――勝鬨とか戰に出かける時の血祭の鬨の聲――の如きも、我々は耳慣れて居るから氣づかないが、今日尙續いて居る事である。又軍記類に多い戰勝者が喜んで敵の首を持つて歸る事や首實見などは、西洋の記錄にないことである。此理由を臺灣の蠻人やニューギニヤ土人

の首狩と結びつけて考へることは、世界民俗學上の大きな問題だといへよう。又日本文化史の中で重要な役割をなす女の勇氣――神功皇后の御鴻業や北條政子の政治的手腕、さては巴・板額の强力など――があつてこそ、九州東北などの各地に見える、優しさ貞淑さからは恐らく遠い女の氣性の說明もゆくのである。古くは日本では結婚の前と後とで、女性の責任範圍が違つて居た。貞淑のみが女の美德でなく、女も時に男勝りの力を必要とすることが多かつたのである。それが諸侯の嗣子が多く繼母にかゝるやうになり、封建時代が長く續いて從順が女の美德となり、之が下々にも浸潤して行くやうになつて日本の女性の稟質は變化したのである。是は日本の文化史上重大な意義のある變化に違ひない。軍記物・武邊物・合戰物が、我々に必要な多くの暗示を與へることは、これだけの例によつても明かである。

計畫記錄は計畫された內容のみを知らうとしてはならぬ。敵討の記錄を見ると慘酷な點ばかりを力めて記錄しようとして居る。しかし我々は其點にのみとらはれて讀む必要はない。書き殘した人の意圖と違つた點に留意すれば、戰記物や佛敎の記錄が、皆それ〴〵大きな事實を我々に示して呉れる材料となるのである。我々は計畫記錄は其事實は欺かぬものと見て、そこに據るのである。我々の態度と復古黨のそれとは根本的に違つて居るのである。我々は計畫記錄を編輯しただけの歷史を尊重出來ない。水戸の大日本史は昔からの計畫記錄をそのまゝ受け繼ぎ、皇朝史略はそれを又其儘に採錄して居る。今後我々は計畫記錄を見直す必要がある。

四、偶然記錄

記錄には必ず計畫がある。之を他の目的に利用すれば乃ち我々のいふ偶然記錄となるのである。歷史とフォクロアとの本質的な差異も、此偶然記錄を採用すると否とにあるともいへる。偶然記錄といふ語は新しく我々が採用したものであるが、名だけは古くから存して居て、其種類も少なくはない。白人の三百餘年來の日本見聞記が此頃になつて新たに飜譯せられ、また松下見林の「異稱日本傳」や山本北山の「日本外志」が編輯せられて、偶然の意外なる資料の出現に我々は感興をそゝられて居る。しかし是等から得た知識は、たゞ一つの有效な暗示といふに止まり、是だけを根據として自分たちの前代を說くことは出來ない。偶然記錄は時に杜撰多く、固有名詞の間違ひ、計數の不精確、內容の誇張等のあることは、普通に我々の經驗するところである。是を直ちに資料として採用することの危險は甚だ多いのである。偶然記錄を資料として採集する場合、此危險を十分吟味する必要がある。水戸の「大

日本史」の如きは、偶然に書き殘された資料や、掘出した金石文を用ゐて直ちに利用して居る。我々から云へば偶然記錄を利用して、而も文字以外の資料を用ゐぬといふことは可笑しいことである。大學の史料編纂所は實際此皮肉に値する。大日本史料の第十二卷は殆ど此偶然記錄で、廣く小說等を材料として居るばかりでなく、「ことのついで」に書いたといふ風なものまでも採錄して居る。江戸末期になれば益々蕪雜な材料を史料とすることは多くなるだらうと思はれる。史家はいつでも材料を選ばず、緣遠い材料でもあればそれを直ちに利用する。從うて例へば農民史の如き、農商務省で編纂した記錄を見ても、江戸時代を除くと、院政時代から前に多く、源平以後殊に足利期に入ると殆ど文書は殘つて居ない。其爲に史料は昔ばかりに詳しくて、中世の數百年は飛び越えなければならないのである。しかも上代の史料は歷代の詔勅、農は國本であることを說き、稅を免じ、池溝を造つた記錄ばかりである。飛んで江戸時代の記錄はと見ると、百姓一揆の云ひわけと、飢饉年の救助の要求との以外に何物も無いのである。史に志す者は偶然の史料に援を求めずには居られないのである。

江戸時代は學問の盛な時代であつたが、我々の特に注意すべきは町人學者が出現したことである。學問は元來公のものだが、江戸の後半、天明安永の新しい時代に、全く畠を異にした民間の學が起つたのである。彼等は彼等獨自の態度で歷史を取扱はうとした。そして我々の求める所謂率直な疑問から發足しようとして居た。大阪の村瀨栲亭の「藝苑日涉」などは漢文ではあるが、京大阪の市井の雜事殊に衣食住の卑近な生活ぶりを觀察した內容に興味があつた。江戸の方には更に學問は町人の間にも普及し、屋根屋疊屋の親方とか煙管屋の亭主とかが、博識な讀書家でもあれば兼ねて樣式化して了つた舊學風の破壞者でもあつて、武士が縉紳僧徒から取上げた學問を、次に一般平民に引繼がしめようとする橋渡しの役をつとめて居た。山東京傳の「骨董集」や「近世奇跡考」、柳亭種彥の「還魂紙料」や「用捨箱」等は、當時の戲作者達が、特にこの現實の社會相に注意を拂ひ且つ其由來を尋ね說いたものである。瀧澤馬琴の「玄同放言」や「燕石雜誌」の類は、彼の衒學臭味の高いものであるが、題目を凡人日常の疑問とするところから選び出して之に答へようとしたのは進步であつた。かの喜多村筠庭の「嬉遊笑覽」が隨筆漫錄の域を脫して、系統ある一個の專門書になつて居るのは、我々の推服するところである。著者の心持は小兒の生活を集錄するにあり、最初は主として彼等の遊戲と玩具若しくは童言葉や歌や昔話を中心として始めた研究らしかつたが、それから段々菓子・餅其他の食物、住居の結構から衣服・女の髮容・賣り物・芝居・遊里のことまで取入れるやうになり、後には其順序を立直したらしい爲に、著者の本意は書名にしか之を窺ひ得ぬやうになつたが、兎に角今までの學者のやらぬ事項のみを選りに選つて、わざと問題としたことは卓見である。其材料の如きも其三分の二以上は、古俳諧及び

貞門談林の俳諧やお伽草紙浮世草子に仰いで居る。

此一派の人々が、江戸の學風を變化させるのに力のあつたことは明かで、世の中の微々たる一小事も無意味に起らぬことを敎へて居る。そして社會の事實こそ歷史の材料であることを敎へて居るのである。明治時代の學者は必ずこゝを通つた。田口卯吉氏の「社會辭彙」などを見れば其感がする。斯かる新しい學風の弊害は、わざと小さい馬鹿々々しい事柄に對する興味を主とするやうになり、やがては風流を遊蕩に化し、芝居や遊女傾城のことのみを筆にするに至り、初志とは違つたものになつて了つた。もとより一方に遊里文學が發達し、爲永春水、梅暮里谷峨等の蒟蒻本が流行したことにもよるが、其根元は子供のことまでが研究の對象になり得るといふことが影響したことであつた。綠樹園石川雅望の「東なまり」「都の手ぶり」も斯ういふ空氣の中で出來たものであり、其他幕末に江戸から新潟に下つた漢學者の寺門靜軒の「新潟繁昌記」、さては成島柳北の「柳橋新誌」、等も此種の記錄と云ひ得る。斯くして兎に角に學問の視野は廣くなり、興味を何に持つてもよいといふ風を生じた。偶然記錄が特殊研究に役立つもとはこゝにあるともいへるのである。

俳諧は我邦文藝の一つの變態的產物とも云へるもので、外國人には決してわからぬものである。是は連歌から脈を曳いたものであるが、其連歌の元がよくわからない。多分懸け合ひの歌から生じたものと思へるが、半句づゝ云ひ合つて繫いで行く文學である。最初から固い學問を好まぬ人ばかりに持て囃され、同時に又如何なる民間の卑事小事をも採つて文字にしようとし、且つさうすることを生命として居た文學である。連歌に柿の本・栗の本があつたが、俳諧は雅(みや)びに反抗して起つたもので、昔から下賤の者の氣を吐いた文學であつた。其歷史を見ても宗鑑・守武等の芝居がゝつた俳諧にあきたらずして、貴族にも面白さのわかる貞門が起り、貞門の規則づくめの睡つたい俳諧に倦んで奔放な談林調が生れ、やがて蕉門が興つて或程度の落着きと、雅びに對する一種の型とが生じた。芭蕉「七部集」で「冬の日」は尙談林に近く、「曠野」を越え「猿蓑」を過ぎて「炭俵」に到ると、卑近の題材を克明に用ゐて常民生活を實寫して居る。芭蕉の旅行は彼に農民貧乏人の材料を多く提供して居る。俳諧は寫實と云つても言葉の上の事實だけでなく其奧の氣持——農民などの心意の動きまでを表現して居る故に、偶然記錄としての價値は至つて高いといへる。俳諧の附合は宗匠の豫想を裏ぎつて突飛なことをいふ興味を持つて居る。故に腦裡にありとあらゆる影像を描いて附けるのである。俳人が旅で苦勞をするのも其爲である。從うて限られた短句の中に、意想外の生活記錄が盛られて居る。貞門談林蕉風各特殊の面白さを持つて居るといへるが、談林の突飛な空想や、蕉風も「冬の日」あたりの內容は偶然資料としての價値は低い。それにしても芭蕉の紀行が限られ、九州地方に及んで居ないことは惜しいことであ

る。天明の俳諧は蕉風を追ふだけで偶然記錄としての價値は割合に少ない。

日本の村の記錄は至つて少なく、研究資料の乏しきを託たれるが、俳諧文學に其一面の資料を得ることの出來るのは、せめてもの我々の喜びだといはなければならぬ。日本に木綿の入つて來た以前の村の生活には、未だ説明せられなかつた幾つかの問題が殘つて居る。諸國でゴケタホシ或はゴケナカセといつて居る稻扱道具一つの傳播によつても、農村生活の時代相は多く變化したのである。芭蕉七部集にある連句

帷子は日々にすさまし鵙の聲
籾一升を稻のこき賃

蓼の穗に醬油の徽をかき分けて

是は、百舌の啼く頃までまだ帷子を著て居るやうな後家女が、稻を扱く仕事の手傳ひに來て一升の籾に有付き、おまけに御馳走になつて行く光景を想像したものと思はれる。ゴケタホシの出現によつて女の稻扱作業を傭ひ入れる必要はなくなつたのであつた。斯かる五代七代前の重大な事實が俳諧文字に織込まれて居ることを我々は注意する必要がある。又俳諧と緣の深い所謂市井の文學、西鶴等の浮世草子の類も亦此方面に多くの大切な材料を藏して居る。

斯かる點の考究は我々の發明といへない。之皆江戸の町人學者の偉大なる感化によるのである。しかし此偶然記錄を餘りに尊重すると誤解せられる。世の文獻派は偶然記錄を丹念に根氣よく調べるが、それが珍らしいことばかりを求めるやうになると所謂隨筆學者である。今日の如き文庫の狀態ではそれも仕方がないともいへる。隨筆學問はヂレッタントには持つて來いの學で、其長所は確かに持つて居る。今日まで我々が問題とせずに過して來たやうなことを取擧げて、我々に暗示を與へて呉れるのも隨筆學者だといへる。我々はそれを利用することによつて多くの利益を得て居るのである。日本の文庫の如き亂雜なところでは小ざかしい嘘つきが學を荒ませる。氣魄を失つては居るが學問の素養のある人――名譽教授といふやうな人が、此方面を擔當して呉れると誠に結構なことだと思ふ。偶然記錄の中には、保存の計畫の全く立てられぬものがある故に亡佚し易い。此點は一應考慮に入れる必要はある。文庫を尙のこと亂雜にし、色々の材料の含まれた變な書物を並べたことが隨筆文學の罪といふべきである。マレットが、There is a real danger lest anthropology on the social side be too bookish. と云つて居るのは味ふべきである。是は師のフレエザアなどに對する批判とも考へられるし、或はフランスの學者達の、書齋のみでの學問に對する反感を表はしたものとも考へられる。ともあれ亂雜な文書に對する態度を定めることが、我々の學問の方策を樹てることである。此亂雜無方針の中

で拔馳けの功名をやらうとすると隨筆家になる。我々は自己の好みに赴くにしても、生物學の如き統制ある分類の中に居て、其一部を分擔するやうに心掛くべきである。

五、採集記錄

採集記錄に就いて先づ考ふべきは現在までのもので第一期を劃し、それを整理し、既往の採集が奈邊にまで進んで居るかを十分に知つた上で次の目標ある採集に取り懸ることである。今日までの民間傳承の採集で大體考へられることは、一部門一部門では採集が十分になされて居て深入し過ぎた傾向の見えるのもある。生殖崇拜といふやうなことには可成り深く迄突進んで行く人がある。しかも一寸も普遍性のない方法で、自分一個の我儘な選り好みに從つて採集を進めて居る。是ではいつまで經つても採集の事業は進まず、學問は發展しない。勿論すべての地域に亙つて、すべての項目を根こそぎ採集し盡すといふことは出來ない相談だが、此部分は早く消失して了ひさうだから早く採集する、此部分は大事だから急いで記錄して置くといふ風に、緩急を詮考し、前後を考慮することはもとより必要である。採集が地方によつて偏り、傳承の種類によつてはまだ手のついて居ないものがある。或は採集者に適任者がない土地があり、あつても杜撰な採集、嘘の採集のみ多いのもある。實際採集にむらがあり、段階のあることは爭へぬ事實である。採集に就いては次章で尙詳しく說くが、我々が注意しなければならぬことは、ダアウィン Darwin が、「惡い理論より惡い材料が恐い」といつた言葉である。日本の採集も古くから行はれ、今は既に消失してなきものの記錄が殘つて居り、我々の利用に供せられて居るものが多い。かの說話集としての「今昔物語」や、菅江眞澄の殘して吳れた民謠集「鄙の一曲」などは、今日如何にしても不可能な貴重な採集といはねばならぬ。

本居宣長翁の「玉勝間」を讀むたびに、其着眼點の凡ならず、夙に國民の歷史が今日の一轉回期に到り向ふべきことを洞察して居たことに驚歎する。同書には一ヶ所ならず「ゐなかに古へのわざの殘れる事」の如き民俗誌家に深い印象を與へる文章が多い。察するに伊勢松坂の鈴屋の書齋へは、多數の知識慾に燃えた靑年が諸國から集つて來て、たまたま異なる遠國の人同志が落ち合つた場合などは、話はどうしても各自の鄕土の生活の比較になり、普通の好奇心のある人ならば、耳を傾け又は筆記せずには居られなかつたことであらう。伴信友、平田篤胤の如き人が宣長のこの傾向を幾分受繼いだが、大人自身は其生涯を古典訓詁の業に傾け盡されたことは時運の力とは云へ惜しいことであつた。信友翁は書物以外の事實にも隨分よく注意し、少なくとも若狹一國のことだけは進んで探訪しようとしたや

うである。篤胤翁なども地方人の話を悦んで聽き、今日の民俗誌家の如く著述の上に諸國のことを引用して居ることは、獨斷家の翁のことであるだけに注意せられる。江戸の漢學者松崎慊堂の如きも、漢文ながら達者な筆で自身耳で聽いた田舍の珍しい色々の事物を、可なり精彩に書き殘して居るのである。

計畫的になされた記錄の採集で興味のあるのは、江戸期も終に近い文化の十一二年頃、江戸で屋代弘賢を中心とした一群の學者が、諸國風俗問狀といふ小冊子を印刷して、之を各地方の知人に頒ち答信を求めたことである。弘賢は書家として又藏書家として有名な人で幕府の役人をも務めて居た。民間の學者としては石原晴明、中山信名などといふ人も是に關與し、此帳面を可成り數多く發送したやうである。しかし殘念なことには其返事は幾らも集つて來なかつたらしい。今日知られて居るものは內閣文庫にある秋田風俗問狀答、備後福山領の答書、越後長岡領のことを書いた北越月令の三つを始め、三州吉田領、丹後の峰山領、大和の高取領、若狹の小濱領のがあり、其他、北越月令は不完全だといつて新潟附近の學者青木定計の增補したものが一冊ある。最近神戸の河本正義君が淡路の風俗問狀答書を發見して活字本を作つた。九州や四國にも或は出て來て居るが、それが世に知られて居ないのかも知れない。此問狀は木版刷りの橫帳で、「正月には何をたべ候や」といふやうな問を約百項程認めてある。其結果は、質問が江戸町方の年中行事で、最初から偏つた又混合したもので用意を缺いて居たから、失敗といふべきであつたが、日本では最初の試みであつただけに我々には興味ある材料だといへる。斯ういふ質問法は得て失敗に終るものである。明治に入つて、風俗畫報が此風俗問狀と同じ氣持で採集につとめ、四百號まで續刊し多くの資料を集め得た。月刊雜誌であつただけに、答が直ぐ翌月の雜誌に揭載されるからでもあつたらうが、方言・嬉遊・年中行事等、貴重なものが多く集つた。勿論資料としては不純なものもあるが、今日尙必要な採集であつた。又人類學雜誌の最初の十年間ほどにも、會員の報告が資料として載つて居る。風俗畫報の採集よりは少ないが之も見遁せぬものである。

大正二年に故高木敏雄氏が日本にフォクロアの調査を盛んにしようとし、それを自分が援けて「鄕土研究」を出した頃までは、此採集は實際をかしい程進んで居なかつたのである。「鄕土研究」は休刊までの四年間に千頁以上の直接採集を揭載しただけでなく、他の幾つかの本や雜誌新聞に、同種の報告を爭ひ錄するやうな流行を作つた。其功績は認められてよいと思ふ。しかし之とても地方的には可なりのむらがあり、島や山村にはまだ一向手のとゞかぬ部分も多かつた。資料の集つたのは十七八縣、しかも土地により題目によつては重複して居る。大正十四年から自分が編輯した隔月刊の「民族」の三年は、「鄕土研究」時代よりも多くの資料が集つて來た。採集にも採集者の自由な手腕を振はせるやう

に計畫しただけに、田植の行事や婚姻の資料は諸所から集つた。自分は其材料を配列によつて直ちに結論の暗示が得られるやうにして整理して掲載することを試みた。此方法を續けて行くことが出來たら、資料の比較や研究にも益する所が多かつたらうと思ふ。最近の「民俗學」や「旅と傳說」の採集記錄は、時代が進んで來ただけに有益な資料が多く集つて居る。自分が「島」の刊行を思ひ立つたのも採集の手の屆いて居ない此方面の資料を蒐集し、且つ整理する念願からであつた。

一方單行本の採集記錄も最近非常に增加して來た。學界の爲に至極喜ばしいことである。「爐邊叢書」の計畫が、日本の民間傳承の研究に拍車をかけたことは誰もが認めるところであらう。採集記錄が單行本の形で市場に現はれるといふことは、人の耳目を驚かすに足ることであつた。「爐邊叢書」の中に田舍の少年青年によつて執筆された書が多かつたことは確かに愉快なことであつた。刊行者の當初の希望は、此叢書を百卷二百卷に增大することであつた。もとより斯ういふ出版事業が、營業的に成立つ筈はなかつたが、それでも民謠集や昔話集は採算出來るまでの賣行を見た。民謠・說話・傳說が此學問の草分であるだけに人氣も多いのだらう。しかし衣食住の問題はあまりに人がやらぬやうである。信濃敎育會北安曇部會編の「北安曇郡鄕土誌稿」は、我々には最も有難い計畫記錄であるが是まで、傳說・年中行事・俚諺・民謠に並々ならぬ精力が費された。それにしても自分の「桃太郎の誕生」を刊行して居る。郡史の刊行は大正以來全國的であるが、其內容は千頁もある中で、我々の利用に堪へるのは僅かの頁である。しかもそれを見ないわけには行かない。編輯者にもよるのだが、何れも郡史刊行の育熱で高價を呼ぶに至つたことは沙汰の限りとでもいふべきである。

採集記錄が多くなることは必要なことではある。しかしそれが十分利用されることがもつと必要なことだ。今日までの採集は多く讀まない、利用しない人の手にのみ入つて居る。もつと實際に採集記錄を必要として居る文庫に入るやうにしたいものである。しかも既往の採集は行屆いたやうに思はれて居ても、同じことが繰返し採集されて居て、地圖にでも彩色して見ると甚だ不十分であることがわかる。沖繩の例などは前に述べた如くである。又個々の問題にしても或ものは多く、或ものは及ばない狀態である。問題別に地圖に彩色して見て不足の地域を知ることも必要だらう。それにしても文庫の整理といふことは此學問にとつては急務である。民間傳承の學問は今後の發展に期すべきものが多いのであるから、新しい記錄材料の爲に豫め文庫に餘地を殘して置く必要がある。科學は常に將來の發展の爲に餘地を置くことに心がけねばならぬ。此點、歷史の如き過去の文獻のみでこと足るとし、

それを蟲に喰はさぬ用心のみして居るのとは非常な用意の差である。我々の研究は今後とも絶えず計畫記錄、偶然記錄が出て來る可能性がある故、其邊の考慮をして置くことも肝要である。今まで不用と思つて居た資料だつて、今後或は入要になつて來ることがあるかも知れない。我々は文庫を輕蔑せず、現在の文庫の管理法の間違つて居ることを氣づき、其整理を先づ重要視しなければならぬ。

第六章　採集と分類

一、採集の方途

民間傳承の學問に文庫作業の必要なことは、前章に於て述べた通りである。しかし我々の學問にそれ以上必要なのは資料の採集といふことである。同じ文化科學でも我々の學問より先に生れ、先に發達したものは、既にダータが十分に集り、採集が一通り出來上つて居る。從うて今日では極く小さな發見にも苦心して居る狀態であるが、我々の學問は實にまだ事實の採集が遲れて居る。考古學、人類學でも其點似て居るが、我々のダータの大部分は今日尙未知數の狀態にあるのである。まだまだ世界の隅々には探險のとゞかぬ地、顧みられぬ事實は多いのであつて、日本だけに就いて考へても、もう十分わかつて居るやうに思はれさうであるが、まだ調査採訪の未了の地は多い。前章でもいつた如く、採集の出來て居る地を地圖に染めて見ても、それが極く一部分だけであることがわかる。如何なる問題を出して見ても、大體日本ではかうだと各地の事實を通覽することは出來ない狀態である。又我々の

氣づいて居る事は、最初の一つの發見でもつて各地を代表させ、類推することは出來ないことである。フランスのジリエロン Gillieron は、方言調査に採集する地域を定めて、卽ち劃地研究をやつて居るが、日本ではそれが絕對に出來ない。方言のみならず、葬式のやうな儀式でも村々で各違つて居て、決して共通して居ないのである。元來此學問は大きな未知數の狀態で始つた。それに何だかわかつて居るやうな氣がして居たのである。實際不明のところが多い故に、また未來も大、從うてそれにたづさはる者の希望も樂しみも大であるといへる。是が此學問の現狀である。しかも僅かばかりのわかつて居る材料が、整理せられて居ないのである。採集記錄にしても相當に多いやうには見えるが、それがほんとに混亂の狀態にあつて整理の必要にせまられて居る。文庫作業の方からいへば現在までの採集で、もうよいといふやうにも思へる。しかし我々はさうは感じないのである。我々と同方向に向つて進んで居る人は恐らく多いであらうが、採集の必要を我々と同程度に感じて居る人は少ないやうにさへ思へる。

さういふうちにも、此七八年の經驗では採集の領域は隨分擴大され、あれもこれもといふやうに採集が盛になつて來た。自分は之まで人の氣づかぬ方面に先づ鋤を入れて人を誘ひ、そこにやつて來る人が多くなると次の問題に移るやうにして、斷えず努力して前線を擴げて來たのであつた。古い史學的因襲によつて、最近までの編年史學の徒は、一度の旅行によつてでも多くの資料を齎して歸るが、學者は大體今までの使ひつけの資料でもつて說を樹て、後世恐るべしといふことを考へては居ないのである。今のところ彼等には資料採集の必要は痛切でないのである。此點西歐の學者と甚だ異つた態度といふべきである。フランスの學者などは、採集の點は比較的熱心ではないが、他人の採集はよく見て居る。他人の採集をいつも待望して居る。英國の宣敎師たちの手になる太平洋民族の生活誌は、恰もフランスの學者の爲になしたかの如く見えるほどに、彼等はよく之を利用して居る。英國の學者は自國の民間傳承を土俗誌と殆ど同じに見て居る爲に、自國の採集を忽にして居るのである。日本では此學問は一種特別な進み方をして居る。其原因は色々あるであらうが、つまり根本は學的資料が餘りに煩雜であり、採集事業が甚しく渾沌として居るからである。實際學者は資料の處置に窮して居るのである。しかも新資料の採集はまだ後から後から出て來て、一面から云へば其飽和狀態に苦しんで居る。我國に於ける現今の必要は、先づ資料を整理し、正しい有用の採集をする道筋を作ることである。

周到なる調査をしようとする慾望はもとより良いことには違ひないが、やゝもすると論理的遊戯に陷ることがある。しかして其結果の弊害を受ける者は全く我々なのである。或地方の民間傳承を、或は或人生事實を、全國的に根こそぎ調査し、採集するといふことは殆ど不可能なことで、さうさう簡

單に出來ることでないことを知る必要がある。近頃全國的に子供の遊戯を研究したといふ人があるが、調査項目による調査で、各地からハガキの返事を求めたのであつた。此方法は、なるほど全國から返事さへ集れば、それで全國的の調査だといふことは出來るが、其結果は實に危いもので不完全を免れない。しかも調査者に精確な調査をなしたといふ心持を懷かせる點が、此方法の最大の危險である。獨逸風ともいふべき手堅さがあり、根こそぎ採集出來るやうに見えるが、我々は此方法に感心しない。或學會なり學者なりが質問要項を作り、それによつて全國的に求めた返事で萬事盡せりといふことはいへないのである。屋代氏の諸國風俗問狀がなした失敗を常に繰返すことは明かである。實際人生社會に於ける疑問は事實に基づいて起るものであつて、空で起る筈のものではないのである。又一地方の行事が、常にパラレルに何處にも起るといふわけではない。六月十六日の行事は、足利時代から起つたもので、江戸と京都とでは重要な日とされて居るが、地方ではさうでない。又十月十五日は全國的に重要な日として居るが、江戸ではたゞの日である。疑問があつてこそ問は發せられる。學者が今日の貧しい力でなす問が、問題の全部でないことは明かである。問ひ殘すものの多いことは明らかである。故に質問要項に對する返事でもつて、今日の我々の必要を滿し得るとすることは出來ない。方言や、俚諺や、傳說なども、採集手帳にあるもののみを採集して可なりとするわけには行かない。項目の限定された採集手帳では疑問の生ずることを阻み、且つそれを度外視し、沒却する虞れがある。理想的な調査採集の方法は、人の敎へてくれるのを、細大漏さず記述し、現在の疑問を問ひただすばかりでなく、次々と疑問を發することの出來る箇別的な自由な採集であらう。

旅行による民間傳承の採集は、十分に出來ないやうに考へられるが、旅で得た事實の採集は興味を伴なつて居るだけに、今まで持つて居なかつた疑問をそこに起すことが出來る利益がある。旅行による採集は實際動的である。風俗問狀式の採集は餘りにも多くの缺點を有つて居る。例へばよしノルマルな相手でも、人によつては答を面白くしようとして誇張する者もあれば、遠慮勝ちに多くをいはぬ者もある。又問ふ者、答へる人の社會上の地位、學問、或は兩者の居る環境、或は文化の程度の差が甚しい時は、調査は決して十分に出來難い。やゝもすると質問が威壓になるから愼重な注意が必要である。又未開人は未開人特有の親切氣といふ風なものを持つて居て、何によらず質問された場合ノーといふことが出來ないで、イエスと答へる。それを信じて實地について調べて見ると虛妄である場合も多い。有るか無いかといふやうな問の仕方は止めるわけには行かないだらうが、此方法では極く一部分の採集しか出來ないことを覺る必要はある。今日民間傳承にたづさはる人々は、知らせたい人がする自然報告ともいふべき報告を待つて居るのである。是は呑氣なずるい方法ではあるが、採集者の素質

さへよければ結構ともいへる。しかし實際我々の經驗したところでは、採集者の腦力性癖が餘りに强く出過る爲に失望することが往々にしてある。採集家の中にはくどくどとすべてを記錄しようとする人もあれば、要點を心得て簡單に書く人もあり、ピントを外れた報告を得意がつて居る者もある。要するに自然報告は採集者の資質に左右せられることが多い。問題が何處にあるかを知つて採集して呉れると有難いが、尙不必要なことを多く書き記して我々を惱ます人が多い。

實際問題として我々が一番困るのは採集の重複である。採集者は多くなつて來たやうであるが、或地方の採集が始まると、急に其地方に幾人もの採集者が殖えて採集記錄は增加する。しかし同じものばかりが多くなるだけで、地域的にも同一記錄が重複し一層資料の繁雜を來すことになる。民謠手毬唄等は面白いだけに採集が重複し混亂も甚しい狀態にある。我々は地域の空白を埋めるやうに採集者が氣をつけて呉れることを願つて居る。地域や或は問題で採集を分業化することが出來れば、此學問將來の爲に喜ばしい。學校で生徒を使つて採集せしめることは、一寸考へるとよい方法のやうだが、少しづゝ違つたものが數多く集るだけで、無いよりまし位の成績しか擧らないのは、方言民謠の採集の例によつても明かである。要するに疑問の成長を目標にし、適切な疑問を成長させる爲に、わかり切つたことの報告の重複を避けることである。其爲には何よりも資料の分類整理といふことが必要である。資料を現在の如く亂雜に放置して居ては、此學問はいつまでも進步しないであらう。

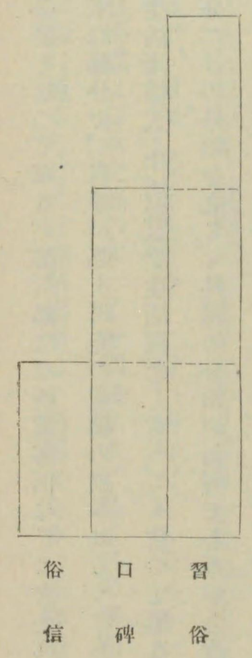
二、三部分類

自分は此亂雜な資料を整理し、必要に應じて差入れの出來るやうな分類法を企て、三年ほど前に一應それを公表した。是によつて志ある者の勞力を無駄にせず、地方にあつても必要な採集が出來るやうにすることが、自分の分類に對する念願であつた。又既往の採集がどこまで進んで居るか、今後はどの方面の採集が必要であるかを明かにしたかつたのである。社會事象の變遷して來た事實は、さうして集めた資料の分類によらなくては明らめられない。甲から乙への變化事實は、實際さう手輕にはわからないからである。社會事象を幾つか集めて、それを比較すると其事象の變化過程は割合によくわかる。比較は萬遍なく何處の隅にも觀察の目が屆くやうにすることが肝要である。此比較に便せん爲に、自分は分類の必要を叫んだのであつた。もとより自分の知識には至らぬ隈もあつて、不備はまぬがれないであらうが、此分類は出來上つたものの整理といふより、今後目的を持つて採集する人達を適宜に働かせる爲に作られたものであるから、不完全は忍ぶべきだと自ら考へて居る。

既往の分類も少なくはない。折口氏の如く獨特の分類を持つて居る人もある位である。自分は極く自然な順序に從うて案を立てゝ見た。卽ち先づ目に映ずる資料を第一部とし、耳に聞える言語資料を第二部に置き、最も微妙な心意感覺に訴へて始めて理解出來るものを第三部に入れるのである。目は採訪の最初から働き、遠くからも活動し得る。村落・住家・衣服、其他我々の研究資料で目によつて採集せられるものは甚だ多い。目の次に働くのは耳であるが、是を働かせるには近よつて行く必要がある。心意の問題は此兩者に比して尙面倒である。自分は第一部を洒落て旅人學と呼んでもよいといつて居る。通りすがりの旅人でも採集出來る部門だからである。之に倣うて第二部を寄寓者の學、第三部を同鄕人の學ともいふ。又第二部が口碑といふ語に當るところから第一部を體碑、第三部を心碑と呼んでもよいと思ふ。斯く種々の名辭を附することが出來るが、各部をそれ〴〵其內容から考察することは必要なことである。第一部は、目に映じ、生活に現はれる點から、有形文化とも生活技術誌或は生活諸相とも云ひ得る。英語の social technology を此部の名とすると、少なくとも一方に偏するやうにも思へるが、ほゞ Ethnography に近い內容だとも云へる一般習俗が第一部門の內容である。第二部は言語藝術或は口承文藝のすべてを網羅する。是は目の學問と違ひ、土地に或程度まで滯在して、其土地の言語に通じなければ理解出來ない部門である。此部門は疑問の百出があり、自然次の部門との關聯が必要となつて來る。第三部には所謂俗信なども含まれて居り、是は同鄕人同國人でなければ理解の出來ぬ部分で、自分が鄕土研究の意義の根本はこゝにあるとして居るところのものである。此三部を又生活諸樣式・生活解說・生活觀念と考へても當つて居ると思ふ。

斯く自分だけの分類を立てゝ外國の分類が如何であるかと改めてみて見ると、同じ氣持からする故か、大凡此分類と似た三部に分類がしてある。恐らく自然な氣附き易い分類なのだらう。英國のバーン女史 Miss C. Burne の「フオクロア提要」第二版の分類を見ると、第一部が信仰と行事 Belief and Practice、第二部が慣習 Customs、第三部が說話民謠等 Stories, Songs, and Sayings となつて居る。卽ち自分の案とは順序が變つて居り境目に喰ひ違ひはあるが、三部分類の根底は同じだといふことが證明せられる。フランスのセビオ P. Sébillot は「ル・フオクロール」を口承文藝 Littérature orale と傳承土俗誌 Ethnographie traditionnelle の二部に分つて居るが、第二部をまた傳承土俗誌と土俗誌的社會學 Sociologie ethnographique の二つに分け、前者を非類（天・地・水・植物）と生類（動物・人・生・幼・婚・病・死）に分ち、後者には耕作・漁撈・料理・建築及び工藝・人と人との關係・娛樂等を入れて居る。しかし其區別は明かでない。是を仔細に見ると、傳承土俗は觀念心持を含んで居て自分の第三部に該當し、土俗誌的社會學は外形にあらはれるもので、自分の一部分類に相當して居る。しかし

此分類は論理的出發點を持つて居ない。又宗教がどこにも入つて居らぬことに注意する必要がある。自分の此三部分類の案が突拍子もないものではないことは承認されたい。もとより目・耳・心の三部に分けることは自分獨自の意見ではあるが、三部ならざるべからずといふことだけは言ひ得るところと信ずる。此分類は量に於て三部各平等でない。第一門は非常に範圍廣く從うて分量も大きく、我々の採集しようと欲するものの大半は此部に屬して居る。第三門の心意諸現象は採集のし難いだけに、採集量も三部門のうち最も小である。從うて此三部分類は三重ねの餅の如く最下部の第一部門から第二部門第三部門と順次小さくなつて居る。斯ういふ分類は幾らか變に見えるが、分類をする以上、分量より內的標準による方が至當だから仕方がない。尙是をわかり易く表示すれば次の如くなるのである。



三、分類の標準

次にこの三つの部門の各門の中がどうかといふことが問題であるが、其標準が簡單なだけに右に述べた如く其內容に大小が出來て來るのである。第一部は目に見えるもの、繪や活動寫眞によつても、又通りすがりにも其一部分は採集出來るものである。是を生活技術誌と云へば大體に當るところの、日いかも知れぬが、誰にでもわかり得るものである。日の生活方法、生活樣式や又或時を定めて見えるもの、卽ち婚禮の儀式や祭などを含むものである。之をたゞ集めるだけでは考現學と異ることがないといはれるかも知れぬが、疑問から出發し、又次の疑問を起す爲に又採集するのであるから、自ら欲求と合致するものが得られるわけである。現在生活と調和せぬものを採集するなどといふ人もあるが、今日の疑問に答へられる材料ばかりでなく、其問題が導いて行く次の問題にも心附くことをも眼目とする必要がある。要するに以前から日本人の持つて居た生活が知りたいのであるから、其目的とするところが考現學と違つて居ることは明かである。我々の此學問が好奇心から出た學問であるだけに、衣食住の如き問題は之まで無視せられる傾向があ

つた。英國などでは common なものは此學問の外に置いて、此學問を狹い範圍に限つて居た。從うて日常の言語卽ち方言なども度外視して居た。すべて common sense を問題外として、ダータの採り方を限り、早くから種切を託たねばならなかつたのが英國のフォクロアであつた。新興の北歐の國などでは範圍はもつと廣くなつて居るのである。

さて資料を大體に三部門に分け各門で今までわかつて居るものを自然の順序で——自然にといふことのあたらぬ場合もあるかも知れぬが——配列することが便利であると思ふ。衣食住で云ふならば、食物は內部生活と關係深いものであるから、之は後まはしにして、先づ住居を先にする。例へば船で島へ遊びに行く場合に、先づ先に眼に着くところから順を追うて行くならば、自ら順序配列が定まるわけである。從うて住居衣服の次に食事が來る。食事にしても誰も熟知して居る常の食物から始めて、所謂晴の場合の食事、例へば宴會や婚禮のそれを後にするやうにしたい。そしてリンネ C. de Linné の植物の二十四分類表の如く、どの資料をとつても大體其分類の一部に入れ得るやうな系統だつた分類にしたいものである。たゞ漫然と文庫の複雜を斯うして整理するのだといふやうな、非科學的な分類では困るのである。採集家なり研究者が、現に自分の携はつて居る研究の部門が、全體の學問の上でどの部分を占めて居るかといふことを知ることは、絕對に必要なことである。動物學や植物學の研究家が、極く微細なものの研究をして居る場合でも、常に腦裡には、言葉を換へて言へばその研究の背後には、此分類表が存するのである。實際我々の學問も斯うなつて來ることが望ましい。荒海を航行する船は、常に今何處に居るかといふことを知つて居るからこそ、方向を定めて目的の彼岸に達し得る自信を持つて居るのである。

資料の採集が文庫內の分類と一致して居ることは此學問を發展さす上に必要なことだ。此部分の採集はもう出來て居る、此點は未だし、とわかれば、それだけ無駄が省けて計畫ある採集に向ふことが出來るわけである。本據によき分類さへあるならば通信的な研究の不便も除去せられ、學問の協同も可能になつて來るわけである。もとより分類のどの部分にも入らぬ資料だつてあるが、暫くは雜とか未定とかとして置くとしても、分類表の何處かに入れるやうに心掛くべきである。今後の採集者に此學問のどこをやつて居るかを知らせることは、第一に肝要なことである。民間傳承の資料の採集を何處までときめてかゝることは一寸困難であるが、此部分が不足して居るといふことを豫め知つて置くとよいのである。例へば婚姻・葬制の問題でも、既にわかつて居る部分と、わからぬ疑問のある部分とを承知した上でことに當ることである。斯う考へて來ると分類と共に必要なのは索引である。分類や索引の事業は、本來は公の機關である學會のすべきものであらうと考へるが、現在の日本には有力

な學會が存在して居ない。此事業は誰かがやらねばならぬのであるが、今までに誰もまだ手をつけて居ないやうである。自分などは徒に馬齒を加へて大きな論文などは書けさうにもないので、數年前から分類を志してやつとやゝ滿足し得るものを作製することが出來た。

分類の序に考へられることは、此學問に分業が可能であるか否かといふことである。もとより專門的に一つの部分を深く研究することは出來る筈ではあるが、自分はこれ〳〵の係りだといふ風に、最初から一つのことだけを全體から切離して、それに沒頭することは不可である。三部に分類することはもとより可能であるけれども、此三部門がお互に相關聯して居ることを見逃すことは出來ない。專門家になる前に全體に對する見透し、卽ち一通りの知識を用意することが絕對に必要である。其上でならば各自がその得意とするところに赴くのは隨意であつて、動物學者に蛇の專門家、虻の專門家がある如くである。そして自分の專門以外の大切な資料に氣づいた場合、其資料を必要とする人に知らせてやるといふやうになると都合がよい。今日はまだ何と云つても此學問の創始期である。分類のよいものさへ出來れば特殊な天才が現はれなくとも、多勢の協力によつて此學問は漸時進展する可能性がある。英國では民俗學會の會員がお互に自分の專門を登錄して、お互に援助をしあつて居る。此方法は面白い方法であるが、同じことをやる人ばかりが多くなつて、問題に空隙が生じて來る場合がある。自分等で北方文明協會を作つた時に試みたが失敗に終つた。實際或程度以上の期待は此方法に懸けられないが、それよりも全體的に、今日までにわかつて居るのはこゝまで、と知らせる機關が備はることの方が望ましいのである。

四、索引と用語

分類の後に必要なのは索引の作製である。索引の善惡・完全不完全は、學問の內容の進步を暗示するともいへる。索引を拵へるには索引方法を簡易にするといふことを先づ考へねばならぬ。植物なら葉や花や實の形質によることが出來るが、此學問の進步の狀態を索引によつて知るのは容易しくはない。自分は言葉、方言による索引が都合がよいと考へて居る。言葉なら此學問だけでなく、國民の國語生活をも之によつて知ることが出來て便利である。日本では外來語が多くて、言葉と實際生活との間に可なりに距離がある。從うて番號や甲乙丙などの符牒によつて、索引を作ることが便利なやうにも考へられるが、有形物だけならばそれで十分間には合ふが、第三部の如く無形の心意・觀念を主とする場合は一寸索引番號の附けやうもない。又第一部にも第二部にも困難なものがあることも事實であ

る。これらにまさか「こんなもの」「あんな心持」などといふ名稱をつけるわけにも行かない。第三部に屬する迷信俗信は定義を定めることも難しいものであるだけに、それを斯ういふ觀念といつたのではわからない場合が多い。しかし幸ひなことにそれを示す方言が割合に多く存して居る。方言採集には無形名詞や道德律を意味するものを先づ注意することである。昔話などにしても其全體を暗示するよい名が話の中の何處かに存するもので、斯んな話といつて內容をくど〳〵しく話さなくとも相手にわかる言葉はあるものである。子供の言葉などにも利用するに都合のよいものは多い。概して第三部は存外短い言葉で代表させることの出來る內容が多い。諺なども長くとも其儘使へるものが可なりにある。索引を言葉でやるといふ案は、やつて見るとそんなに困難なものではないのである。丁度都合のよい名が見附からぬ爲に、暫し索引にもあらはれず分類表にも出て來ぬことはあるが、適當のものが遂にない場合は其名稱を調製する他はない。自分は今民俗語彙とも稱すべき方言を約二萬餘り集めて居る。それから推しても言葉を索引に利用することの可能性は十分にあると思ふ。第三部の心意の部門に關するものは二萬語中僅かに千位しかないが、言葉によつて分類すると極く微細な心持まで小さく分類することが出來る。此方法は自分の喜しい發見だと祕かに誇つて居るところである。物には必ず名があるものである。從うて殊更外國語を借りずとも間に合ふ。之を頭に置いて、子供の時分から感覺的に物の名稱を敎へ込むことは、國語敎育の上にもよいことだと思つて居る。

社會的事象としては嚴存して居るが、其名がないが故に、一般に意識することの出來ないやうな事柄に、名稱を附することを目的として自分は言語に注意を向けたのであつた。方言を拾ひ上げる動機、方言を採集する目的もそこにあつた。是は言語學者の側から云へばまさしく異端であらう。今日町の者が忘れて了つて居る語で、農民だけが使用して居る言葉は多い。和名抄の如き古い文獻に現はれた地名を見ても其感は深い。自分の目的から云へば方言帖による方言採集は、斯ういふ大事なものを逸することが多いからさう期待することは出來ない。質問要項に表はせないものに却つて我々の要求するものが多いからである。よく見ると信仰上の細かい內容の區別なども、農民たちは言葉で十分して居るのである。大體第三部門の問題は、言葉で處理することが可なりに效果的であるといへる。方言は概ね無意識の保存であつて、又其使用者だけはよく其の內容に通じて居るから、之を採集の標目とし、分類の項目とし、索引の目安とすることは便利である。メリンゲル Meringer が、物と其の名稱とを不可分のものとして居るのは、恐らく自分の主張と同じ意味であらうと思はれる。新しく起つたものに對する命名や、哲學上の術語までが方言採集によつて得られるとも思はないが、今日餘りにも無反省に漢字や橫文字で簡單に濟まされて居る學問上の用語なども、それに一致する方言があるかな

いかといふことなどは一應檢討して見る必要はあると思ふ。

よき分類を利用する爲にもよき索引が必要である。索引の作製に言葉を使ふことは物を云つたり考へたりすることを正確にし得る利益があるばかりでなく、進んでは資料の採集にも是が多く役立つのである。實に是は過去を整理すると共に、未來を開發することにも手を伸し得る方法なのである。はつきりした言葉で以て分類と索引とを仕上げることは、自分のやみがたい念願なのである。今日までの資料のみでやるなら文庫作業が如何に混亂して居るとしても、斯んな面倒なことをやる必要はないかも知れない。しかし我々は此學問にはまだ〳〵野外採集が大いに必要であることを知つて居るが故に、未來の爲になるべく手わけして、無駄にならぬ觀察記錄を取るべく分類を必要とするのである。例へば年中行事にしても、正月二十三四日は古くから大師講といつて大切な日とされて居るが、此由來なども伊豆七島の諸行事を見ることによつて始めて考へられる。四月八日にしても、十月十五日にしても、其由來のわかるやうな行事は探せば何處かに殘つて居るのである。分類によつて、採集は此部分が重要だとわかることが必要なのである。今一つ索引の完成によつて得られる利益は、或行事は自分の土地のみに特別にあるといふ地方人の狹い觀念が、あちらにもこちらにも同じ種類の行事があるといふことがわかると無くなつて來る。そして學問的にそれを調べようといふ機運を釀成するに至るのである。前述の青森地方のネブタ流しの行事は特有の行事と誇られて居たが、是と同種の行事が諸地方に行はれて居ることを此地方で知らなかつたのである。

後戻りするやうであるが分業はどうしても或る程度まで進んでからでないといけない。第三部は興味深い部門ではあるが、わかつた部分のみしか說くことは出來ない。しかし第二部の言語藝術は表はれたものばかりでなく、其背後には內的なもの（第三部に屬する）を多く持つて居るだけに面白い。英國では食物のことは、それと他のものとの關聯を問題にして居ないが、經濟や政治上ばかりでなく、實に信仰とも深い關係を持つて居る。實際食物は餓ゑて食ふのではなく、精神上の拘束の下に斯く斯くの態度で、斯く斯くの形によつて食ふのである。從うて俗信を伴なひ、世間に支配され、しきたりや俚諺を背負うて居る。卽ち食物の背後には第二門第三門の分類に屬するものが影の形に添ふ如くにくつついて居るのである。要するに一部二部三部と分けたのは便宜上のことであつて、底には三部相聯繫して居ることを忘れてはならない。斯く考へて來ると小分科は事實上不可能となつて來るのである。說話が毀れて諺となり、歌物語が古跡の說明（信仰）となつて殘り、儀式はすたつて忌みきらひのみが留まつて居るのは、三部が各孤立したものでないことの證據である。

五、假定の練習

採集によつて得た資料のみの記述だけで我々の學問の目的は達せられない。必要なのは部分々々の記述や分析でなくて、其後に來るべき綜合なのである。從うて採集にしても精確にして誇張せなければ素人も亦よき採集をなし得るといつても、それはたゞそれだけである。比較研究を目的にした採集にこそ最も意義があるのである。比較は綜合を豫想する。科學的希求に最も必要な方法である。分類も索引も此方法の爲のものである。分類が分業を誘ひ起して學問を支離滅裂にすることを虞れざるを得ぬ。特殊な或一部門のみに專念して、此學問全體を振返らぬのは邪道である。斯ういふ人は玩具などを集めて居る人に多いが、道樂と學問研究との區別を十分に立てることは肝要なことである。道樂の分子をフオクロアに入れることは斷じて不可である。もとより分類は後の綜合の爲のものである故に、一部分のみを對象とすることは贊成出來ぬ。是が爲に大きな索引事業の必要を自分は說くのである。民間傳承の學問はその出發の最初は散漫なものであつた。しかし資料の採集が增加して來た今日は機械的な作業も多くなつて來て居る。是を學者が皆やるといふことの無理なことは明かである。須く外部から之を援助し、此學問の成長に資すべきである。國に大機關を設けて之を援助することが出來るなら、煩瑣な機械的作業などに學者が直接たづさはらなくてもよくなるだらう。個人で出來ることは個人でするのはもとよりのことであるが、それをより有效により有意義にしなければならぬのである。

自分のいふことに就いては、或は人は科學でもないものを物々しくいふやうに取るかも知れぬが、歷史の研究が斯ういふ點で今まで締りがなかつただけに、之を力說しなければならぬのである。餘り長い間の仕來りに忠實であるので、學問は發達して居るに拘らず科學で當然いふことを今更らしくいはねばならぬのである。世間に知れきつて居る微細なことが、或は重要な意義を有する暗示であるかも知れないのだ。しかも下らぬ小さなことばかりをやつて居るといふ非難は常に我々の上にある。それが何になるのだ、それで何かわかつたか、わからぬことをやるのは馬鹿なことだ、といふのが、批評家の我々に對する常套語である。答案が明日出來なければならぬとし、出來なければ恥とすることは、忍ぶべからざる狀態といふべきである。自然界の不可解を解くことがさう一朝の茶飯事であるべき道理はない。今後の發見によつて今日の未知數が解けるといふ期待があるところに學問の面白味がある。法則のないものは凡そ此世に存在しない筈だ。是がわかれば新發見になるのだと、今日の未知に

對する自分の興味を未來にまで殘さうとすることが必要ではないか。實際わからぬものの中に面白い意味が藏されてあるのかも知れない、重大な殘存があるかも知れない、と思へば興味はいや增す筈である。

分類と索引はこの將來の期待・目的に合致するものであればよい。實際我々の學問が範圍が廣い上に、今まで顧みられずうつちやつてあつた部分が多い。荒野に果樹を植ゑて直ちに甘い果實を期待するのが無理なのである。自分の一生でわからぬことも、或は斯んなことを意味して居るのではないかといふ假定を立てることは、學問を進歩させる動機になるかも知れない。我々は斷定の快味を知る前に、先づ假定の練習を十分に積むことが急務である。我々はいつも採集には最も敏捷に、論斷には特に遲鈍ならんことを心掛けて居る。假に現存の習慣に據つて歷史と共同の問題を解說する場合でも、少なくとも四つ五つの條件の具はることが必要と考へて居る。卽ち(一)隔絕した土地同士に信ずべき實例の多いこと、(二)保存が無意義に行はれ理由が不可解の如く見えるが、前代の殘留であることが一應は推測せられること、(三)同時代に各地に同じ現象が見られ、且つ過去の記述ともよく一致し、異種族異民族の間にも類似の風が見出せて、資料の集積と比較とが可能であること、(四)問題が餘りに平凡些事であつた爲に文書記錄の資料が偶然にすらもあまり違つて居ないこと、(五)切實に人の知らんと欲する大事な歷史であつても、在來の史學の手段だけでは明かにすることが出來ぬか、若しくはさう見られても仕方のないほどに久しく打棄てゝ置かれて居たことなどを、其條件とするのである。

民間傳承の學徒はこの未知數の興味、假定の練習に對する興味を持つ人でなければならない。問題とするところが空漠であつて、何の爲に求めて居るか判然としないながら、多くの人は此問題は斯く斯くだと斷定したがる。物事は急に解決しないのが寧ろ當然なのである。長年自分のやつて來たのは論斷を百年の後に期する心持を持つてであつた。然るに同じ仲間と目されて居る人々の中に、奇說を得意がり新しい判斷に興味を持ちすぎる人があつて、折角の希望が毀されることは殘念の至りである。論斷をさしひかへるといつても、我々は終局の目的を疑ふのではない。假定の練習を過程に持つことは、此學問に適した方度なのである。既往の文化史を淸算して是に據らしめ、新しく建て直させることが我々の宿願である。是が容易しい仕事だとは決して考へて居ないのである。今日の如く逼迫した時代は何事によらず斷定が期待される。しかし斷定を躊躇するところに我々の大なる意氣があるともいへるのである。

資料は極めて繁多であるが、今日はまだ其片端も明かになつたとはいはれぬのは事實ながら、自然科學の方を見ても、植物學なども矢張り同じ狀態である。しかしこの方は既に分類があり、學的に整

理せられて居るが、我々の方はまだ前述の如く學問的には幼稚な狀態にあつて雜然として居る。しかして各人が今入用なもののみを勝手に知つて居るだけである。道樂にならぬ程度に於て出來るだけ人の興味を喚起したいと思ふ。又今までの人々は獨斷でもつて片付けて居たが、今後は問題を深く掘下げて行く必要がある。從うて採集に豫備知識が必要になつて來る。分類の主たる目的をこゝに置くべき理由もあるといへる。又學問の範圍は廣いのであるから、研究對象は狹く限つてもよいわけである。自分の不得手を他の學問、垣根の外へ押しやらうとすることはもとより誤りではあるが、大きな全體の一部、系統のあるべきものの片端と心得、分擔によつて學問を大きく成長させる心掛が大事である。つまり手分けをして小さな個々の問題は專門家をつくり、それを集めて學問を大成させるやうに相互の協力の必要を考へねばならぬ。フォクロアは西洋で學者が感ずる程日本では骨折の學問ではない。西洋では珍奇・不可解の事象はもはや突發的にしか現はれて來ないが、日本では資料の不足を託つ必要はない。問題を解決に導く爲に、求めて資料を採集することも出來るのである。是は日本といふ國が、人種・言語の關係に於て、一國一種族一言語といふ現象をもつて居るが故であつて、一國民俗學の成立は此國にこそ先づ其可能性が考へられる理由の一がこゝに存するのである。それにしても今日の學說が明日の採集によつて訂正せられるかも知れない。それが又明後日の分類によつて又改められてもよいやうに、最初から用意しなければならない。秀れた洞察力を持つて生れた者は、僅かな材料からでも暗示を得ることが出來、しかも其推斷は假定ながら屢々當つて居ることがある。併しそれは萬人に望むべきことでもなく、完全に立證し得られた後に回顧して讃歎せらるべきであつて、さういふ非凡にして稀有な人々にのみ、此學問は常に期待するわけには行かないのである。フォクロアはどこまでも常民大衆の生活より歸納せらるべき學問であつて、豫め煙にまかし盲從させるべき英雄的事業ではないのである。採集・分類・索引・比較・綜合の事業が、此基礎の上で行はるべきであることを自分が强調する所以である。

第七章　生活諸相

一、概說

自分の三部分類の第一部、卽ち外部に現はれ眼に見える物質文化の諸相は、他の二つの部に比して最も繁多であり、且つ他の學問との聯絡點も此間に多いのである。今までは輕く土俗學の領分として讓つて顧みなかつた部分で、今後は我々が手がけなければならぬことも多い。人はやゝもすると此部門を平易なりとして研究を怠る傾向があるが、決して平易ではない。三部各々重要であるが、具體的認識はこの外部に顯れたものによらなければ得られないのである。しかして生活事實は見やうの如何で收穫の違ふもので、外人・異人ならば見たといつても、たゞ皮相を見ただけであるが、我々の見るといふのは卽ち意義を知り、且つ考へることである。一國民俗學の先づ起るべき理由と主張の基礎はこゝにあるとも云へるのである。

生活諸相の研究といつても先づ問題になるのは其範圍であるが、白狀すれば現在ではまだ限定する

ことが出來ない。どの事實を無視すべきかといふことは云ひ得ぬ。あらゆる生活事實皆採集に堪へたりといふに非ざれども、すべてに注意することが必要である。さういつても單なる人生事實又は社會知識といふのとは當然差はあるべく、寧ろ之と對立すべきものと云ふことが當るであらう。現在の文化水準で異色を備へたるものといふ人があるが、そも〳〵其異色なるものが、果して存するや否やは法則的に定めることは出來ないと思ふ。少なくともどの區域部分にも注意すべきことが紛れて居ることは事實である。きりとて總てを採集する必要はなく、取捨選擇の基礎は存して居るべきである。しかして一定の標準に基いて採集する區域を考慮する必要がある。此點、自然科學の採集法と似たりといふべきで、採集を急ぐ必要のあるのは、打遣つて置くと消えるもの、今まさに消えかゝつて居るものである。大體採集の標準を此邊に置いて取りかゝれば間違ひはない筈である。例へば芝居といふ名は普通名詞として存して居るが、實際の態樣は全く新たであつて、もと芝の上で見物する演奏が卽ち芝居であつたといふことは、今日の都會の芝居を見たのではわからない。今日尙芝の上で見物せられる演奏は別に殘存して居るが、是は忘れられ消えかゝらうとして居る。採集は先づ斯うしたものからすることが肝要なのである。

英國人が好んで使ふ Custom といふ語は、普通常識的に風俗習慣と譯され、分類では第一部に入れられるのがきまりではあるが、其範圍は廣くも狹くも解せられる。古い日本語に「ナラハシ」といふ語があるが、其語義の中には式・作法は含まれるか否かは一寸考慮を要する。式・作法は意識的のものであるから、ナラハシの他と考へる方がよいやうに思はれる。儀式的な意識なしにする辭儀・頷き等の擧動卽ち所作は、之また慣習よりは輕いもので、法式を眼中に置かず、自然個人的な差異を持つて居、「習はし」の語義の外にあるやうに思へる。斯ういふ風に考へて來ると式・作法と一般的な習はしと所作とは三段をなす別のものと考へられるのである。採集は此部面に於ては稍進んで居る。しかし今日までの採集は分類を立てゝ正確にやつて居るわけでないから、むらがあり選り食ひの迹がある。地域的にも問題の上にも尙多くのものが殘つて居り、且つ必ずしも類推と代表とを許さないが、此十年は我々の爲には空しく過ぎなかつた。今後の採集者を指導するに足る收穫はあつたとも云へるのである。今までならば見過したやうな微細な特徵をも、此頃の採集は氣づかずには居ない程練習を積んで居るのである。大體に於て現在尙解釋し難い事實に、人々の注意を向け得らるゝやうになつたことはよい傾向である。明治十年頃の人類學界の採集と、今日の採集とを比較して見ると、此間の進步は明瞭にわかる。注意が微に入り細を穿つやうになり、問題の選擇もよくなつて居る。

物の外形にしても、その背後にあるものの傳承に注意するやうにしなければならぬ。畫家寫眞師と

我々との相違は、外形や色彩を直ちに採集することなく、その奥に潜むもの、社會的動因ともいふべきものに對して注意するか否かの點にある。草履は秋毎に作り、菅笠は田植毎に買ふ故、常に新しいといひ得るが、少しづゝ變りつゝも尙變らず殘るものがある。草履の鼻緒のハナネジリ、角ムスビの殘る理由如何といふことは、それを今日まで持つて來た背後の力に考へ及ぶことが必要である。この背後のものを考へることは、恐らく一國民俗學徒と殊俗誌家との根本的な差のあるところであらう。一つの杓子の形、屋根の棟の飾りにもいつも傳へる部分と變る部分とがある。變へようとせずとも變り、殘さうと思はないのに殘るものがあることは、採集者に可なり大きな教育であつた。云はず語らずの間にそれが認められて來たのである。以前は少し風變りのものがあると直ちに南洋・希臘から傳はつたものといふ風に考へられた。我々の國の三千年の歷史は、國民生活の全部が少しづゝ變化する三千年であつたのである。是に氣づいたことは明治時代の土俗觀察から考へれば格段の進歩であつた。我々の求めるものは傳承であつて、型の性質を明らかにし、シンボルを知り、物の背後にあるものを知ることが出來れば、それで目的は達したといふべきである。それに近よつて行く路は今ある形と名によるの他はない。たゞ事實のみが法則を示す。採集は此途を進むより他ないのである。例へば子供の產着に麻の模樣のある布を用ゐるが、それが大事なものなら、我々は今ある型、今ある名から研究を始めるより他方法はないのである。中央亞細亞の如く金石のみを使用し、其上乾燥な土地ならばいざ知らず、我國の如く腐り易い材料を使用する國では、生活の formula を研究するには、是からのみしか近づくことは出來ない。或は書に基いて型の性質を推理することが出來るといふ人もあるだらうが結果の價値が違ふ。史家の史料の取扱ひもまちまちで、支那中世の研究を字義のみで知らうとする人さへあるけれども、それを我國で眞似ようものなら人笑はせの種である。一度文獻の賴りなさを認めたならば、此外形以外何物からも入れぬことが了解出來るであらう。外形は內に傳はるものを知る手段である。長い間の政治經濟の變化の間を、變化せずに傳はつて來た無形の趣味、それを技術は傳へて居るのであつて、技術は民族に伴なふものだといへる。外形の背後に內的に橫はるものにまで注意して來ると、もう一部とか二部とか三部とかの分類は借り物であつて、民間傳承の研究は終極では分れずに一致して了ふことがわかるのである。從うて一部の專門家二部の專門家はあり得ない筈である。研究の過程に於ては分業でも最後は一つの手段と考へることが肝要である。

金石其他の殘存物によつてする學問、實物によつてのみ昔を考察する考古學では、恰も史學が文字を大事がり、耳の資料の口傳を危ながるやうに、我々が「型」によつて昔を解說せんとするのを危ながる。もとよりたゞ一つの型によつて內容を推論することは危險であり、變遷の過程を考定することは

早計である。しかし同じやうな型が何千何萬と出現し、其變化の順序を復元することの出來る場合は、卽ち前述した重出立證法による場合は、比較によつて順序を立てるのであるから危險不安はないわけである。此點單一の事實から類推する方法よりは勝つて居ることは明らかである。考古學の方法が手堅く、我々の方法危險多しとは云へない筈である。現在までの採集だけでも事實に於てさういふ判別を明かにして居る。たつた一つの證據で舊き事實を說明しようとする者もあるやうだが、我々の學問は史學の證明し解說し得ざるものを對象として居るのであるから、それは我々の態度とは違ふことはもとよりのことである。我々の學問は古今を通じて流れて居る法則、在來の學問で見つけ得なかつた法則を探求する爲に興つたのである。

二、二通りの生活

今日の如く近世化して了つた時代に於ても、衣食住の實際を見ると幾つかの法則があるらしい推論は得られる。昔は根本に今日の經濟生活と違ふやり方が存して居たらしいのである。二通りの生活といふのは卽ち常の生活と改つた特別の生活とを意味するのであつて、是はフォクロアによつて發見せられた一つの大きな生活法則である。この二つの生活は卽ち晴と褻との差別であるが、以前は食物にしても特別の日卽ち晴の日のそれは大切なものであつたが、それが漸時今日の一般人が考へて居る如く、日常のパンの問題の方が生活上の主要問題となつて來たのである。晴と褻との對立は衣服に於て殊に顯著であつたやうに考へられる。晴着といふ語は標準語となつて存し、褻着といふ語も對馬五島天草等九州の島々には方言として今日尙行はれて居る。平素はどうでもよいが晴の日ばかりはといふ考が、以前の人々の心を支配して居たのである。斯うして居れば人生は安全である、次々の者も此方法で生活して行けとて示す型は、每日の生活で示されずに、特定の節々の生活に表示されて居る。此慣習の基礎になつて居るのは一つの古くからの信仰か、それを裏づけて居る各人の經驗であると思はれるのである。父祖の時代から傳來して來たものを、そのまゝ守つて居れば安全だ、といふのは經驗を重んずるのであるが、晴の日の特別に各人の働が緊張し、昂奮する意義を重く見て居た爲だといへる。生存はもとより計畫的であつた。殊に子孫の爲に幸福と安全を期する意志、若しくは是に信賴する心持、是が慣習といふ形になりてあらはれるのである。同じことをして居れば、最少限度の保證がある。必ずしも變化を好まないのではないのである。從うて許されるなら奔放な改革がそこに生じて來るのである。

であるから我々の採集事實が特別の時に偏ることはやむを得ぬことである。古くから變化しない部分、或は眠つて居る經驗が、特別の時に眼を覺すことは常に見られるところである。たゞの觀察ではそれがわからず、興味なく重要性のないものに見える。異邦人の觀察者にはいつ歩いても同じものばかりが存する樣に思へるだらうが、外部者の眼に古いものがはつきりと入る時がある。採集者は平素は實際無意味な所にぶつかることが多い。餘程かけ離れた生活をして居る地ならば、土俗誌流に見ることが出來て都合がよいのである。それにしても近世人の顏の如きも特殊な日には一種變つた人の如くに見えることのあるのは否めない。それらの日に於ては人は昔からの生活を繰返すのである。元日や昨日の鬼が禮に來る、といふやうなのは、正月には幾分違つた人になることを江戸期の人も見たのかも知れない。卽ち平素は隱れて見えないものが、特別の晴の日などに顯はれるのである。近世化した生活の中にも古い時代の生活の跡は見出される。一般にありふれた問題を考へる場合、我々から云つていつでも同じ價値の生活をして居ると思ふのは間違ひである。民間傳承の研究と土俗誌との研究の差は此邊にもあるのである。我々の日常生活を平板に叙述したとて其價値は大してあるわけでない。採集し記錄するには、何を採集し記錄するかといふ自覺が必要である。そしてそれと共に其採集の中にあるものの重要性を考へることも必要になつて來る。

採集の時期と方法とが問題であることは我々の忘れてならぬことである。我々の生活には何によらず前述の他處行き卽ち晴と平常卽ち褻との相違が常にある。食物の平凡な例を見ても、之に伴なふ種種のものがそこにあるのがわかる。食物の贈答交換が度々行はれるのは多く晴の日に於てである。彼岸の牡丹餅など先方にあるのがわかつて居ても贈る。又一定の日には一定の親方――銚漿親・名付親・媒人・取上婆等には餅などを贈呈し、向うからも矢張り贈つて居る所がある。日本のやうに食物を贈りあふ例は文明國では珍しい。他には見られぬところである。是は所謂カハリモノの作法で、變つた品の交換を意味するのである。古風は毀れては居るが、機會ある毎にそれが顯はれるのである。是を一概に國民性と云つて了ふことは警戒を要するが、特殊なものは一緒に食はねば――共同飲食をせねばならぬと思ふ特殊な氣持からすることであつて、それが今も殘つて居るのである。宴會も亦共同飲食であつたのである。酒や餅のあるのは限られた日であつた。今でも古い「しきたり」がそのまゝ殘つて居て、昔の通りに忠實に行はれて居る處は多い。斯うもよく舊慣が守られて居ると思ふ程である。我我は云はゞ拘束の多い生活をこの特別の方面では今日尙しつゞけて居るのである。

しかし此拘束をかき亂し毀さんとする力が常に存する。動的な力が多く此方面から現はれるのである。是はどうにも仕方のない阻止することの出來ぬ人間の自然の事實である。小さな團體の動かぬ生

活に外部からの力が加つて、それが絶えず變動するに到るのである。之がなければ以前からの生活の型は完全に殘るべき筈であつた。晴の衣服、晴の食事は都會地などでは平常なものとなつて了つて居る。卽ち何によらず褻と晴とは混亂して居る。以前は稀にしか出現しなかつた昂奮の意義が、漸時輕く見られるやうになつて斯うなつたのである。現代人は少しづゝ常に昂奮の狀態に居るといへるのである。其原因が新しい交通にあつたのではなかつたかと考へられる。

三、新たなる交通

交通によつて前代生活が改訂せられ、變化させられたことは大きい。今日の社會が斯くの如く複雜な相を持つに至つたのは、一に交通によるのである。文化史が此問題に就いて我々を啓發して呉れたことはいふまでもないことである。限られた島の中だけで生活して居るのならいざ知らず、他との交渉が生じて來ると交通の問題が起つて來る。人は集りて生活し、外部と交際し互に呼び合ふことを欲する者である。我々の社會事象文化現象を斯くも複雜にした原因は多々あるであらうが、新たなる交通によつて促進せしめられた家庭生活の變化、寄寓婚姻の方法の變遷、或は市の交易の變革等も多く影響して居るのである。我々の生活は、舊慣をたゞ墨守すれば古いものが殘つて居るが、それを自然のまゝに放任する時は直ちに變化する。我々の古い生活が殘つて居ることを說くと共に、とゞまらず變化するものを說かねばならぬ。

婚姻は重大な人生事實であるが、是も亦變遷の道を通つて來て今日の如くなつたことは明かである。違つた者同志の結婚による結合が、新たなる時代の外部交通を促進した影響は見遁せない。親子の緣を結ぶことは日本では面白く發達した。卽ち烏帽子親・鐵漿親・名附親を作る事や、又舅・師匠・親方などの契りを結ぶ事は、皆根本に親子の緣を結ぶ觀念が働いて居るのであつた。是は最初は狹い範圍に特殊な風としてあつたのかも知れないが、それが漸時大きくなり、野心的なものは遠くからも求めてやつて來るやうになつたのであらう。國が一つの協同體になつた基も此邊にあるといへようか。力の强い者が外にあればそれに從つて子分になつたのであらう。緣組などにしてもその最初の形は不明であるけれど、以前は或る定つた婚姻團體があつて、其の團體內で婚姻が取行はれて居たのが、百軒の中の上流の二三軒は十里二十里離れた遠方の、比較的地位財力の釣合つた家と緣組するやうになつて外部との交渉が多くなつた。今日では嫁入が無い限りは、婚姻はまだ成立たぬもののやうになつて居るが、以前は嫁入の前に聟入といふものがあつて、時としては其中間の時が二年三年も續いたのであ

る。婚舍を聟の家に置くやうになつて始めて嫁入といふ儀式が起つて來たのであるが、此風は疑ひもなく遠方婚姻の必要から出たものである。婚姻の變化――聟入がなくなつて直ちに嫁入になるまでの過程は、交通及び文化現象の上に注意を向けなければならぬ大きな問題である。市場の起原にしても、折口氏が既に云つて居る如く、苞をもつて往訪し合つて居たのが、やがて日を定めて來るやうになり、いつか知らず兩者の中間に出會ふべき場所が生じたのが市場となつたのであらう。今日の市場の出現までの各段階が、今日尙殘つて居る各地の市場諸相を見ると推知出來る。一方に於て世界的な交易や取引が行はれて居る今日、昔の市の名殘はあちこちに、尙殘存して我々に敎へてくれる所は多い。

人間の自然の性情が、卽ち新しきものに向つて行く心持と、古いものにいつまでも愛着を感ずる心根とが、我々の生活に影響して居るところは多いのである。生活諸相によつて直ちに古い型（フオルミユラ）を見ようとすると、推理に混亂を來し厄介なことになるのは明かであるが、昔から今日まで經て來た道程の變化を吟味しようとする者には、津々たる興味がそこにあるのである。此意味に於て商業の發達や婚姻の變化は、民間傳承の研究の好題目なのである。交通が盛に行はれるやうになつたのはさう古い時代からのことではない。親族關係などが今日の如くなつたのも近世に入つてからの著しい變化なのである。古いことを調べる者には交通は煩はしい種であるといへる。我々の學問の領域は實に大きい。

從うて將來此學問が文化史の全體に、發言權を持ち得る豫想はつくのである。稍もすると我國の暗黑時代の如く云はれる足利時代から江戸時代への推移過程には、面白い研究題目が實に多く含まれて居る。衣食住の問題、生產方法及び交通の問題、又勞働關係の變らずに居られなかつた理由等、一として忽諸に附することの出來ない問題である。今日の經濟史家は上代といへば直ちに奴隷制度を考へようとするが、それは多くの中のたゞ一つの問題であることに氣が附かぬのである。「奴婢制度」の如き、以前は可なりに複雜であつた。之を直ちに飜譯學問で相似一致と說くけには行かないのである。今日は其中の二つ三つかだけが殘つて居ることが知られて居るばかりである。

民間傳承が一度人は交通し、且つ交通も亦成長するものであることに氣づけば、その資料採集上の注意點も自らわかつて來る。實際廣い意味の社交が、社會事象を今日の如くならしめた點は面白い研究題目なのである。日本人の海上の交通の過去は十分に判つて居ない。遊女の問題は海上の交通と結び附けて考へるべき問題であるが、曾て彼女等は全國の湊津驛に於て、唯一の遊行する女婦として知られて居たことがあつた。さうして又異性の最も婚姻し易き者として、多くの異性の妻問ひに答へたことも事實である。寄寓を普通とした江戸や大阪の旅人たちが、茶屋と其女たちを利用したのは己むを得なかつたかも知れぬ。一年に一度しか會ふことも出來ないやうな遠隔の地からの妻問ひ、風の吹き

まはしでも惡ければそれさへ覺束ない夫婦關係、其最初は明かに一種の內妻であり、若しくは最もあきらめのよい地方妻であつたのである。街道は夙く往來が繁くなつて、同じ過客の再び訪ふ者が少なく、一夜妻のはかない緣が多かつたが、海の湊では年を重ねて來ては長期の逗留をする船の衆があつた。今でも馴染客なる語が存するが、さういふ人たちを指すのである。別離を哀怨する歌謠は多い。もとより別れて再び來ぬ人もあつたが、消息は久しく通じて居た。共同の食事をし、婚を通じた後の交通がつゞけられたのである。特殊な親類といふ感じがもとはあつたのである。これ皆新しい交通によつて複雜化せられた所であるが、其資料の餘りにも少ないが爲に、誰も考へようとしないのである。港の生活は墮落腐敗したものといふが、其根底を誰も見窮めて居ないのである。港の人々が輕薄であり、男が亂暴であるといふ理由なども、民間傳承で究めなければ、他のどの學問も之を明かにし得ないであらう。

四、曆と經驗

最近の十年間に曆の觀念が變つて來たことは著しい。我々の民間曆はもと小さい經驗を基とし、農民に一年中の重要な日を知らせる方法であつたのである。之に反して、官府朝廷の曆は制度上のもので、時を授ける權能によつて、時候天象を異にした土地までを都府の文明に據らしめようとし、正月其他の儀式を國內一樣に行はせようとするもので、實際に政治上の方便であり、民族統一の手段であつたのである。しかして天象や雨風といふやうな周圍の事情に據り、地方の經驗を土臺として出來た舊來民間曆は、文字で書かれた官府の政治上の曆の爲に消滅させられた。しかし大綱は官府のそれに據るとしても、村などの生活に於ては細部の自由はもとより存した。人間が利巧になれば前年の曆を全部改廢することを要しない、其一部分だけを改めて濟まさうとする。太陰曆を太陽曆に改めたやうな、新舊の曆の改廢は、實は日本人には初度の經驗ではなかつたのであつて、もと太陰曆を採用したのも官府の指導によることであつた。在來の民間曆が、此太陰曆にも妥協して居るのである。日本人は元來舊い經驗を續ける氣持が强かつたのであらう。民間の年中行事を見てもそれが十分に伺へるのである。

年中行事といふ言葉はもと朝廷のものであつて、中央で行ふ行事の備忘の如きものであつた。從うて各地のことを語ることの出來ないものであつたのである。卽ち年中行事は有職のものであつて、公に仕へる者の必要とした知識であつた。我々が民間の年中行事に興味を持つのは、之によつて變化し

た世相交通の間にあつて、尙昔の生活をとゞめて居るのは何かといふことを知り得る點である。この舊習の保存傳承こそ國民の生活經驗と不可分のものである。今まで謂はれて居た年中行事の研究と、我々の民間年中行事の調査研究とは、其目的が違つて居るのである。自分の鄕里の播磨の各郡では、ニジウソと稱し霜月の二十三日に小豆飯を焚くことになつて居るが、この二十三日及びその翌日を大師講として大事にして居る地は多い。今日までの多くの書の此問題に關する解說は皆誤つて居る。此日の行事を廣く比較して見ると、其重要な理由はわかるのである。大師といふのは神の子で、この神の子が此季節に來訪するのを祭るのである。是が重要な今日の正月に該當す日であるといふことは、此日にたべる食物によつて推知せられる。曾て日本傳說集（アルス兒童文庫）に此論の一部を發表したのであるが、此日が弘法大師や親鸞上人と關係のないことだけは明かである。二十三日は丁度十一月の滿月から一週間後で、今日の冬至に該當し、之から日がだん〳〵長くなり、天象の方から云つても季節の變り目になつて居るのである。自分などは是が西洋のクリスマスと何か關係のあることと考へて居る。偶然の一致といふには餘りに符合して居る。

四月八日を釋迦の誕生日とするが、食物をさげて此日山に登る風習のある地は多い。是も佛の降誕會と本來は別々のものであつたことの證明は困難でないやうに思へる。其他五月二十八日、六月十六日、十一月十五日の如き、近頃の民間信仰からは說明のつかぬ民間行事が凡そ二十位あるが、其各々に隱れた重要な意味があるだらうことは推測に難くない。一年三百六十五日の循環の境堺が、以前は何處にあつたかまだ十分に明かにされて居ない。太陽曆の前には舊曆の一月一日であつたことはいふまでもないが、其前には舊曆の正月の十四日十五日の滿月の日が年越ではなかつたらうか。御湯殿上日記に記されて居る朝廷の行事で見ると、或は正月の六日七日がさうでなかつたかとも思はれる。此日が支那の人日に該當する點も考へ合すべきであらう。殊に前夜を大切にして居る點は注意すべきである。

自分が第一部分類の生活諸相の中で、民間曆を大事な項目とする理由は、是を强力な力でもつて常民が持ちこたへて來た點にある。今日までの我々の力では、まだ其理由が不明であつて說明のつかぬものは多く、動かぬ法則を年中行事の中から抽出することも出來ないが、外部との新交通の影響を受けつゝ今日まで來たことは、今後此方面の研究の目標になり得ると思はれる。有職研究家の如きは年中行事を他の目的の爲にのみ研究して、それ自身に何等の知識をも提供せぬものの如く見て居るが、實際此中にこそ常民の人生觀・社會觀が含まれて居るのである。死を注意して見れば、靈とか他界とかの觀念が、死に伴なふ儀式や、忌嫌ひ呪禁等の外形にあらはれるものなどによつてわかる如く、民衆の人生とか現世に對する考への多くが、此年中行事の中に隱れて居ると云へる。自分と子孫の幸福

のみを目的として居た舊い時代に、既に之だけの複雜さを示して居るのである。何をさし置いても此中から大事なものを抽き出すことが必要である。外界との折合にしても、今日の人の考への如く單純に、人間の淺はかさでもつて巧んだ智慧や技術のみで處理出來るものと考へず、巧妙な生き方は定つた折目々々の日によくすることが大切なことであつたのである。所謂晴の機會を選び吉日を選んで仕事をすることが、昔は最も大事なことであつたのである。「ヒジリ」といふのは卽ちこの日の吉凶を辯別することであつて、それをなし得る人こそ聖人であつたのである。よい日を選ぶといふことは舊い生活ではそれほど大事なことであつた。特殊な日のみを守る、定つた日は反省をするといふばかりでなく、其日は何物かの監督の下にある氣持で、愼み恐れたのである。それが一寸狂つてももうもとの形はなくなつて了はねばならなかつたのである。

五、藝術の根源

藝術の起りは他の生活諸相と異つて面白い研究題目である。殊に我國に於ては、藝術の宗教起源に就いて說を立てるのによい資料が、民間傳承の中に多く見られる。祭の日の晴の儀式などには、人々の目が皆一樣に一つの方向に向つて注がれるといふやうな印象深い調和がある。最初は法式によつてのみ縛られて居る統一だが、やがて神祕的な昂奮と面白さとを、人々は皆味はせるのである。是は宗教の發達史の中では冷淡に取扱はれて居る部分であるといへるが、實際古くからの宗教の反映は、一人一人個人的に顯はれるものではなくして、全體の雰圍氣とでもいふべきものの中に現はれる場合が多い。我國に於てならば、外人の書物によらずとも宗教儀式の現象だけからでも、諸藝術の宗教起源は說明することが出來ると思ふ。或は單なる思索のみからでも說明することが出來るかも知れぬが、そんな面倒なことをしなくとも、眼前の事實だけを集めても、歸納的に說を樹てられると思はれる。日本人の世界のフォクロアに對してなし得るであらう一つの貢獻がここにあり得るともいへよう。日本人は宗教儀式の形からの强制があつたからでもあらうか、現在社會の潤ひがあり色彩りの豐かな部分は、晴の日の法式の束縛に基礎を持たぬものはない。それが單なる保存でなく、發達を遂げ、天才を生じ、國の華となつて存して居るのである。フォクロアのやるべき可なり大きな題目といふべきである。一二の例を擧げてそれを說明しよう。

今日日本の殆どすべての家庭に行はれて居る立花生花の如きも、外國に見られぬ一つの特殊な藝術と云へる。是に多くの流派のあることは人の知るところである。記錄に據ると室町時代の終頃から始

つたもので、今日の池の坊の如きは宮廷の御用を勤めた先祖から傳つたものである。その今日の如き生け方も漸時に年を經て定まつて來たのである。この花を生けるといふことは、最初は七月の七日ときまつて居た。それは四月の花を取つて來て戸外に挿し、又は高い棹の尖端に飾つて祭をするのと同じく、精靈の眼を悦ばせる爲に、秋の野山を飾る萩・桔梗・女郎花等の草花を、俗にいふ盆花として飾ることから始つたのである。此行事は又正月の門飾りに松を飾るのに該當するものであるが、盆は人の往來が繁き故に是が發達し、改良されて生花となつたのである。盆の行事でもう一つ注意すべきは、我國に花火が發達したことである。花火の種類が多いのは、もとより火藥の發明が起つてからのものであるべきであるが、之が多く盆に限つて行はれるといふには理由がなければならぬ。之が盆の行事の迎火送火を焚く儀式と關聯のあることだけは想像に難くない。信州の高井郡で子供等が盆の十三日の夜、「爺さん婆さん、此あかり麥でお出やれ、おでやーれ。」と麥稈や豆殼を焚いて唱へ、備前の邑久郡などで、「ボニの佛樣ー、是についていにやーれ。」と、村人が集つて唱へ、十六日には村の子供達が麥稈を貰ひ集めて鉦を鳴らしつゝ之を焚く行事を見ても、花火との關係を思はないでは居られぬ。花火の技術が支那からの渡來だとしても、日本で特殊の發達をし、之が西洋にまで傳つて行つたことは少しは自慢してもよい筈である。

祭の日に家の庭の正面に木を建てることは、正月の門松と同じ意味のものであるが、是が又日本の特殊な庭園藝術に發達して居るのである。普通人の一寸した庭先にも必ず松は附物となつて居る。添へるに岩を以てすることは全國一樣の風でもある。松の枝の垂れたのを梯(はし)として、天より天降(あも)り來る神を祭らうとしたのが、そもそもこの木を庭に植ゑる起りであつたと自分は思つて居る。さういふ信仰行事が絶えて了つた後まで、庭前に綠の松の伸び榮えて行くことを、家の瑞相と結びつけて考へる習はしが尙殘つて居るのである。卽ち是がもとは神を迎へる祭壇であつたとすれば、藝術の宗敎起源はこゝにも明かである。「ニハ」といふのは卽ち作業場であつて、其作業場で祭が行はれるのであるが、麥搗き稻扱き等の農事には必ずそれと共に祭を行ふべき神樣があつたのである。庭師の技術の根源は、松の植ゑ方石の配り方の多く例を見ると自らわかる。最も淸淨とする場所に一定の樹木を植ゑ、主人も客もそれを眺めて安らかさを感ずるのは、近頃始つた趣味ではないのである。貴人の庭造りなら記述された歷史でもわかるかも知れないが、常民の木を樹てゝ神靈を迎へんとして造つた庭は、正しく民間傳承の學問の解說すべき領分といふべきであらう。

女が改まつた晴の日に白粉を塗り紅をさすのは、婚禮とか神を祭る日に限られて居た。卽ち普通の日と違つた心持になる爲であつた。顏に顏料を塗ることだけで、心持が違つて來るといふのは內部的